

日本建築協会  
The Architectural Association of Japan

August

1955

36

# 建築と社會

ARCHITECTURE & COMMUNITY

安井武雄特集号

# 高層建築の設備に



## 日立エレベータ



東京ガスビルディング内

日立エレベータ

各種エレベータ  
エスカレータ  
ダムウエータ

日立製作所

TRADE MARK



# DOG

地下鉄、高架鉄道の如き激しい  
震動箇所でも弊社製品は完璧  
の防水効果を発揮して居ります

型録・見本・仕様書  
御報呈上

## メンブレン式防水

の補強材料は30年の経厂を誇る

## ドック印で!!

- |      |                     |
|------|---------------------|
| ドック印 | アスファルトルーフィング        |
| 〃    | アスファルトフェルト          |
| 〃    | キンマレアタイト (高級瀝青金麻布)  |
| 〃    | ヘツシヤンファブリック (瀝青黄麻布) |
| 〃    | コットンファブリック (瀝青綿布)   |
| 〃    | 白麻ファブリック (瀝青苧麻布)    |
| 〃    | ゲオンタイト (伸縮目地板)      |



日本工業規格表示許可工場

## 株式会社 工英社

大阪市西成区橋通9丁目24番地 電話 天下茶屋 4628番

## 会

## 告

### 御

### 礼

1. 小野田セメント株式会社殿から、同社で製作したセメント製造工程、同試験状況などを撮影した天然色スライド「セメント」一巻と同説明録音テープ一巻の御寄贈を受けました。早速コンクリート技能講座講習会に於て教材として利用致しました。

1. 大阪生コンクリート株式会社殿の御好意によつて、8月2日から三日間、コンクリート実習講習会を同社併工場実験室に於て行いました。講師のほか連日会社幹部諸氏の御出席と数人の指導員の実験指導を得て、充分所期の目的を達することができました。

1. 鴻池組、大林組、竹中工務店、銭高組、松村組、藤木工務店、浅沼組各社殿の御後援によつて、8月6日英人座に於て催しました「見学と懇親の会」は非常な盛会をみて、百五十余人の参会者先輩後輩相交えて歓談、好評裡に閉会致しました。

以上本会事業に対して各位より多大の御協力を賜わり洵に感謝に堪えません。茲に深甚の謝意を表して御厚礼申し上げます。

昭和30年8月

社団法人 日本建築協会

追てスライド「セメント」および同説明録音テープは、御利用の向には貸出しを致しますから事務局まで御申下さい。

### 会費御払込についてお願い

最近会費を払込みの実績が大変低下して、運営上非常に困難を来しております。本年度上半期分迄の会費未納の向は至急御払込下さるようお願い致します。

社団法人 日本建築協会事務局

## 戸川 弘 君 停 年 退 職 の 件

戸川 弘君停年によつて退職致すこととなり下記の通り発令されました。

書記（朝日ビル主管）戸川 弘停年により職を解く。

昭和30年7月23日

社団法人 日 本 建 築 協 会

## 戸川書記退職記念品贈呈資金募集

会員各位には連日酷暑の折柄色々御清栄のこととお慶び申し上げます。

扱て本会書記戸川弘君が今後別掲の通り停年を以て退職致しました。同君は昭和十年本会書記を拝命、爾来二十余年孜々として業務に精励し、大戦末期他の職員が本会を離れ去つた後も踏み止つて本会を守り続け、終戦後本会再建に際してはその努力尠からざるものがありました。その後大阪府建築士会が結成されて本会がその事務を引き受けるに及び、主として同会並に日本建築設計監理協会関西支部の事務を処理し、本会に於ける最古参の職員として、本会の事業遂行に尽して参つたのであります。

今般その退職に際し、同君多年の御苦勞を謝しその功に酬いるため記念品を贈呈致して些か慰めたいと存じます。金額の多少にかかわらず御応募賜りますれば洵に幸甚の至りに存じます。何卒有志の方々の御賛成をお願い申し上げます。

昭和30年8月

社団法人 日 本 建 築 協 会 会 長 竹 腰 健 造

### 記

1. 締 切 昭和30年9月末日 1. 申 込 先 大阪市東区京橋三丁目 大阪建設会館

日本建築協会分室 戸川書記記念品贈呈資金募集係宛

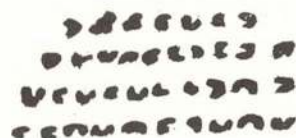
1. 贈呈方法 については御一任願ひ度く存じます。

8月6日の美人座における見学と懇親の会での記念写真ができましたので、希望者は至急事務局までお申込下さい。

# 建築と社會

## 8

安井武雄特集号



### 目 次

#### 作 品 作 風

梅田ビルディング……………7

筑後市庁舎競技設計当選案 ……18

扶桑相互銀行鳥取本店……………19

オブトンカメラ店 ……………26

トルコセンター……………27

建 築 の 眼 ……………6

建築家ビュウギンの言葉……………28

梅田ビル批判会記 会勢委員会編 ……29

これからの建築技術教育は……………33

委員会活動の連絡と協力について ……39

ガラス帳壁の解説……………浦辺鎮太郎…40

窓 ……………中野 忠弥…42

商都かたぎ・主都かたぎ……………44

技 術 講 座 ……………

リミットデザインについて……………坂 静雄…55

紫煙室・家と生活と女性 ……………竹久虹之助…59

会 報……………60



電車の中で可愛らしい女の子に会う。さげているハンドバッグは竹細工で、何か果物のような飾りがついている。ふとみると新鮮な感じだ。しかしあれを毎日ながめていたのはすぐいや気がさすだろう。女の子が次々と身のまわりの装身具を買いたがるのも無理はない。流行品づくりの商人のたくまじさに感心する。建築屋がこれと張合つてみても相手は食費もへらしておめかしする女の子でないからそううまくいくまい。但し一部の建築にはたしかに共通するものがあるし、それで結構やつている連中もいる。それよりも心配に思つたのは、あれを家に帰つてどこにしているのだろうかという事だつた。装身具を幾通りもしまつておけるゆつたりした屋敷敷まいの令嬢ではなからう。アパートの鴨居にワンピースとならんでハンドバッグがぶらさげられているのを想像してみる。それだけなら案外詩的かもしれない。しかしどうやら建築家が得意になつてデザインをする空間とは縁がなさそうだ。このチグハグの責任はどちらにもないとはいへまい。(U)

建築の眼：担当50音順：小川正・西

### 画報建築史の発刊をのぞむ

開封の手紙がつけば、振替用紙封入の何々会費払込めという状態の私であるが、その上に画報近代300年史の予約に入つて2冊まで配本をうけた。この画報近代300年史の発行所から以前に出た画報近代百年史は大変高く評価された。300年史もこれにおとらぬ出来栄である。イギリスのもので Trevelyan 著の Illustrated English Social History も良い本であるが、これ以上の出来栄である。これをみて建築史の書物も、せめて日本建築史だけでもこの近代300年史のように、政治社会、経済の基礎の上に画報的に編纂した詳しいものがあつたら、どれ程、有益であろうかと考えるのである。

もつとも、日本建築学会で教科書用につくつた図集は出てはいるが、これの20倍位詳しいものがほしいのである。値段の関係、予約者人数の関係で実現むつかしかろうがこの予約が募集されたら、私は第一に申込む。

(J)

又、テラゾの床を引合にだして誠に恐縮だが、新しく竣工した時に、ピカピカに光つて、靴が滑つて困つたようなテラゾの床が、半年余り経つて訪ねた時には、殆んど例外なく無斬に割れている。しかもその位置は大抵、社長室前の廊下か、銀行だつたら営業室の階上で、頭取室の前あたりに出ている。

その原因は勿論色々あるだろう。テラゾの調合や厚さが当を得ない事が第一の原因ではあろうが、最近、セメントのメーカーに強度の強いセメントを競争で造る風があり、粒度が極めて細くなつてきた為に、収縮亀裂の起る事も大きな原因だといわれる。

今一つ、亀裂の原因について構造屋さんに考えて貰いたい事がある。亀裂が表面のテラゾだけの場合は、その調合か材料に欠陥があつたのだろうか、下のスラブと一緒に割れての場合は問題は別になる。多くの例を調べた結果、スパンが広い所へ梁が一方方向に並んで、その間に細長いスラブ(3.5×9m程度)ができた時に、その中央に縦方向に収縮亀裂の入っているものが大部分であつた。つまり長い梁が一方方向に並ぶと、横の方向の収縮に対しては抵抗力が殆んどないからである。工場の様に階高が高く、壁の途中に梁がない場合には、同様な理由で、壁に縦に亀裂ができる。

構造計算に当つて、鉄筋やコンクリートの量の少くなるような設計される事は、勿論有難い事だが、時には、亀裂防止の為に横方向へ余分な小梁を入れるような設計をする人があつても良いのぢやなからうか。(Y)

山卯三・船越義房・堀口甚吉・横尾義貫：建築の眼

### バ ラ ン ス

バランスド・ラーメンという構造があるそう。これはラーメンの応力をうまくバランスさせて合理化を図ろうとの考えだろう。バランスがとれているということとは構造ばかりでなく建築のあらゆる面で必要なことであろう。今日はG生は鉄筋コンクリートの火災を話題にした災害委員会に列席した。話題は最近おこつたダクトの火災に及んだ。考えてみるとダクトは耐火構造の弱点である。耐火構造はコンクリートの床と防火扉で延焼しないように十分区画されていると一応思いがちである。しかし空気調整の近年普及とともに、この耐火区画はいたるところつきやぶられているわけだ。ダクトの火災等はきわめて稀なケースにちがいないが、他の部分の耐火性にくらべると弱点である。バランスがとれていないといえよう。耐火性の高い程度があらゆる部分に均衡がとれてゆきわたつていなければなるまい。何ごとによらず WELL BALANCED ということは常にわれわれが反省してよいことだと思う。(G)



1 コーナー部分の仰観

梅田ビルディング

設計施工 竹中工務店



2

3



#### 外装

1階廻り セラストーンブロック貼

サツシユ：ホワイトブロンズ

9耗ガラスはめ殺し

パイプシャッター

2階以上 2丁掛タイル

スパンドレル小口タイ

ル貼

東側 四種角モザイクタイル貼

塔屋 四種角モザイクタイル貼

2. 北面より望む

3. 塔屋



4

5



4. 西面より望む

5. 全 景



## 設計者の言葉

## 竹中宏平

私に与えられた課題は先に設計をした第一生命ビルと如何に対照的に、形において、色彩において、共に美しく駅前都市美を生かすかということである。大阪駅前の頗る穢たない処にそれを求むことは困難である。先頃村野先生と話した時も、大阪の都市で設計することは東京よりも好ましくない、それはあまりにも都会が穢たないのでその設計がはえないといわれた。全く設計者にとってはその環境が一番気になることで第一生命ビルの時もこの周囲に公園なり、又樹木があれば北郊の都市の美しさが羨ましくなつた程である。この梅田ビルの敷地はそれにもまして全くの闊市的な存在で如何なる建物も最早周囲の環境のヘルプを求むことは不可能であつて反つて環境を超越したもので解決をしなければならないと考えて、モダニズムの建物、即ちガラス面の大きな近代建築の様式をとつたわけである。それは第一生命ビルとの対照的な解決にもなるのではないかと思う。第一生命ビルのいわばしつとりしたモダニズムと互いに相引きさせたために近代要素をもつたデザインと明るい色彩をとり入れたわけである。

近代オフィスビルの持つ性格を今更ら説明する必要はない。合理的に、経営する会社の要望を充分とり入れる必要がある。そのために有効賃坪数を充分考え、地階には食堂の種々なる施設をもつたわけである。完全空気調整、完全照明等は勿論である。

デザインに就いては、思いきつた明るさをとり入れ、それを一層ひきたてるために濃い紫色とアイボリーの白さとのコントラストで、外部の線は細く、しかも大きな横の線で近代感覚を表わし、玄関入口とホールは明るい色彩でまとめた。又各階エレベーターホールの壁の色彩を各階変えたのは人々が各階ドアの開く度に目を楽ませると同時に各階の見分けにも役立たせようとしたものである。室内のデテイルは実用的に、しかも新らしい感覚を出して外部と内部との関聯性を強調したつもりである。

大阪駅前のごつたかえす街の中にブルーのコントラストを持つ12階建の第一生命ビルと、アイボリーと濃紫色の鮮明さを持つ梅田ビルの対照は尚一層互いの建物の存在を価値づけているものと自負するが、これが駅前の都市美に少しく関与出来ていれば幸せである。尚兩建物を設計出来た私にとっては感慨無量なものがある。

## 6. 貸 室

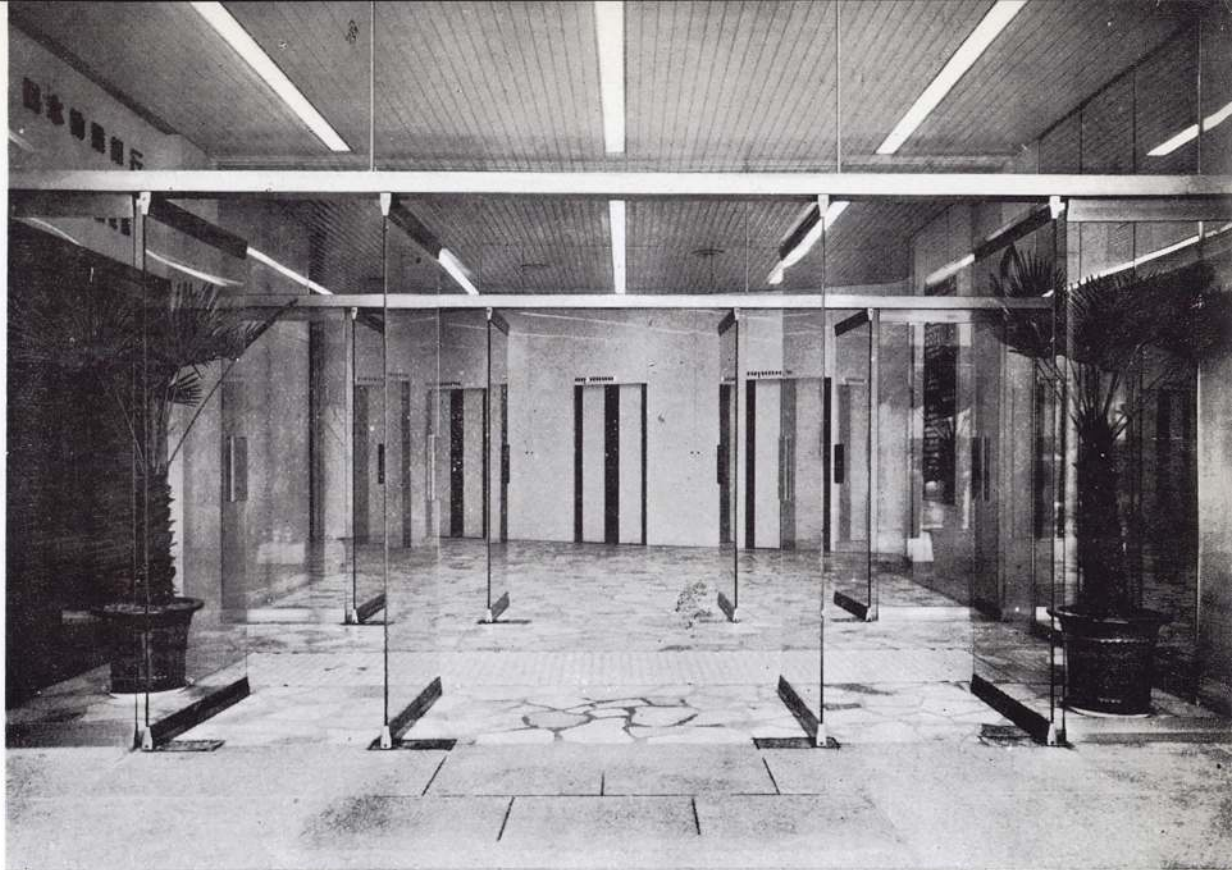
床：リノリウム

巾木：木製ペンキ塗

腰：モルタル塗ペンキ仕上

壁：プラスター

天井：タイガーボード 水性ペンキ叩き



7

## 7. 正面玄関よりロビー

ドア：テンブライトドア  
床：稲田石水磨き  
風除よりロビー 大理石乱貼  
天井：アルミモールディング  
壁：セラストーン

8

## 8. 基準階エレベータロビー

床：テラゾー現場研ぎ真鍮目地切  
ポーター及び巾木：テラゾーブロック  
壁：モルタル下地ゾラコート吹付  
エレベータパネル：3.2純厚磨き鋼板  
メラミン焼付  
天井：しつくい、オイルペンキ叩き





9



10. 正面玄関内側より

### 9. 地下1階ナイトクラブ

床 : 桜 フローリング 貼

壁 : ペ ツ チ ン 貼

天井 : ペニヤ下地ベルセード吹付



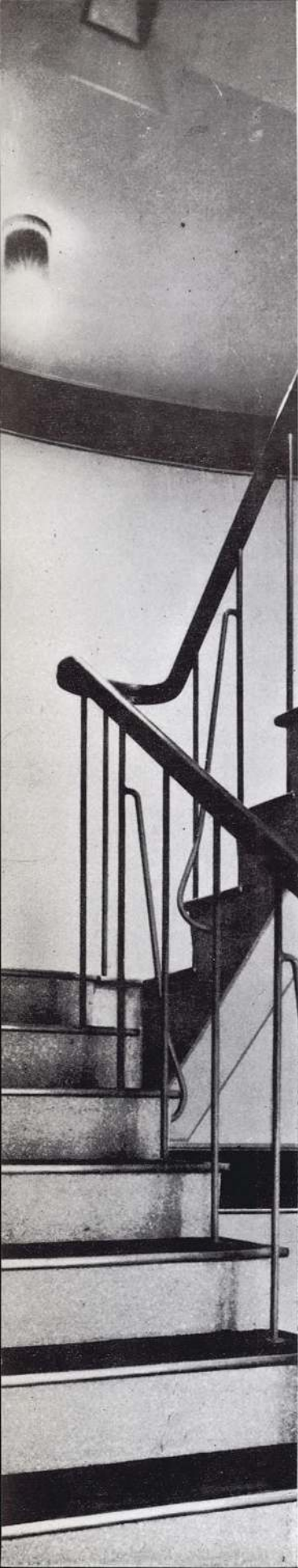
11

# 11. 12. ビヤホール

床、巾木：アスファルトタイル貼  
 壁：モルタル下地ゾラコート吹付  
 天井：モホトーン貼クリアラツカー仕上  
 間接照明部分：味の素アコースティク  
 テックス貼

12





地 1 階



地 2 階

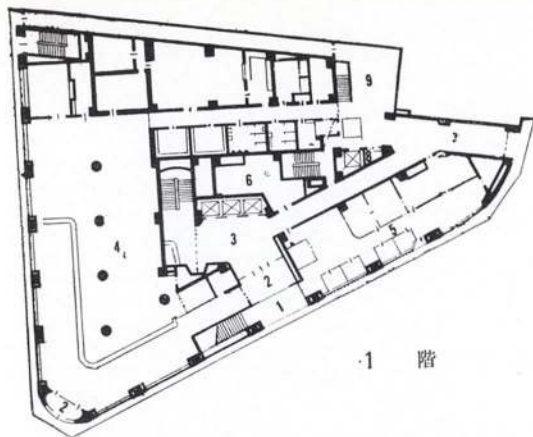


地 3 階

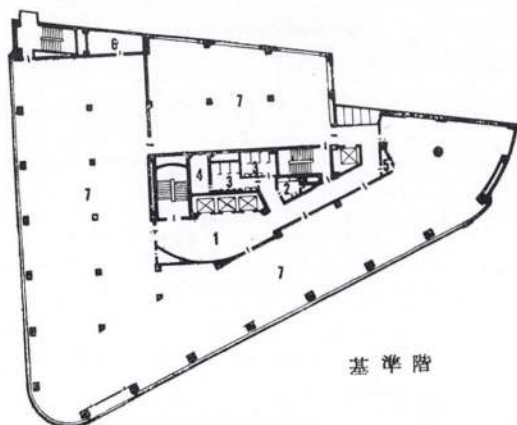


| 階 別     | 坪 数    |
|---------|--------|
| 塔 屋 3 階 | 37坪49  |
| 〃 〃 2 階 | 41坪90  |
| 〃 〃 1 階 | 55坪79  |
| 9 ~ 2 階 | 451坪23 |
| 1 階     | 435坪59 |
| 地 下 1 階 | 456坪09 |
| 地 下 2 階 | 344坪43 |
| 地 下 3 階 | 456坪09 |

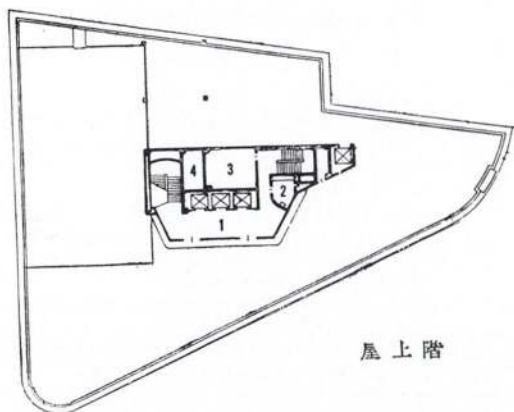
13. メイン階段



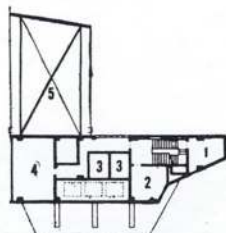
1 階



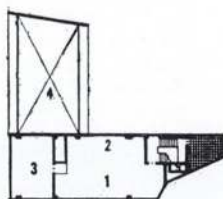
基準階



屋上階



屋上2階



屋上3階

|      |                      |
|------|----------------------|
| 建築地  | 大阪市北区梅田7の3           |
| 敷地面積 | 501坪42               |
| 建築面積 | 建坪 451坪23 延坪 5437坪31 |
| 階数   | 地下3階 地上9階 塔屋3階       |
| 高さ   | 標準地盤より パラベット迄 31米    |
|      | 同上 塔屋上端迄 42米         |
| 深さ   | 同上 地下3階床面迄 9米980     |
|      | 同上 基礎梁下端迄 11米980     |
| 構造   | 鉄骨鉄筋コンクリート造          |
| 工期   | 起工 昭和28年8月17日        |
|      | 竣工 昭和30年7月2日         |

|      |             |           |
|------|-------------|-----------|
| 地下3階 | 1 機械室       | 2 風除      |
| 1    | 2 受電室       | 3 エレベーター  |
| 2    | 3 発電機室      | 4 銀       |
| 3    | 4 濾過器室      | 5 証券会社    |
| 4    | 5 気ポンプ室     | 6 展示室     |
| 5    | 6 貨倉庫       | 7 通路      |
| 6    | 7 塵埃焼却室     | 8 守衛室     |
| 7    | 8 監理人事務室    | 9 中庭      |
| 8    | 9 石灰置場      |           |
| 9    | 10 灰置場      |           |
| 10   | 11 ト        |           |
| 11   | 12 物置       |           |
| 12   |             |           |
| 13   |             |           |
| 14   |             |           |
| 地下2階 | 1 事務室       | 2 貨倉庫     |
| 1    | 2 ガスメーター室   | 3 変電室     |
| 2    | 3 蓄電池室      | 4 フアン室    |
| 3    | 4 塵埃処理室     | 5 便所      |
| 4    | 5 宿直室       | 6 オイルタンク室 |
| 5    | 6 ストレージ     | 7 タンク室    |
| 6    | 7 物置        | 8 守衛室     |
| 7    | 8 エレベーター    | 9 ガール室    |
| 8    | 9 掃除婦室      | 10 湯沸室    |
| 9    | 10 湯沸室      | 11 吹      |
| 10   |             |           |
| 11   |             |           |
| 12   |             |           |
| 13   |             |           |
| 14   |             |           |
| 地下1階 | 1 ロビー       | 2 便所      |
| 1    | 2 湿度調整室     | 3 ビヤホール   |
| 2    | 3 ナイトクラブ    | 4 喫茶店     |
| 3    | 4 天ぷら屋      | 5 小料理屋    |
| 4    | 5 貨物店       | 6 事務所     |
| 5    | 6 更衣室       |           |
| 6    |             |           |
| 7    |             |           |
| 8    |             |           |
| 9    |             |           |
| 10   |             |           |
| 11   |             |           |
| 12   |             |           |
| 13   |             |           |
| 14   |             |           |
| 1階   | 1 アーケード     | 2 風除      |
| 2    | 3 エレベーター    | 4 銀       |
| 3    | 4 証券会社      | 5 展示室     |
| 4    | 6 通路        | 7 守衛室     |
| 5    | 8 中庭        |           |
| 6    |             |           |
| 7    |             |           |
| 8    |             |           |
| 9    |             |           |
| 10   |             |           |
| 11   |             |           |
| 12   |             |           |
| 13   |             |           |
| 14   |             |           |
| 基準階  | 1 エレベーター    | 2 湯沸室     |
| 1    | 2 便所        | 3 湿度調整室   |
| 2    | 4 分電盤室      | 5 書庫      |
| 3    | 6 貨室        |           |
| 4    |             |           |
| 5    |             |           |
| 6    |             |           |
| 7    |             |           |
| 8    |             |           |
| 9    |             |           |
| 10   |             |           |
| 11   |             |           |
| 12   |             |           |
| 13   |             |           |
| 14   |             |           |
| 屋上階  | 1 エレベーター    | 2 湯沸室     |
| 1    | 2 ロビー       | 3 ポンプ     |
| 2    | 3 フアン室      | 4 暖冷房用    |
| 3    | 4 シヤフト      |           |
| 4    |             |           |
| 5    |             |           |
| 6    |             |           |
| 7    |             |           |
| 8    |             |           |
| 9    |             |           |
| 10   |             |           |
| 11   |             |           |
| 12   |             |           |
| 13   |             |           |
| 14   |             |           |
| 屋上2階 | 1 荷物用エレベーター | 2 ター機械室   |
| 1    | 2 控室        | 3 水槽      |
| 2    | 3 再循環空気     | 4 洗濯室     |
| 3    | 4 冷却塔内部     |           |
| 4    |             |           |
| 5    |             |           |
| 6    |             |           |
| 7    |             |           |
| 8    |             |           |
| 9    |             |           |
| 10   |             |           |
| 11   |             |           |
| 12   |             |           |
| 13   |             |           |
| 14   |             |           |
| 屋上3階 | 1 客用エレベーター  | 2 ター機械室   |
| 1    | 2 電気室       | 3 新鮮空気洗濯室 |
| 2    | 3 冷却塔内部     | 4 煙突      |
| 3    | 4 煙突        |           |
| 4    |             |           |
| 5    |             |           |
| 6    |             |           |
| 7    |             |           |
| 8    |             |           |
| 9    |             |           |
| 10   |             |           |
| 11   |             |           |
| 12   |             |           |
| 13   |             |           |
| 14   |             |           |

梅田ビル工事は昭和28年8月着工以来1年と10ヶ月を費して、去る7月2日無事竣工し、さきに完成した第一生命ビルと共に、大阪駅前、又一つの美観を添えることとなりました。本建築の施工上の成否については、今後数年後の結果を見なければ判りませんが、当初の工事担当者として、施工中の苦心談と申しますか、思いだす儘を記しまして、大方の御批判を仰ぎたいと存じます。

## 1. 設計施工について

建築請負業者の設計施工については、在来種々批判的となつておりましたが、本工事では、設計と施工との間に何等の妥協もなく、設計者のアイデアを生かす事と、施工面での将来のメンテナンスとを考慮して、図面担当者と共に研究し、最善と思われる方法を探索して施工に移し、一応の成功を納めたものと信じております。又、図面の作製と施工工程との間に少しいずれの遅滞もなく、実にスムーズに進行し、地下食道街工事も設計着手後四十日足らずで完成しました事は、この形態の特色ともいえます。本工事の体験により私達施工担当者は、設計施工の場合に必ず常に設計者の意図に基づき、その心を心として誠意をもつて良い作品を完成する様努力すべきだと痛感致しました。

## 2. 潜函工法について

当梅田ビル基礎工事でも第一生命ビルと同様、竹中式潜函工法を採用されました。第一生命ビルで周囲の地盤低下が著しかった事は、粘土層において周囲の土が廻り込む、所謂ヒービングを起した事が主な原因であり、之を防ぐ為に、次のような改良を行いました。(詳細は、建築士会報、第四輯、第一号、中出夫氏の、梅田層での潜函工事参照)

a 刃型を長く、(第一2米、梅田3米)自重を重く、(第一55.5t/M、梅田57.1t/M、刃型長方)外壁面のチーバを無くして垂直とした事。

b 沈下に際して、外壁と土との摩擦を防ぐ目的で、外壁に送気設備をし、空気噴射を行つた。

c 隣家側は特にセメント注入をして地盤を固めた。

d 根伐の方法を第一生命とは逆に、刃型(周辺部)より中央に掘進し、沈下を促進すると共に、出来る丈中央に土を残す方法を講じた。

e 杭打に依る地盤の攪拌を防ぐ目的で、杭の打込を潜函体の沈下後とし、打込法も特殊の方法を採つた。(特許)

以上により潜函工事中周囲の商店街に、休業さす事もなく、構造体に何等の亀裂も起さず、極めて順調に工事を完成し、地価の高い、地質の悪い、然も将来高層建築が構比すると予想される梅田附近で、更に深い地下工事も可能であるとの見通しを得ました。

## 3. 下請の選定及工事の配分について

下請決定に際しては、原則として見積合せの形態をとりましたが、仕上内容、重要度に応じて必ずしも安い業者には渡しませんでした。又特定の業者に一括請負す事は、施工に当つて安易に流れる傾向があり、之を防ぐ目的と、コストの切下げを狙つて、労務外注、及び一部の工事を除いては、殆んど三、四軒の業者で見積合せの上、按分配置しましたので、返つて互に良い仕事をしようとの競争意識を持つ結果となり、一応成功したものと存じて居ります。

## 4. 仕上工事に当つて特に注意した事項

a 設計図には忠実である事。設計施工でも勝手な変更は許されな

い。

b 施工に際しては細心の注意を払い、最善の方法を講ずる事。

c 単価に依つて仕上の良否は左右されない。モルタル仕上でもプ

ラスターの如く平滑に仕上るべき事。

d 入場材料の捌別、及粗悪品の返却(木材耐火ボード其他)、納入時期の適否(セメント、フローリング等)。新しい材料は充分研究の上、使用すべき事。

e 職方に命じた仕事は最後迄確認する事。

f 必要な手間と材料は惜まないが、努めて無駄を省く事。(研り。材料の損失)

g 仕上つた部分の養生は完全に、火災予防には特に注意する事。

上記のように、竹中式工務店のモットーである、無駄をなくして、より

良い仕事をするという精神が、ある程度職方の末端迄徹底し、たとえモルタル仕上げでも疎に出来ないという観念を植付け、仕上面にも成果を得たと、思っております。

## 5. 細部について

### a 左官工事

イ、プラスター仕上。若場を見廻り、左官の使用材料を監視する。中塗では、定規を扇行する。仕上では、電燈を使用して斜角を作り、廻押えを徹底させる。

ロ、モルタル仕上。腰及び壁のモルタル廻押えは、下コスリ、中塗、上塗の三工程とし、中塗の定規は、プラスターと同様に。仕上に際しては、水引きに注意して、押えの時期を誤らぬ事。

ハ、コーナービード。貸室の腰をモルタル仕上とした関係で、コーナービードを切断せず、天井迄延ばした。在来のコーナービードは、床面より6尺迄取付け、コーナービードとプラスター仕

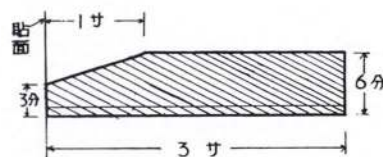
上の取合が、一般に不手際になり勝てあつたが、之を是正すると共に、仕上の定規とした事。

ニ、巾木に見切縁金物を取付た。巾木が腰面より沈んでいるので、角が欠けるおそれがあり主階段及廊下には図のような見切縁金物を取付け剝落を防いだ。

### b タイル工事

イ、外壁2丁掛タイル貼。壁面の防水と、タイル貼用トロの附代を平均にする意味で、すべて防水モルタルの下塗をなし、仕上面の平滑を期した。又カーブの部分では1尺間に水系を垂らし、カーブ定規を使用して貼ムラを無くするよう努めた。

ロ、モザイクタイル貼。タイル下モルタル塗は、防水剤を入れ、2間定規に依る擦合せを徹底させ、尚貼付前に縦横5尺間に仕上墨を打ち、タイル目地の通りを良くし、貼付に際しては図の



様な定規を使用して更にトロ付後の面の修正をした。(在来の左官定規程度では押えた部分で、瘦るおそれがある)又塔屋のカーブ(R40cm)の廻は、西陽が射すので、1寸3分角モザイクタイル一枚張をした。

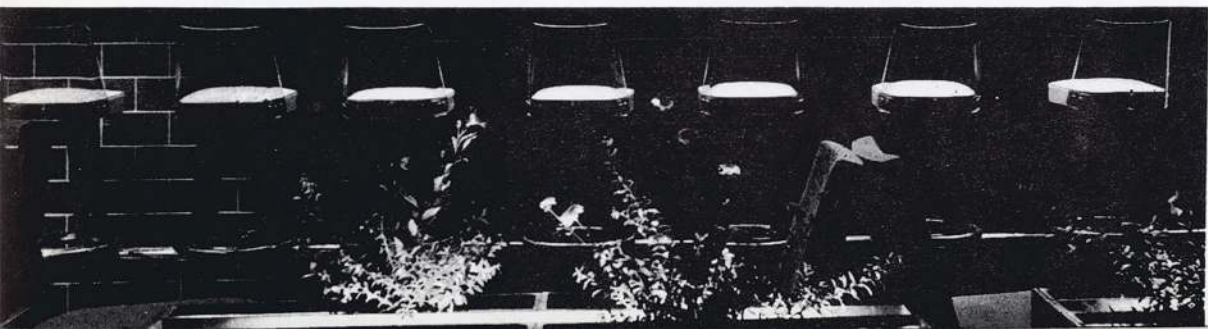
### c 天井耐火ボード仕上

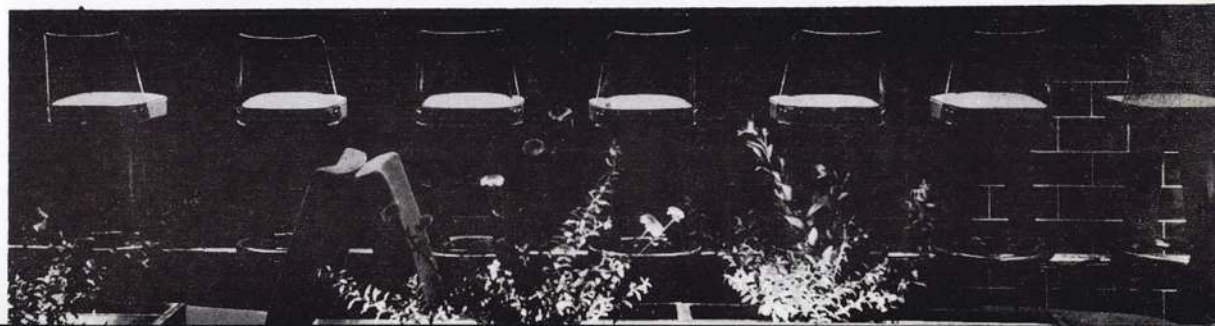
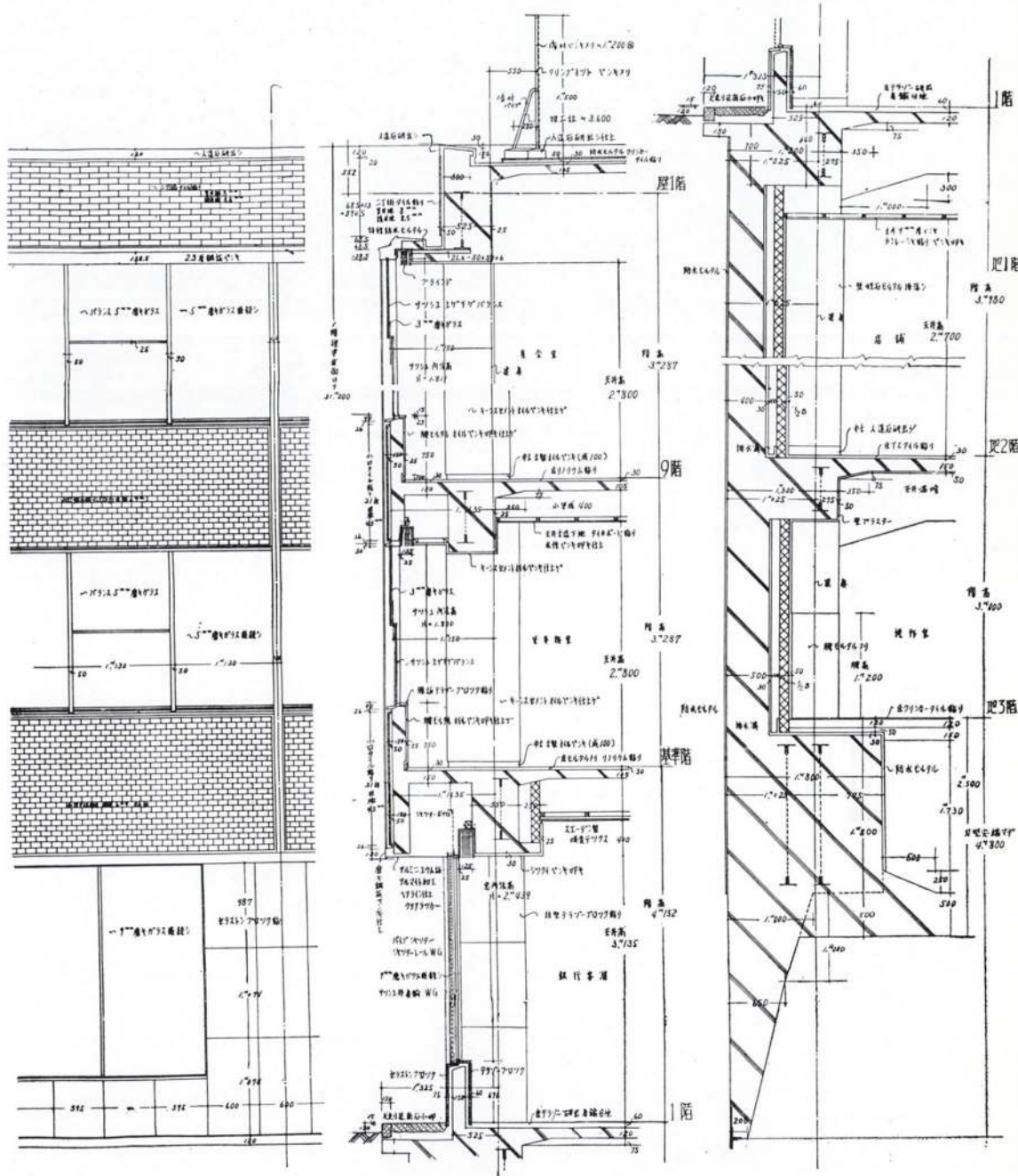
イ、下地用材は杉1.5寸角を1尺5寸間に相抜きとし、材料は小節程度の捻無きものを使用し、L方向にプレーナーを掛け、野引きを掛けた上切刻みをした。釣木は殆んど1尺5寸間に釣り、通りを充分修正すると共に目達を確実に払わせた。

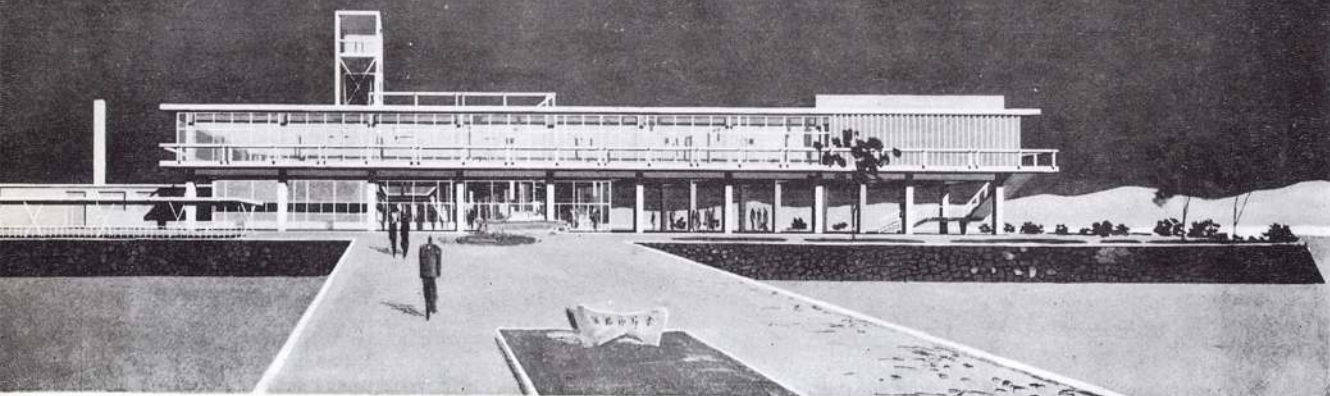
ロ、耐火ボード貼用釘は、亜鉛釘1 $\frac{1}{2}$ 寸を使用し、釘頭は完全に打込めた。

以上工事完成後を振り返つて見まして、つくづく感じます事は、建物は生きているという事です。気候の変化に応じて常に呼吸し、寒暖に応じて冷暖水を提供し、ある時は風に、或日は雨に晒されながら、建物は自分の生命を保つて参ります。梅田ビル施工に当つて、私が注意も、現場員諸君が良く監督した部分は、自分でも良く出来たと思えますが、反面注意の足らなかつた部分については、それ相応の欠陥が認められ、自分で自分が恥しくなります。

幸い機会を得まして、良き体験も、勉強もさせて戴いた事を感謝すると共に、出来得れば、将来、禍根を残さぬ建物を造るよう、一層精進努力致したいと存じております。







## 筑後市庁舎指名競技設計当選案

設計 日建設計工務株式会社

塚本猛次・栗袋公明・後藤直信

これは1955年6月指名競技設計により当選したものであり、応募案はそのまま実施案として既に設計を完了している。筑後市は鹿児島本線「羽犬塚」近辺の町村合併に依つて誕生した現在人口37,000人の田園都市である。

構造 鉄筋コンクリート造2階建

外装 柱、コンクリート生地シリコン吹付仕上、外壁、スチールサツシユ

面積 建築面積 1,695.520 M<sup>2</sup> (512.895坪) 延面積 1,925.830 M<sup>2</sup> (582.556坪)

階別面積

| 第 一 期 |     |                          |           | 第 二 期                  |                  |          |     |
|-------|-----|--------------------------|-----------|------------------------|------------------|----------|-----|
| 1     | 階   | 1,103.48 M <sup>2</sup>  | 333.802 坪 |                        | 0 M <sup>2</sup> |          | 0 坪 |
| 2     | 階   | 536.625 M <sup>2</sup>   | 162.329 坪 | 273.375 M <sup>2</sup> |                  | 82.696 坪 |     |
|       | 塔 屋 | 12.35 M <sup>2</sup>     | 3.736 坪   | 0 M <sup>2</sup>       |                  | 0 坪      |     |
|       | 計   | 1,652.455 M <sup>2</sup> | 499.867 坪 | 273.375 M <sup>2</sup> |                  | 82.696 坪 |     |

# 筑後市庁舎指名競技設計当選案

配置図 1.ピロティ 2.出入口ホール 3.一般事務室 4.官房部 5.議会部

6.サービス 7.自転車置場 8.倉庫 9.ガレージ 10.議員図書室

1階 1.ホール 2.受付 3.議会専用階段 4.官房部専用階段 5.中庭

6.一般事務室 7.戸籍簿庫 8.金庫 9.書庫 10.部長室

11.部長室 12.客室 13.売店 14.放送室 15.女子便所

16.男子便所 17.電話交換室 18.女子更衣室 19.宿直室 20.職員入口

21.小使室 22.湯沸室 23.青写真室 24.暗室 25.倉庫

26.浴室 27.電気室 28.火夫控室 29.ボイラー室 30.自転車置場

31.傍聴者専用階段

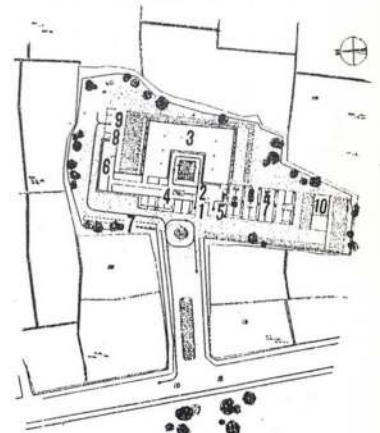
2階 1.議場 2.傍聴席 3.新聞記者席 4.議員控室(大) 5.議員控室(小)

6.新聞記者室 7.便所 8.小会議室 9.大会議室 10.予備室

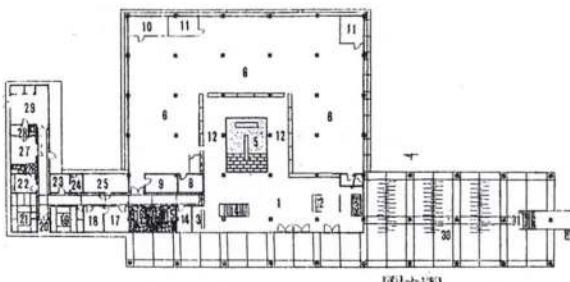
11.監査委員会事務局室 12.教育委員会事務局室 13.便所

14.助役室 15.秘書課 16.市長室 17.応接室 18.議長応接室

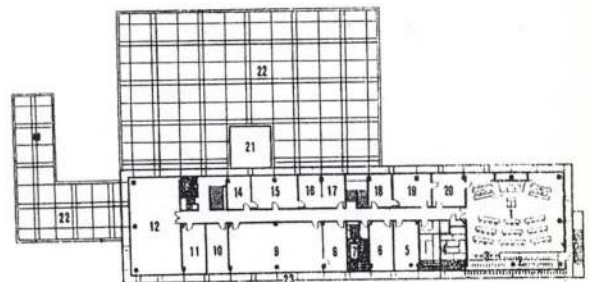
19.議長副議長室 20.議会事務局室 21.中庭 22.陸屋根 23.バルコニー



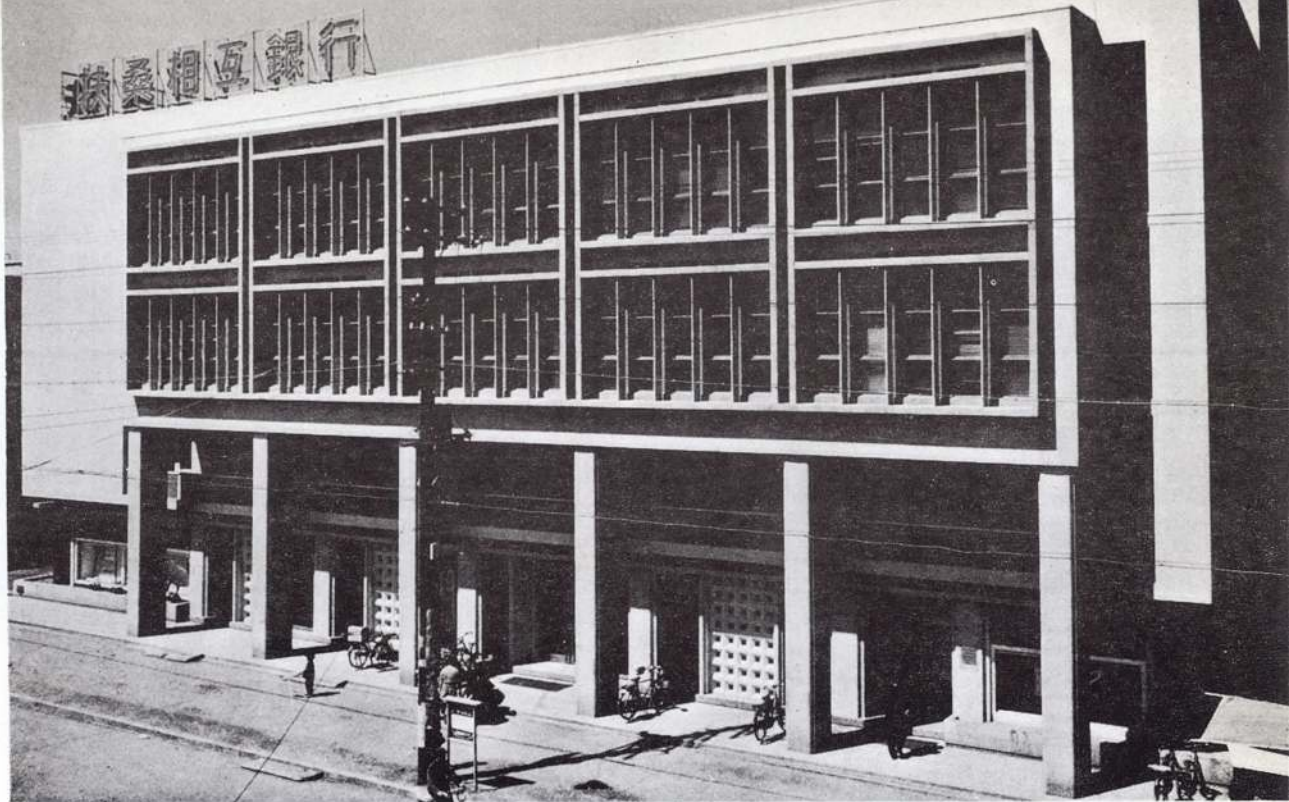
配置図



1 階



2 階



外 観 外壁は人造石現場小叩き仕上。 2・3階ルーヴァーは鋼弦コンクリート研出（寒水石入）冬期の多雪、夏期の降雨、自転車による顧客が多いこと、等を考慮して前面はピロティにしてある。

## 扶 桑 相 互 銀 行 鳥 取 本 店

設 計 大成建設株式会社 設 計 部  
施 工 大成建設株式会社 広島支店

所 在 地 鳥取市東品治町 工 期 昭和28年6月—29年7月 設計責任者 笹 川 秀 男 設計担当 山 田 知 孝・新 庄  
東 一・佐 久 間 宏・竹 下 匡 彦 構造担当 中 川 中 夫 設備担当 鈴 木 重 吉 施工責任者 土 井 二 郎

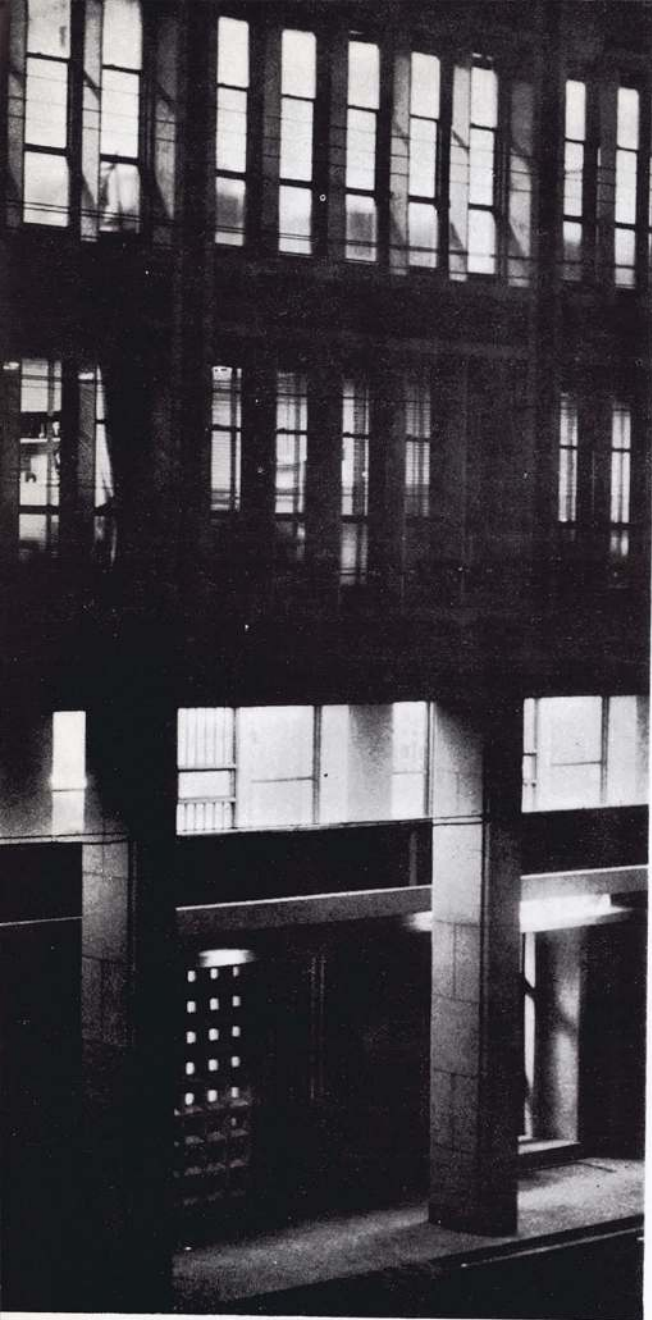
概説 この扶桑相互銀行の建築設計といえども二年程前の事でした。昭和28年の初春私がたしか大阪に臨時の出張中の事だつたと思います。当時鳥取市のある銀行で設計施工の競技設計があるので計画する事の依頼を受けたのがそもそもの初めてでした。山陰は私の郷里なので、懐しい気もして「一寸これはやつてみたい」と郷愁的なものにかかれて、この仕事に取り懸つたのですが、この競技設計をものにした大きな要因はこんなところに有つた様に考えられるのです。

沢山のトンネルを通つてその度々に現われて来る山陰の風景は美しいものでした。黒い程すんだ海、陰影の濃い山々、それに民家の一つ一つが設計意欲にとつて面白い反映があつた様な気がします。

行つて見ると鳥取市も戦災と地震後の復興期にあつたのでしよう。何日か昔訪れた時の紅柄の破風や面格子等の特徴ある家並で構成された落ち着いた町の想像がバラックとブロック造の家々に覆われて所々に三、四階建の鉄筋コンクリートの銀行建築と不愉快なドロドロな道路の街に僕の記憶を塗り変えてしまつてました。この街が昔の静かな味と近代的な明るい雰囲気になる為には、個々の建物が土地に調和したよいものにならねばならない事なのでしょう。

大都市にはこりがましく建てられる建築設計より時には大きな意義がこうしたところに寧ろあると考えるべきじゃないでしょうか？

山陰の雨にも、雪にも、又風にも、そして住む人々にも、郷土的なこれ等の資料の中に愛情さえ感じて設計を進めていく事の出来た事は、施主やこの土地の学会の方々の一方ならぬ理解と助力が大きかつた事は特筆せねばならない事でしょう。



正面一部の夜景

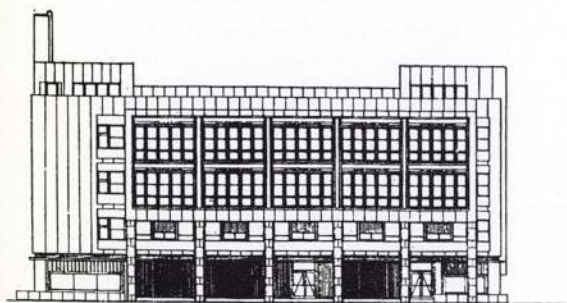


銀行営業室入口部分の夜景 営業室部分の外部仕上はテラカツストーン製ブレイキャストブロック積（ガラスブロック嵌込）と連動式ルーグアーの二つで構成されている。

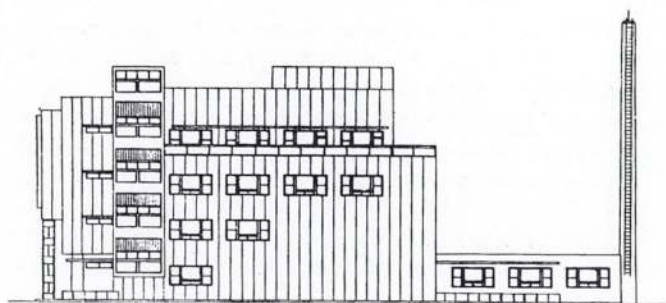
この建物は銀行建築ですが、庶民を対象にする相互銀行の性格からして最も民主性を持つたものでなくてはならないのが始めからの要求でした。例えば営業室の客室を非常に大きく取っており、場合にはここで用議も出来る様に考えられています。

又未完成で写真には出せませんが、私が一番興味を持つて設計したものは大衆の為の講堂です。これ等は現に鳥取市民の為の集会所のよいのが無いので、これを放送局と協同で一般公開する予定のものなのです。完成されるのを楽しみにしています。

又この建物を建築材料的に考えますと、テラカツストーンを外部の壁や柱型に使用してみた事、又ブレイキャストソレイユを装



正面



側面



営業室 客溜床はテラゾー現場研出真鍮目地仕上で、黒、茶、ネズミ色の組合せ。柱及びカウンターは大理石貼仕上。柱（淡雪）、甲板（桑尾）、腰（蔵）、巾木（テラゾー桑尾）となっている。

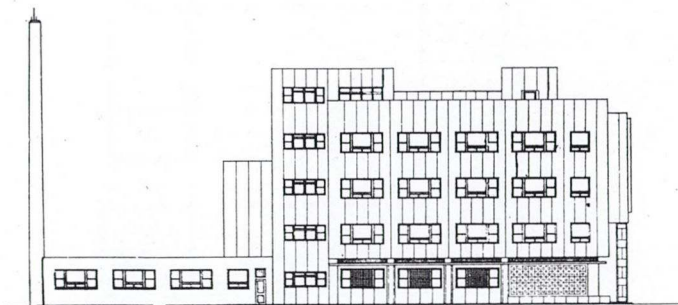
飾的に中二階の廊下の営業室境壁に利用した事、又鋼絛コンクリートの方笥を造つた事等で特に一階の営業室の外窓にグリルの変りにシャッターグリル兼用の整型ルーバーを使用しました。ホワイトブロンズで仕上げ手動式に機械操作で開閉出来るのです。詳細図を後に載せておきました。

又家具も私共の設計を主体として高島屋に製作をしてもらつたものです。色彩的には相当注意してみた積りです。

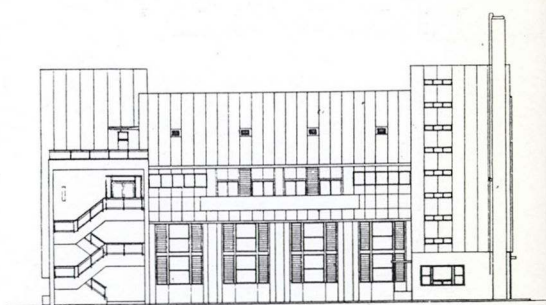
建築の隅々までもまかせる施主が又まかせられる建築家がその各人の責任において一人でもこの日本に増える事を祈りつつ筆を置きます。（笹川記）



外観夜景 夜間、道路が暗くなり街の雰囲気に影響するというのが銀行の建物にはあり勝である。ここでは外部の照明の外に、内部の照明が外部に洩れて道路を明るくしている。



側面



背面



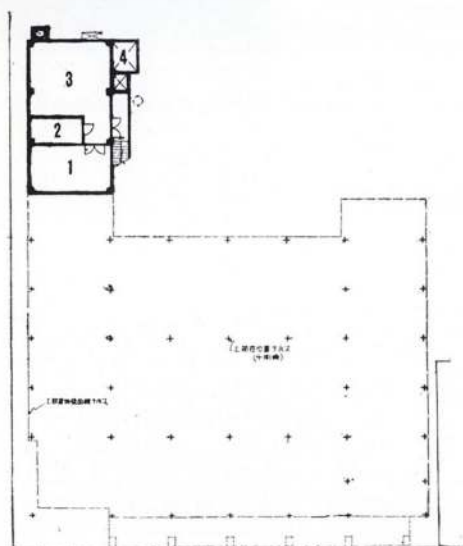
上 主階段 階段下は銀行玄関で、右の方の壁面はテラゾーブロック貼（ネズミ・白ネズミ色）。  
 階段手摺は練つけベニヤ（塩地）  
 手摺子は鉄製メラミン焼付及びホワイトブロンジングパイプ。  
 路面、ゴムタイル貼。蹴込テラゾー現場研出仕上。  
 左 和 室 6帖より8帖を見る。木部は杉継、柱は太面をとつている。壁・天井は土壁（じゆらく）塗。

#### 地 階

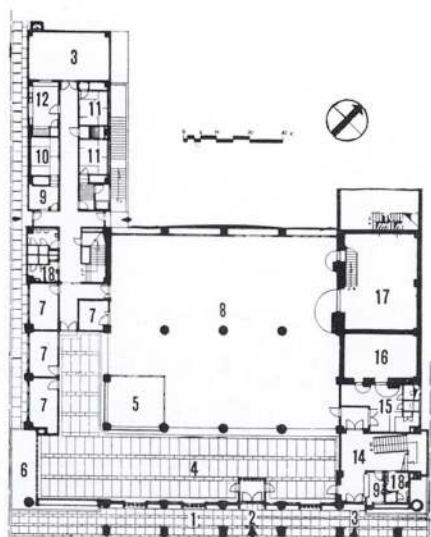
1電気室 2発電機室 3ボイラー室 4燃料タンク

#### 1 階

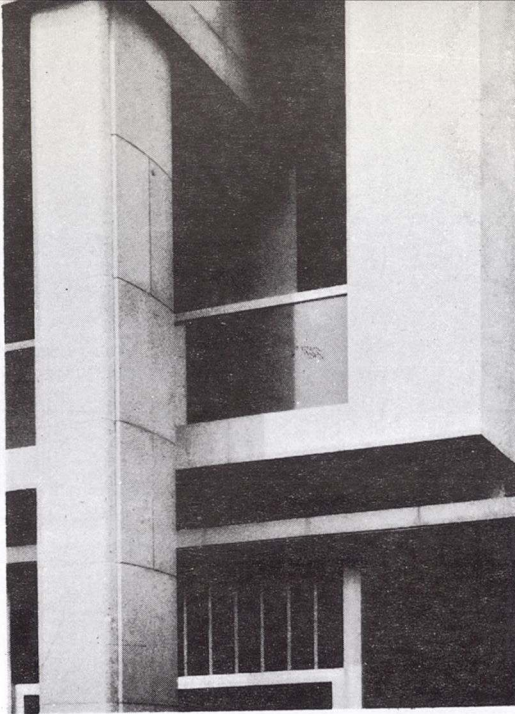
1ピロティ 2銀行正面入口 3銀行本店入口 4客溜ホール 5出 納 6フラワーボックス  
 7応 接 室 8銀行営業室 9守 衛 室 10小 使 室 11宿直室 12貯 房  
 13行員食堂 14ホ ー ル 15前 庭 16保護金庫室 17金庫室 18便 所



地 階



1 階



# 東南部分詳細

バルコニーは営業室  
吹抜に面している。

|     |       |            |
|-----|-------|------------|
| 面 積 | 地 下   | 34.476坪    |
|     | 1 階   | 351.021坪   |
|     | 中 2 階 | 129.364坪   |
|     | 2 階   | 320.828坪   |
|     | 3 階   | 169.724坪   |
|     | 屋 階   | 31.896坪    |
|     | 計     | 1,037.309坪 |

軒 高 屋階パラベツト上端  
16.4m

ペントハウスバウス

パラベツト上端 19.1m

## 中 2 階

1 ホール 2 理髪室 3 事務室 4 休養室  
5 電話交換室 6 金庫室 7 営業室上部 8 休憩室  
9 女子更衣室 10 書庫 11 湯沸室 12 便所  
13 バルコニー

## 2 階

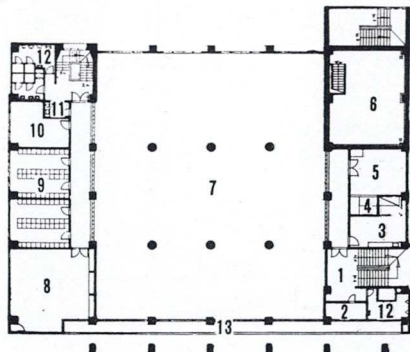
1 ホール 2 応接室 3 監査顧問室 4 役員室  
5 秘書室 6 社長室 7 貴賓室 8 役員会議室  
9 役員食堂 10 配膳室 11 控室 12 講堂 368 席  
13 演台 14 ロビー傾斜路 15 講堂事務室 16 和室  
17 納戸 18 バルコニー 19 便所

## 3 階

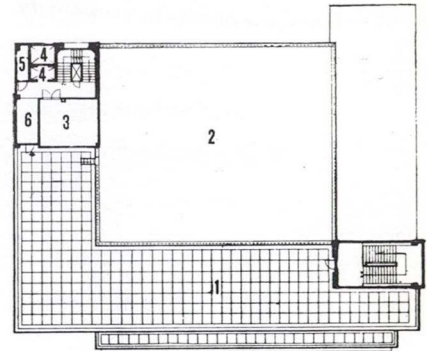
1 ホール 2 事務室 3 金庫室 4 タイプ室  
5 書庫 6 大会議室 7 講堂上部 8 予備室  
9 投光室映写室 10 応接室 11 湯沸室 12 便所  
13 屋上陸屋根

## 屋 階

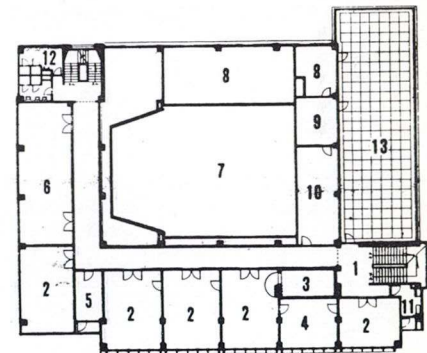
1 屋上陸屋根 2 講堂屋根 3 換気機械室 4 水槽  
5 倉庫 6 通路



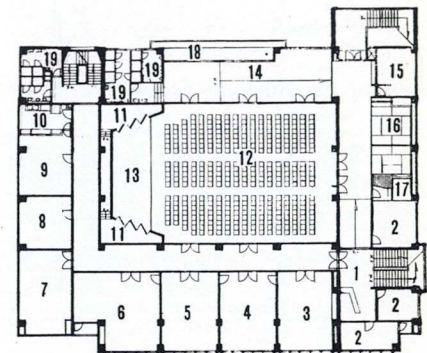
中 2 階



4 階

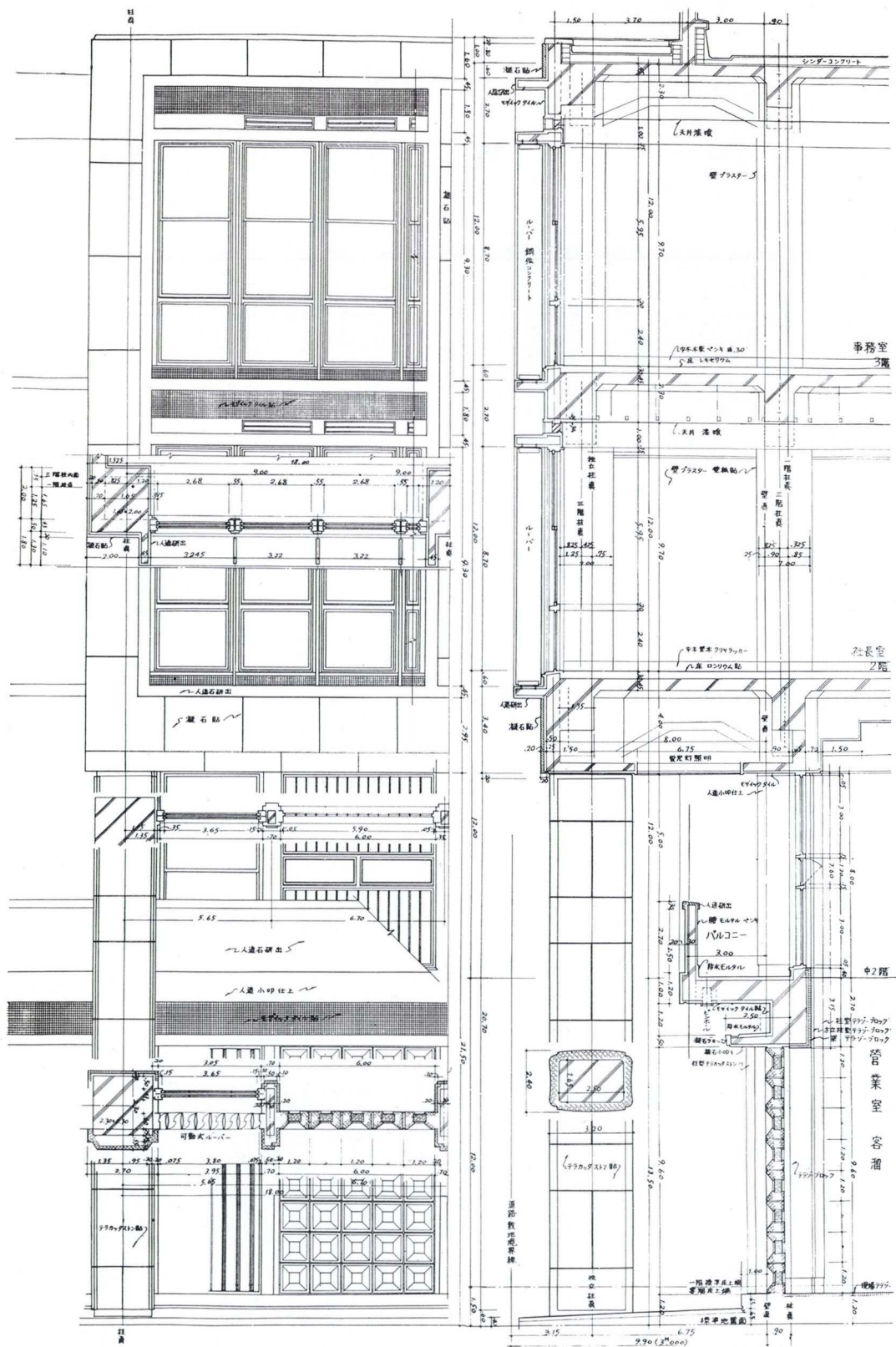


3 階



2 階

扶桑相互銀行鳥取本店正面標準矩計図







外 観

# オ プ ト ン カ メ ラ 店

設 計 足 立 孝

施 工 北 村 工 務 店

本店は普通カメラ店と違ってカメラ  
器材の相談に重点があるため、談話  
室形式を採用している。



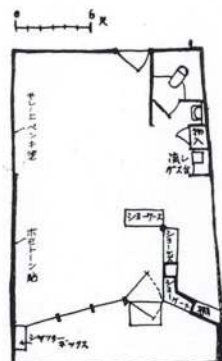
内 部

## 内部

- 床 : アスファルトタイル貼
- 天井 : アコーステツクス尺角
- 壁 : 上部約1尺白 シツクイ  
一部ドンゴロスベッキ塗  
ホモトーン貼 入口附近  
一部黒色ビトロライト貼
- 巾木 : 木製ベッキ塗

## 外部

- 上部 : アルミ板貼目地 青色吹付
- 壁 : 黒色ビトロライト貼
- 巾木 : ホワイトブロンズ
- 床 : 人造研出し





# トルコセンター

設計 今西建築デザインルーム

施工 株式会社 あめりか屋

位置 大阪府大阪市南区九郎右衛門町13

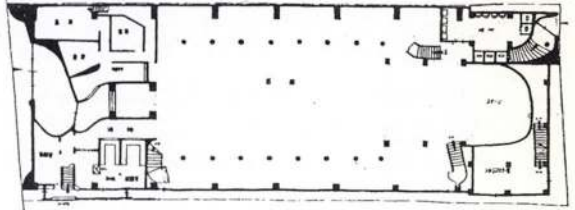
構造 鉄骨造一部鉄筋コンクリート4階建

坪数 地階 26.5坪 1階 266.8坪 3階 185.3坪

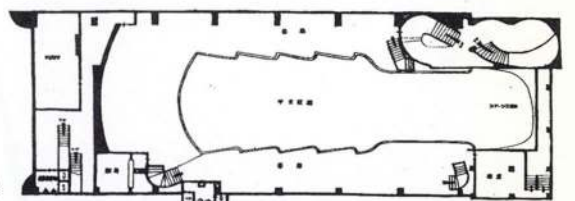
3階 255坪 4階 81.9坪 屋上 6.0坪

延坪 821.50坪

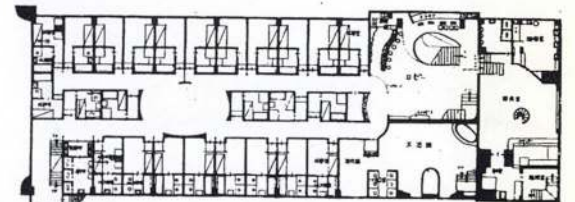
1階



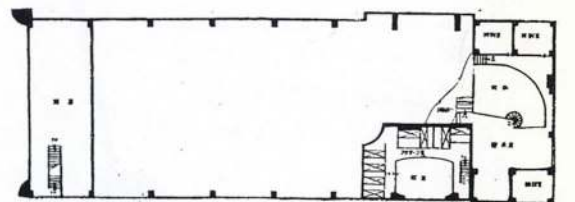
2階



3階



4階



—there should be no features about building which are not necessary for conveniences, construction or propriety—all ornament should consist of enrichment of the essential construction of the building. (Principle of Pointed or Christian Architecture—A.W. Pugin)

"I have past my life in thinking of fine things, studying fine things, designing fine things and realizing very poor ones".

1952年11月ロンドンの王立建築士会でヒュウギン 遺作展が行われた。彼の 歿後 100 年に当る。August Welby Northmore PUGIN (1812—1852) という名は日本では馴染がうすいがその生国ではゴシック風の教会建築等により歴史に残る人である。

丁度地図を片手にした岡橋作太郎氏(日建)が通りかかりにこの展示会を見たのは奇しき縁であつた。岡橋さんは多数のスケッチの中に手記された PUGIN の言葉を発見し地図の裏に写して帰つた。

100年前の日本は棟梁 大工の時代、イギリスは折衷主義の混迷期にあつた。前の章句は方向の定まらない時にあつて端的に建築の本質——その実用性を道破したものであり、その時代的眼覚めの早いことにおいては、ひとりのゼンパー(1804—1879)が匹敵するのみだ。

上の章句は PUGIN の真率な人柄がにじみ出ており繰返して味読する内に遂ほろりとさせられる。優れた建築家がその生を終る時にはかかる感慨があるのだろうか。

イギリスの著名な建築家であるギルバート・スコット卿(1811—1878)は PUGIN を次の如く讃えている。

"—his image in my imagination was like my guardian angel—"

英文は共に平易だがその含蓄に至つては他の国の言葉に到底訳し得ない。殊に第二句の and の辺りは名鑑の余韻を持つている。

私は PUGIN を知らない。その作品も又作風も知らない。しかしこの短い言葉に含まれる情理を兼ねた心境には深く打たれた。それを語つてくれた人はそれを語るに最もさわしい岡橋さんであつたから。

(A)

A

『作品作風』欄にのるような建築がどのように施工されているかを観察してみよう。施工を考えない設計はあり得ない。その時に設計者は二つの道の分れ目にまで追いつめられる——時代感覚が鋭くてしかも技術家の素質の勝つた人程 そうなるであろう。その人に取つては建築がすべて現場という工場で作られているのが時代遅れのような気がするのである。

しかも現場という一種の移動工場は不経済で生産管理が複雑で天気に合て能率さえ違ふのだから、他の近代工場を見た目には旧式の感を与えるのもやむを得ない。殊に狭い市中 現場での悪戦苦闘 振りを見ておれば建築生産にも近代化の光を！と感じる。出来上つた建築が如何に近代的表現を持つておつてもその作られる迄は少しも近代的ではない場合がある。

アメリカの如き工業水準の高い国では現場の機能を整理し、ほとんどの工程を分解してそれぞれの専門工場に分けて作らせる。そして出来た部品なり集成部品を現場で総組立する。この施工法は Prefab. 工法といわれているが、現場という移動工場の機能を固定した専門工場に分けて生産の近代化を行うかわら、総組立作業を如何にスピードと経済性をもつて行かせるかを追及したやり方だ。従つて設計者は充分 Prefab. 工法に通じなければその設計は出来ない。既存概念で設計した図面によつてはかかる工法は混乱を招くのみであろう。しかも又アメリカの Prefab. を基本にした建築の立面を見てそのまま模倣した学生製図式の設計図ではナンセンスだ。

日本で何故 Prefab. が一般化されないか、勿論前川国男氏の如き先覚者の努力と実績がある事を否定しないのであるが、尙一般化されない大きい原因の一つ挙げよう。

それは日本における手工芸、ないし手工業的伝統の根強さ、その技能の伝承——その従事者が非常に多く且つその賃金のベースが低いことであるまいか、日本には尙一日数百円で雇える名人芸の所有者が少からずいるのである。そんな事はアメリカでは夢にも想像出来ない。Handy-made の品物が最高の贅沢とされている国とそれを貧しさの所産としている国との差である。一般に日本の設計者は意識するか無意識かは別として名人芸を持つ職人の腕の方を機械力よりも重く且つ便利に感じているのではあるまいか。

時の流れは全体の工業水準を上げる方に向う事は否定し得ない。同時に手工芸乃至手工業的技能人を失わせることも先進国の実例が示している。日本は「工芸」と「工業」とが共存している例外的な近代国家である。従つて建築に二つの道が存在するかの如き様相を呈しているであろう。(A)

今回の見学会は従来とは趣きをかえて見学会設計施工者側と、見学者側との卒直な意見の交換を行い見学の印象を深めて頂くところみを行った。(事実は放談会になってしまつて、充分討論がつくされたとはいひ難いが、今後に残された示唆を含む問題が提出されたと思う)

方法としては幸にも設計施工共竹中工務店であり、関係された方との御支援があつたので、見学会に先だち、本建物の設計並に施工に関する特徴を詳しくパンフレットによつて説明してもらい、概念を得ておいて見学会し、それから討論にうつつた。司会は大阪市大湾沢教授にお願いして若い人々の活発な意見が出るよう努めて頂いた。初めての事である為、必ずしも所期の目的を完達し得たとは思われないが、少くとも従来よりは有意義な見学会が出来たと自負している。これは、ひとえに関係者各位の御好意によるものと感謝したい。今回は「勉強する見学会」であつたが、今後にも「遊ぶ見学会」や「楽しい見学会」を色々とりまぜて計画しているから、会員諸氏の重ね重ねの御支援をお願いする次第である。尚この種の催しに対する批判は容赦なく「禁煙室」その他へ御投稿願いたい。

この記事は当日の記録を要約したものである。見学者側の発言を○とし、竹中工務店を×としておいた。

### 1. 防水・外灯調節

○屋上・地下の防水がセメント防水と聞きましたが、アスファルト防水と比べてどんな特徴がありますか。

×第一生命ビル以来モルタル防水をやっておりますが、現在の所、地下・屋上共漏水をみとめておりません。

○モルタル防水の耐久力は大体どの位のものですか。

×もう20年たつております朝日ビルが、モルタル防水ですが、未だに大した故障もありませんので、相当耐久力があると思ひます。

理論的にいいますと、防水は膨脹係数の違う材料を重ね合わせる事に非常に不合理があると思う。例えばアスファルトの間にフェルトを入れて、その上にモルタル塗りをして、或はクリンカー・タイルを貼るという様に膨脹係数の違う材料が重ね合せられている所に問題がある。そういう事からいつて、モルタル防水はコンクリートに対する密着であるとか、温度に対する膨脹係数が均等であるという点で、耐久力のある確実な施工かつ容易な施工という事になるんじゃないかと思ひます。先の話しは、結果的にいつたのですが、もつと原則的にいうとこういう事になると思ひます。

○外灯を光電管で調節すると聞いておりますが、大体何ルクスで調節するのですか。

×光電管でリレー調整出来るようになっております。時期によつて早くつけたり遅くつけたりするわけです。

○大体何ルクスで働きます。

×それは解りません。

○そうすると非常に曇つて来たり、夕立が来たりして暗くなつたりした時にも働くのですか。

×それは或る時間たつて滞電リレーした後に働くわけですからいつたり消えたり、パタパタする事はありません。

### 3. 大阪駅前の都市計画と建築企画について

○大阪駅附近は竹中工務店がおやりになつた建物及び今計画されている建物が多いのでありますが、デザイン的にも構造的にも、色彩的にもある一つのまとまつた方針の下にやつておられると思ひます。その代表である梅田ビルと第一生命ビルは色々な点で相当違つていると思ひますが、その間には何か連繋があるのですか。

×設計の当初から第一生命の男性的、北歐的なデザインに對称して、梅田ビルは、明るいやさしさ、即ち女性的アメリカ的なものをやろうとした。

○これから、次々とこのような計画があると思うんですが、この次に打たれる手はどんなものでしょうか。

(笑声) この二つの建物は對称的なデザインになつていてとおつしやいましたが、大阪の表玄関に色々なものが乱立しては心細いと思ひますが。

×日本の建築デザインで、隣家の生きるような設計が初めから考慮されているかどうか考えていただければ良いと思うのですが、たいていは、自分だけのエフェクトを出そうとしている。私達が一連の建物を考慮に入れて、デザインしている事は幸福なケースであると思う。この建物の設計が出来るまでには社内で何回もコンクールをやり、色々ディスカッションした上で決定したものであつて、決して安易な線では今度はアメリカ的なものでいこうとか、これはスカンジナビヤでいこうとか、何とかいうので、デザインしたのではない。お互の建物が共存共栄していく様に考えている。先程設計施工についての質問がありましたが、このビルの計画は、社会経済的な要望に對して答えていると断言出来ると思う。建築費をいくらにして、ビルの負担するパブリックなスペースがいくらで、家賃をいくらにするとか何年でペイするかという様な立ち入つた企画にまで設計者が入り込んでいつて、これを逆算的に費用とか設計とかを決めていくやり方であります。今の日本の

現状では建築企画から逆算的に設計するというのが課題でないかと思う。

- 大阪の表玄関であるこの附近の計画を建築協会のような組織をもつてある統一したものにしたいと思います。これは要望ですけれど。
- 第一生命ビルにも、今度出来ます阪神ビルもギャレージが付いていますが、このビルにないのは、何か考えがあつての事ですか。
- ×これは先程申しました経済的な企画におきましてギャレージを負担させる事が出来なかつた為であります。
- 梅田ビルだけの採算性を考えた時には、ガレージがないという事も考えられるが、大阪駅附近全体の事を考えた時には、この附近は非常に狭いんです。将来日本建築協会あたりで採り上げて全体の計画をかえない限り交通地獄の場所になるんじゃないか。たんなる採算性以外に、それに関連した交通計画というものが加わつて、はじめてこのビルの機能が生きて来るのじゃないかと思うんですが。
- この建物の座談会が建築一般論から都市計画論にまで発展して、非常に大きな問題となつて来たのですが、これを議論していたのでは、とても今日中に終わらないと思います。協会に対する要望も出ておりましたが、協会に権威があつても実行力があるかどうかは判らぬと思います。なにしろ土地は個人の所有であつて、国家の所有でないのですから大へんむづかしいと思う。

計画の上から見て大阪駅附近は種々様々のスタイルの建物が乱立しておりますが、先だつてノイフェルト教授がこの附近の建物を見学されました時に、第一生命よりもこのビルの写真を沢山写して行つたと聞いております。それでこのビルは段々訓練されて第一生命より成功しているんじゃないですか。ひよつとすると第一生命が失敗しているかも知れませんか。 (一同爆笑)

### 3. 防災の問題

- 先日、第一生命ビルに火災がありました。この経験から、このビルに参考になつた点とか、改造をされた点がありますか。
- ×第一生命の火災は、パイプ・シャフトを通つて各階に火が廻つたのでありますが、エレベータとかダクトという様な立体的なシャフトには、一番上に火災報知器だけは付けなければならないと思う。ダストシュートの上にはスプリンクラーをつけております。また、ダクトの外側の保温板が燃えるという事もあるので、保温板及防火ダンパーの廻りは耐火材料であるロック・ウール等で保護しなければならない。そういう点、ここも不備な点がありますので、これを尊い経験として今後直して行きたいと思つています。

### 4. ガラス・ブーム—大きなガラスの壁になつ

#### ている点について

- 最近の建築は、ガラスの面積が非常に大きくなつて来た。これは、アメリカのガラス・ウォール流行に倣つたものと思うが、地震国である日本では、これを保護する方法——サツシュを丈夫にする方法とか、ガラスをもつと厚いものを使うとか保護考慮が必要ではないか。
- ×この問題は戦後の一つの傾向であつて、私達は安全で然も強い建物を造るという事を目標としている。アメリカでは、ガラス壁が非常に多いが、これもステイル・サツシュの代りに、ステンレス・スチールを使うとか、その他ガラスを強くして耐久力のあるものを使うとか、アンチサンを使うとか色々の考慮をはらつている。日本ではまだそこまでいつていないんで、せいぜい、まだステイル・サツシュであつて、この耐力に対する考慮に欠けている。私達はこの点を反省して、窓の保護——それもサツシュの保護が一番問題であると考えている。朝日ビルの例からいくと、ステイル・サツシュの危くなる限度は大体20年であると考えられるが、これでは建物の耐用年限とアンバランスでどうも工合が悪い。(アラスカの部分は全部やりかえた)これについては水の問題とか、そのデイテールとかを色々研究をしているが、今後このビルのガラス壁に就ては興味をもつて研究して行きたいと思つています。この建物については、それほど極端に大きなガラス壁ではないんですが、別にガラス・ブームの流行にのつたわけではありません。
- 私も実は、ガラス壁については不安を感じている。ドイツにも『窓枠病』という言葉があつて、これを皮肉つていますが、ヒート・ロスが大きくて、冷暖房の費用もかさむでしょうね。どちらにしても原爆を禁止してもらわないと大変な事になつてしまいますが。(一同爆笑)
- どちらにしても、ガラスの保護にもつと費用をかけるのが本当じやないかと思いますが。
- ×このガラス壁は単にデザインのもて遊びでなくて、東側の採光面積が充分とれないものですから。そういう所からも御推察ねがいたいと思います。

### 5. エアー・コンデিশニングに關し

- エアー・コンデিশニングについて、そのコントロールの方法および第一生命ビルの場合の様にウエザーマスターシステムを用いた時には、人が入つてから勝手に間仕切をするとか換気が悪くなるという事が起つたのでありますが、このアネモスタットでは、どう考えておられますか。
- ×コントロールにつきましては、屋上3階に外気関係(30,000 ft<sup>3</sup>/min)のエアー・ワツシャーがあります。

リターンは階段の踊場のグリルから屋上2階の再循環用のエアーワッシャーに入る。この両者の空気が混り合つてダクトを下つて、各階の温調器（ヒータークーラー）にいき、更にレヒーターを通つて送風機によつてサイレンサーを通つて、アネモスタットから吹き出している。この温調器がコントロールしているわけです。空気の温度調整はレヒーターの温度を変えることによつて調整する。レヒーターの温度は系統毎に付けられたモーターバルブをサーモスタットで電氣的に結んで調整する仕組みになっている。冷凍機のコンデンサーを通つた暖い湯を加減してレヒーターの温度を加減し、一定に冷やされた空気をそれによつて調整する。将来間仕切をして換気が悪くなるというのは、吹き出した後の空気の始末が完全に行われていないわけです。結局かえり路をあまり考えないから空気の分布が悪くなるのであります。それで階段の踊場のリターングリルまで空気がもどるようにしなければならないと思います。

- オールイアラウンドですか。中間期はベンチレーションだけやっているのですか。
- ×中間期はベンチレーションだけです。空気を洗つて新鮮空気を送り込むだけです。尚殺菌はレターンだけをいつています。

#### 6. スティール・サッシ消耗品論から 建築消耗品論へ

- ×スティール・サッシが20年で腐るとすると、腐れば取換えたらどうかと思うのですが。スティール・サッシ消耗品論ですね。
- スティール・サッシ消耗品論非常に面白いと思うんですが、日本の建具は消耗品で取換えるようになっていきます。建物もそのうちに世の中が進歩して不便になるとこれを取壊わして新しく建てるという事になりやせんかと思うのですが、私は建築消耗品論だといいたい。大へん暴論ですが。
- アメリカでは50年か70年たつと採算を考えた上で、壊わして新しく建てた方が良となると新しく建換えるということが実際に行われている。日本ではそういう事はないですが。
- その内にそういう時代が来るのじゃないですか。今に建築物解体請負会社というのが設立されるんじゃないですか。（笑声）
- ×サッシを取換えるというのは良い考えだと思います。サッシを取付けるリブをあらかじめコンクリートの柱に埋込んでおきまして、これにサッシを取付け年限が来ると工場から製品をもつて来て取換えるようにすればうまくゆくんじゃないかと思う。アメリカの場合と色々事情が違いますが、要するに日本の現状



に合った新しい合理的な解決方法を今後研究して行くのがこれからの課題だと思います。

## 7. 仕 上

○この建物を見て一番感心した事は、仕上——特に左官仕上が綺麗な事です、何か秘訣でもありましたらお教え願いたいと思うのですが。

×私共は必ずしも仕上がよく出来ていると思っておりますが、只この現場で特に注意しました点は、腰のモルタル仕上です。手のふれる処は堅い材料で仕上げるというのでモルタルの上にペンキを塗ったのであります。プラスターと同様にきれいに仕上げなければならぬ、そこで職人に特にやかましくいうと同時に、職人と一緒になつて、現場でこの程度まで仕上げなければならぬという観念を植付けた事が成功した原因だと思ひます。も一つはコーナーボードを天井までのばしました。その為角の線が生きてきたのではないかと思います。またプラスターは電気で片光線をあてて見て細かい鍍むらもなくなるように注意をしたが、やはり隅々まで見ますと不備な点が多くございます。

## 8. 反響、騒音、地下道コアーシステム

○この建物は反響が大きすぎるように思う。また外の雑音も相当入つて来るようですが、この点どの様に考えておられますか。また大阪駅から地下道をここまで延ばさなかつたのはどういうわけですか。

×音響の問題につきましては設計者からお答えすべきだと思いますが、施工したものからお答えしますと、一つはコストの問題が多分にあると思ひます。この天井は耐火ボード貼で、水性ペンキ仕上となつておりますが、これはコストも安いし、取外しとか修理が簡単である。もう一つは、耐火ボードはテックスよりも耐火的で防災という点からも使われていると思ひます。

×ここに既に入つておられる人達で、タイプライター室になつている処が反響が大きいという事は聞きました、一般の事務室ではそういう事はないようです。

×こういう建物が空の場合と人が入つた状態とでは、人間が吸音になるし、間仕切、カーベット等によつて音響の状態が相当変つて来ますから反響の問題は解決されると思う。一般的にいつて貸ビルは空の箱を貸すわけですから入る時に新たに内部設計をやるわけです。そこで反響とか騒音という問題は、第二段階として処理される事になると思ひます。

○今は工事中なものですから何かとざわざわしていると思ひます。

×地下道は当初阪神と第一生命ビルとを結ぶ計画があつたんですが、その通路に当る処に大きな下水管があつて、現在では出来ない状態にある。しかし将来恐らく連絡される様になると考えられますので、地下道が造れる様には地下室の壁をしてあります。

○このビルはコアー・システムになつておりますが、これの利点があれば述べてもらいたいと思ひます。

×所謂コアー・システムの狙いは貸付けて有効にお金の取れるスペースを広くするという事です。これを最大限に取りますとワン・フロアーについて約80%有効な面積が取れる。その真中の暗い所に切りつめられた、エレベーター、便所、湯沸場、階段、ダクトを集中するわけです。これが第一のコアーの原則である。それで、ここは私共の標準からいきますと有効面積約300坪に対してやや圧縮された感じである。これは結局貸付面積を少しでも増やして、一年でも早くペイしたいという原則論に従つてこういう結果が出たのであります。

○これは経済研究の為の建築だそうですから、色々問題もあると思うんですが、予定の時間も来ましたから今日はこれで終りたいと思ひます。

— 終 —

★批判への批判——土俵なしの批判会ないし訊問会として興味がある。経済的な土俵の中での相撲だという事はみんな分つてゐる筈だ。野つ原で相撲を取つたのでは既に相撲のルールを離れている——という点も多少ありますね。(浦辺記)

# 杭

説明書及び防潮  
嵩上、盛土地帯  
に於ける実績表  
進呈

特 許

武智式鉄筋混凝土杭基礎工  
日信三角型鉄筋混凝土杭基礎工  
コンボジット、パイル(長尺継杭)基礎工  
測量・地質調査・地耐力測定施工

特 長 砂利充填による特殊施工法  
支持力強大。工事迅速。工費低廉

## 株式会社 武 智 工 務 所

取締役社長 福 留 並 喜

大阪市西区西長堀北通四丁目一〇 細野ビル三六号  
電話新町③九九五～九九八

# 座談会「これからの建築技術教育はどうあるべきか」5

主催 日本建築協会教育委員会

昭和29年11月6日 自午後1時半—至5時半  
於 今 橋 ク ラ ブ 4 階 特 別 室

出席者 (五十音順・敬称略)

浅井 貞 治 (双星社 竹腰建築事務所)  
五百蔵 芳明 (大阪府 建築部 指導課)  
佐藤 寛 二 (株式会社竹中工務店設計部)  
柴垣 貴 雄 (野村建設工業株式会社設計部)  
隅谷 一 郎 (株式会社大林組工務部)

多屋 幹 夫 (近畿地方建設局 営繕部)  
中 塚 二 郎 (大幸建設株式会社設計部)  
司会 中野 順治郎 (教育委員 大阪市教育委員会指導主事)  
松浦 潤一郎 (日本毛織株式会社 営繕課)  
棟 居 幸 一 (日建設計工務株式会社設計部)  
鷲 尾 健 三 (教育委員長・大阪大学教授)

中野 教育委員会では昨年来、この種座談会を4回実施してまいりましたが、これは技術教育のやり方に対する資料を与えようという目的で、第一回は最近の建築卒業生に対して、学校側、使用者側として改善せねばならない点があるので、学校側と経営者側と話し合い将来の方向を見出そうと考え座談会を実施した。なにしろ使用者側は範囲が広いので、官庁、設計事務所、請負、営繕と網羅したかったが出来なかつた。そこで2回、3回と分けてやつてみた。第一回目は建設業者が多く、二回目は設計事務所、いずれも建築教育の将来に対する意見が多く出ました。第三回目は前二回で出られなかつた方々に出席願ひ、第四回目は学校を出て間もない、学校教育の味が残っている若い人達に来ていただいた。年寄の若い人達に対する批判があつたので若い人達の意見を聞いたわけである。

今日は第五回目の座談会ですが、お集り願つた方々は現在責任ある仕事をしておられる方々で、戦争中に教育を受け、直接戦争の被害を受けて来られた方々でもあり、戦後の苦しい時代にも仕事をしてこられた方々だろうと思います。その意味で最も苦勞をなさっている方と思いお集り戴いた。条件の良くない時代を過し、苦勞をされて来た方達に、建築の後継者に対して、どうなつて欲しい、どう考えて欲しい、とかいう事を経験を通してお話しになつていただきたいと思います。従つて年令も35才—40才迄の方で各方面の代表的な方々をお願いしたところ、本日全員御出席を戴きありがとうございます。これから3時間程充分にお話し願ひたいと思います。私が、鷲尾委員長より司会をやるようにとのことですが、センスが皆様と異つているかも知れませんが、その点は注意して戴くことにして、お話を進めて下さい。

第1回から第3回の座談会を通じては年配の方が多かつたが、その話の内容は二通りに分れた。その一つは学生、卒業生の心構えに就て経営者としての注文、主として、不満に思う点についての話で、もう一つ

は人柄は余り問題にしないで、若い人の建築技術的能力の面から突つこんだ意見とであつた。第4回の若い人の話は、大体建築理想論に終始し、多角的な、或いは漠然とした建築に対する意見で、その中で学校のあり方にも希望があつた。そこで今回ですが、実際に仕事をしておられる方々に来て戴いているので、具体的に実のある話を聞かして戴きたい。(鷲尾委員長出席)

五百蔵 最近の若い人は何も知らずに出て来るという意見に対して、私はそれで良いと思う。3、4年で使える人を生むのはむづかしい。出てから10年程たつて始めて完成されるのだと思う。だからむしろ人格に重きを置き、出てから大いに勉強していけるような素地をつくつていく方が良い。

中野 そういう見方で余り欠陥を見出さなかつたか？

五百蔵 私の場合はない。私自身もそうやつて来た、基礎的なものを持つていたら完全にマスターしてなくても良い。

中野 若い人達の考えが、自分の思う事と違つていて意外に思うような事はなかつたか？

五百蔵 余りない。

中野 今までの教育法でさしつかえないというわけですか？

五百蔵 むしろ社会に出てから教育して欲しい。それが重大だ。若い人が出てから2、3年で駄目になる例もある。それは学校での責任よりも職場の責任である。

鷲尾 完成教育でなくとも良いというのは学校で、完全には出来ないという意味か、それとも下手にたたき込まれると困るという理由からか？

五百蔵 いやそうではない。

佐藤 私は今の話に賛成です。大学の4年、工業学校の3年でどれだけ巾のあることが出来るか、それを望むのは無理でしょう。私の方は最初1年は見習い、その後2年は皆で教育し、4年で1人前に教育が出来、始めて本人が伸びるかどうかが見当がつく、そこで設計に進むか、現場へ出るかに分れる。その点で学校教育

は基礎教育で良く、後で伸びるかどうかは、私等の教へ方如何である。最初自分が出来ると思つて人に無理が生じ、巾の広い基礎教育を受けた人が伸びると思う。請負は天才的なデザイナーよりも組織の歯車の中で真直に働いて行けるような人を求める。

中野 人柄が問題になるのですか。

佐藤 そうです。入つてから勉強しようと思えば充分出来るのですから、現場を見て分る程度の基礎的な知識をもつてほしい。

中野 そうするとどの程度のものが基礎的な教育というのかが問題になる。

浅井 私自身が未だ教育される年代にあるのですが、毎年若い人が這入つて来られるのを見てみると、終戦後は戦争の影響による訓練の不足が感じられましたが、最近ではあまり意に介せず製図など上手になつて来ましたが、建築の技術者としてデザインの表現である製図に対する訓練と技術である限り「数」についての切実さを助長する教育が必要だと思います。竹中さんのように職場での再教育など設計事務所では困難です。自然先輩の指導がそれに代る訳で良い意味の徒弟教育を厳しくすることになります。

中野 徒弟教育を厳しくやるという話に対する考え方が色々あると思うが、その気持ちで若い人々に当つたとき受入れないことはないか。

浅井 私のところでは心配ありません。

多屋 吾々は若い人達に色々望む以前に、若い人達が今迄どういう風に育つてきたか、その現状の把握が足りないと思う。そこで学校でどんな教育をやっているか、逆に先生に質問を發したい。

驚尾 大学側として一般的な事は答えられない。新しい教育制度になつてからは技術教育に於ても専門の教養的な教育という考え方が勝っている。それで専門的な時間が足りない。東大や京大ではこれではいけないという動きが見えてきて、京大では5年制の問題が出たし、また旧帝大を修士コースにまで上げようという話も出ている。私の方もそれにめれない。私の方は構築という名前で建築業界と結びついている。歴史が新しい土木といつしよなので現在のところは構造に片よつているから、現場に出る人も構造の方ではないかといわれるが、完全就職しないと困る。自分等の教室の立場からの考え方は専門学校のだが、まず第一にある程度頑張る事と責任とをやかましくいつている。学生は最初建築に憧れているが、卒業の半年ぐらい前に自信をたたきつづす、しかしそんなことを気にしていると、徒弟教育のような気がする。建築をやりたい人が入つているとよい。本当に建築がやりたかつた人が入つてきたら入学試験の成績が悪くてもあとでどんどん伸びる。

中野 そこで問題を多屋さんに移そう。

多屋 たしかに私達公務員の立場より考えて、今までの学校卒業生（特に大学生）は建築そのものを自分にとって最良のコースと考えた人も多いだろうが、その考え方にすぐに偉くなるという事が頭の何処かにある。勢い下積の期間が少いのでやる事に身が入らず上滑りになり、後から困るのではないか。若い時にがつちりした下積の期間をもつと置いて本人の自覚を促すべきだ。

五百蔵 たしかに私もそう思う。私なんかも下積の経験がないので後輩には逆にそうさせたいと思う。

多屋 年次がすぐに問題になるが、それは単なるカンバンで腹にしつかりしたものが在ればよい。

驚尾 それが官庁の本質だと考えているのではないか。業界は金もうけであり官庁は技術的な面はやらないのではないか。

中野 役所の人は鍛練されていないから、建築技術の能力にかけているといわれているが。

驚尾 それが専門ではなく運営が主である。

多屋 中堅のやる事はもつとがつちりやらないといけな

い。驚尾 電々の人もそんな事をいつていた。自分等も現場に出ているがそこで実際に仕事をやりたいがそれより間違いを起さないようにスムーズに進行させるのが務めだといつていた。

中野 専門のための教養ですか？

驚尾 そうです。よそで設計したものを管理する立場は運営が主だ。

松浦 営繕の立場でも専門的な技術よりその人の一般的な教養とか情操教育に重点を置く。

中野 同じ建築を出ても職によつて異なりますね。

驚尾 建築の業務の立場から考えたらどうなりますか。

松浦 同じ営繕でも工業と繊維業では異なると思う。

中野 大林さんの方は如何ですか。

隅谷 注文が多くある。私の方からいうとこれだけの技術教育で大丈夫かという心配は必要でない。それよりもつと広いことについて勉強する方がよい。戦後材料にしても施工にしても、日進月歩の現状である。これを理解し適材を適所に使いまた一步進んで新しく生みだす努力がなければこの時代に取残されることになる。私の望むところはすぐ役に立つだろうと思われる教育は現在の程度でよいが、その他に電気、機械、衛生、医学、気象、地質など広い面に対する知識がほしい。それ等は学校を出てから教えてもらえない。だから10教えてもらつたら11を知る知識を植えてほしい。

横居 理論的には学校を出る時は技術、人格とも一応完成された形で出てきた。それを買われて、会社なり、事務所に雇われて報酬を貰う。学校から社会に出て大い

なる希望と夢をいだいてた、しかし現実の社会は自分の考えとは、はるかに遠く色々なことが喰違つてて考えさせられる。一層勉強しなければならぬことに気がつくので使う方としても再教育せねばならぬ問題になってくる。伸びるか伸びないかは本人の心構えと、指導如何だから「鉄は熱い中にたたけ」式にたたかねばならない。入つて来る人の心構えに二つの型がある。自信のある人は自分の力で進もうとし、自信のない人は先生を通して建築を創造しようとする。その場合昔は先生が手を引いて導いてくれたが、今はそうではないように思う。で結局個人がそれを自覚して先生や先輩を通して建築を学びとらねばならない。先輩の方も指導してやつてそんなことでは建築はつかめないぞと自覚させてやらねばならない。勇気のある人は先輩にすがつて行くが、気性の弱い人はすがりに来ないから、たたいてやると卑屈になる傾向がありむづかしい。指導者は人をよく見きわめて導かねばまずい結果になる。技術者になるには本を読んだり又経験でその技術を覚えられるが、アーキテクトになる為には簡単にいかないのてきびしい訓練が必要です。教育の方法も問題です。

**中野** 浅井さんと似ている、かつてやつた教育をやるべきだというのですか、その態度が出来ていないと困るという考えではないですか。

**棟居** 小さい組織のところでは指導する人と良く接近しているが、大組織のところでは、先生から直接恩恵を受ける事が少いので、前にも申したように個人が自覚して積極的にすがつて先生の良い所を早く自分のものとして完成する様にしなければならぬ。暫くは給与のことなどあまり気にせず自己の完成と仕事に興味を持つことで一杯であるようにしたい。総ては後からついてくるものであるから。

**中塚** 私の立場からは、大体今までの意見は同感だが基本教育の面では、われわれ請負では、ある程度の構造計算やデザインなどは、学校で教えてくれる程度の事は完全に憶えてきてほしい。それでなければ本人自身があとで頑張らねばならない。卒業してやれやれという気持は無視せねば、そんな人は落伍していく。

**中野** 学校の基礎教育は厳しくやれという事ですな。

**中塚** あれだけの期間で広い範囲をマスターすることは出来ないだろうが、教えてもらつたことはマスターしてもらわないと困る。卒業するときは優秀な人も、そうでない人も同じだが、それ以後の心構えで変つて来る。私の方では年次は問題にせず実力でやる。

**柴垣** 学校では広く浅くしか出来ないが、私は20年前機能主義を徹底的に教育されたが、いまでも設計計画の考え方の基本になっていることは、教育の力の偉大さをつくづく感じている。私としては理論的に基本をし

つかりやり、社会に出てから、その選んだ道で惑わずに目標に向つて進んで欲しい。即ち骨格は学校で、肉付けは社会ですればよいと思う。デザイン教育は非常に難しいといわれているが、基本的なものが出来ていると新しいものを吸収してゆく上に非常に役立つ。美の本質を徹底的に理解すれば、建築に於けるデザインも理解し易い。特に現代では経済的にも非常に制限を受けるので構造的な美、即ちデザインという考え方は我々の教えられた機能主義がなお現代に生きているものと思う。

**中野** 学校教育の解釈だが。

**柴垣** 美の本質を理解さし、正しいセンスを身につけるよう教育すれば良い。若い方も建築技術全般を身につけるのはむづかしいが、構造でも、デザインでも、その一つの正しい考え方を完全にマスターして置けば、社会に出て色々ぶつかる問題にも自信をもつてのぞめるのではないかと。

**中野** 建築というものは、どういふものかを知らねばならない。

**柴垣** 考え方を確立しなくては進めない。同時に時代の感覚を身につけることが必要だ。

**中野** いままで聞いたところで高等学校にしろ、大学にしろ、その基礎の内容については異なると思いますが、そういう学校時代の基礎教育のつけ方、出てから2、3年どういふ教育をすべきか、についても皆様は基礎教育を担当するとしての意見をいつて戴きたい。良いとか悪いとかでなく問題を掘り下げて行きたい。基礎教育について数人の意見があるが割合に寛大にみている。浅井さんの意見はもうすこし徹底的にやつて欲しい。という意見で、鷲尾先生の説明は専門のための専門としての基礎教育と専門のための教養としての基礎教育とがあるというのです。隅谷さんの意見は科学的な巾のある基礎教育を求められ、柴垣さんの建築論的な考え方と対称的です。それから、棟居さんの主として出てからのお話しで本人の態度を重くみている。中塚さんは今の程度の教育をマスターして出て欲しいという。以上のような御意見をならべてみて、それを補足的に進めていただきたい。

**五百蔵** 基礎教育は甘くでなく基礎程度で良い。と考えます。

**中野** その場合の基礎が明確でないが人間的な基礎かそれとも。

**五百蔵** 技術的な基礎だ。即ち構造計算位は出来る程度の基礎のことだ。

**中塚** 全部マスターして直ぐ使えるというのでなくとに角、広く片輪にならないように身につけて来て欲しい。

**五百蔵** 私の経験からいうと自分でこつこつとやつて行けば2、3ヶ月か半年位で仕事に分るという程度の基

礎教育をやつて来て欲しい。

**中野** 大学は八百屋式のあれもこれもではなく、いまやつていことをマスターして来いということですね。

**五百蔵** そうですが何もかも細かくやつて来る必要はない。

**佐藤** 学校では道を教える程度で良い。その方法だけ教えれば良いのでそれが基礎教育だ。

**鷺尾** 今程度の基礎教育で良いという意見に対して考えられることは、古い学校は良いとして新しい学校でこれから卒業生を送り出そうという時、半年か一年以内に使う方ではお前の所では云々と評価され卒業生の評価や卒業生の評判で学生の質がきめられる。また研究の業績や卒業生の評判の良し悪しで建築を志望(入学の)する学生数が異なつて来る。だから卒業生が早く重宝がられることも必要である。広く浅くというのも考えられるがそれでは、あぶはちとらずになる。学校として遠大な計画でやつていと落伍するかもしれない。各学校で特色があつても良いかとも思われる。

**鷺尾** 受け入れる方で、すぐ利用されなくても良いという所は極く少い。卒業生のうち大会社にいく人は極く僅かであるから、中小会社に行く者は、とりあえず何か特徴を持つていの方がよい。これは矛盾しているが。

**棟居** 建築全般を知るのは困難である。基礎学の点で歴史をしつかり勉強する必要があると思う。衛生や意匠でも歴史が必要である。今では機能主義というのが出たが、テクニツクの方が進みすぎて、本当の意味のものをつかんでいない気がする。これは歴史を見ていないからではないか。現実がこうである為には、過去がこうだつたというのを掴んでいない。特に意匠の点で歴史が大事である。

**中野** 高等学校の建築を出た者で中少企業に行く者は、全体の80%位で再教育されない所えいく。そこで1年あるいは2年で判断される実状である。

**多屋** 今まで色々基礎教育という事が問題となつているが、私は必ずしも全般的に広くやる必要はないと思う。もつとタフな人を作らねばいけない。それには学校でその人特有の才能を充分盛り上らせて置くと、後に進む時に大きな原動力となる。頑張りものきく物事をシステムテイツクに考える人になるよう指導していただいたら将来社会に出た時に、頑張りものきくので万事に融通がきくと考える。

**中野** そのような考え方からいくと学校で構造的な方意匠学の方と、コースを分けて行くのが良いのではないか。

**佐藤** 現在では分けていのですか。

**鷺尾** 分けてやつても旧制の3年生と新制4年生の力とでは非常に違う。これは学生が悪いのか、時代が悪いのか、多分時代が悪いと思うが、今の学生は、自分で

やらそうとすると、なかなかやらない。昔は先生に対して逃げたが、このごろでは先生を頼りすぎる。

**佐藤** 個人的に教育出来る程度の生徒の数ですか?

**鷺尾** 吾々の所では、多少は多過ぎるかも知れないが出来る。世話を焼きすぎるのか、そうせざるを得ないのかどうか。

**中野** 基礎教育の内容を多面的にやる事が可能か?

**鷺尾** 京大のある教授は自分の専門以外のものでも興味あるものは、他の専門書でも読んでい。このごろの連中は余り読まないようである。経済的な理由もあらうが気持として、そういうようになってい。

**五百蔵** 昔は理科の人でも、文科系の本をよく読んでいた。

**佐藤** 就職の心配が無かつたからだろう。

**浅井** 基礎教育として、耳と目からの教育は受けているが手の教育が足りない。勿論一番大切なのは心の教育ですが、学校の講義は始めから終りまで一貫して欲しい。構造の講義など中断されたものは卒業後になじみが悪く興味が湧きにくいようです。それから美術館で先生の解説でゆつくりと観賞させたり陶器づくりをやつてみたり、粘土の建築模型を創作するとか耳だけでなく目と手の教育を充分にすれば、だんだん物を見る目が出来てくると思う。

**鷺尾** 構造の方として弁明すると、先輩に罪がある。デザインより構造の方がやさしい、デザインはなかなか説明できない。

**五百蔵** 半年ぐらいで構造計算は出来るようになる。構造はむつかしくない。

**中野** 耳からの教育は、結局考える教育だと思う。考えるプロセスを身につければあとはその人の力量で伸びられると思う。

**浅井** 筋道ぐらいは知つていと独修を発展させるのに楽だと思う。——それから大学を出てから建築が嫌になり法科にうつたり、高校を出て大学に入らず就職希望する人など困つたものです。もつと人生に出発から真剣味が欲しいと思います。こんな気持では世に勝つことは出来ない。

**鷺尾** それは家庭の方の意見が多いのではないか、結局苦勞させねばならぬ。耳から聞く教育は反対だ。例えば、バスガールの説明はその場限りである。

**五百蔵** 名調子の講義はその時良くわかるが家へ帰ると忘れてしまう。

**中野** さつきの話で熟練という事をいわれたが、建築で熟練とはどの程度か。

**浅井** 製図に時間をかけて綺麗に書ける人は沢山ありますが、早くそして少々雑でもアイデアを纏められる人が望ましい。

**柴垣** デザインの基本教育について根本的な理論のみや

れば良いという誤解があるかも知れないが、手の教育は勿論必要で、自分の考えを自在に表現出来る技術の修得が肝要だ。

**隅谷** 建築は範囲が広いので最後の年度には少なくともデザインと構造というように分けて欲しい。

**鷲尾** 分けた場合業界としてはどうか。

**隅谷** 基礎教育の話があつたがこれを基本と解釈するといいいのではないか。基礎教育は絶対やらねばならない事であるから現在よりはもう少し基本教育をやつてほしい。先の中小企業では教育するのは無理だという御意見に対しそれこそ必要ではないかと思う。中小企業であつても将来大きく伸びていかれるのであるから、もつと目のある方針を取つたら良いのではないか。もう一つ業界に入る人について業界はもうけ第一だと考えているのには反対だ。業者の技術者はもうけの外にあると考えられる。もう少し理解してほしい。もうけは事務屋が決めるのであつて技術者に責任はない。

**五百蔵** 大きい所ではたしかにそうでしょう。

**鷲尾** いいわけをします。私がいおうとしているのは大きなもうけは請負全額で決まるがそれにしても、あとわずかでもうけるとか損をするにしても最少に止めるとかいう様なもうけの方法論である。技術屋は技術を通してもうける様にせねばならない。

**隅谷** 会社全体からいうと技術のためにやつている。技術屋は全体の約半分しか居らぬ。

**鷲尾** それが技術家が営業の方に廻つた時、金もうけならいやだという様な人はおかしい。

**隅谷** 請負に在る技術屋は金もうけ以外に技術を見なければならぬので苦労している。

**中野** こなすということは技術的にこなすのか予算内で損をせぬ様にこなす意味か。

**隅谷** 十の中八九は技術的にこなさねばならない。

**浅井** 請負の現場技術者で設計者に対してその施工法について有利な方法を考えて意見を出す人、また現場を大切に養生を充分にして駄目を残さない人はもうけるということを越えて立派だと思う。

**鷲尾** 釘一本でも無駄にしないというくらいちゃんと考えている人そういう気持の人でなければ業界に入つても好ましくない。

**中野** 隅谷氏の建築技術の基本教育からみると、経済的に何か缺けていと思ふぬか。経営あるいは経済の基本教育はやつていないのではないか。

**鷲尾** 今いう事は考えている。私の学校の場合建築生産学の講義を設けたりしているが。

**隅谷** しかしそこまで要求しても無理だと思う。

**中野** いやそれは学校の基本教育としてやるべきだ。

**鷲尾** 施工の講義は細い所ばかりであるが経済の労働方面のもやる必要がある。構造計画の方も無理のない経

済的な計画をしたいと思つている。

**浅井** 私のところでは竣工建物の掃除を若い人達に手伝わせますが現場の掃除を通じて材料、施工の良し悪しなど理解することが出来ます。

**松浦** 仕事に対する利潤は今の若い人は割り切つているようだ。昔の教育を受けた人は利潤を無視して良いものを創りたいと考えていた。

**鷲尾** けれど社会の立場で割り切つているのならよいが自分かつてに割り切つているのなら問題である。

次に資本主義経済社会ではなんでも一応お金に換算するのは便利である。

**柴垣** 業者で設計している人は算盤によらなければ設計が出来ないという人がある。

**鷲尾** しかし学校でそれをやる必要があるでしょうか。

**一同** ない。

**佐藤** しかし先生の方でそれをはつきり理解しているでしょうか。

**鷲尾** 具体的には出来ないが一般的には出来る。

**中野** 出てから二、三年間教育をすべきだという事だが卒業後の教育についてまた本人の心構えや態度についてお話して欲しい。

**多屋** 話は少し逆戻りはするが建築家は徹底的に目の教育が必要であるとか、ここで色々議論されて来たのは至極当然の事ではあるが、稀れには建築家の中から線の太い広い目で世の中の状況を見得る人が出ないと土木の人達なんかには伍した場合不利になると思われる。そこで大きな目で世界の情勢を洞察し建築家を引張つて行く、器の大きな建築家の出現を私は大いに期待したい。

**鷲尾** その意見を待つていたのだが同じ建築界の中でお互に喰い合うのはいけないというのと同じであると思うが学校で具体的に学生に教育するのはむづかしい。学校で厳しくやり過ぎるといぢける場合もある。大学に入つてからそういうスケールに仕上げるのはむづかしい。

**五百蔵** 私は土木と建築は入る時そんなに違わないと思う。

**隅谷** 片方は国家的事情が多いので範囲が違う。

**棟居** 技術教育の問題で建築家は建築技術だけでなく、アーキテクトとしてだけの教育が少なく混合して技術が主になつていてのではないか。建築事務所では建築家という面と、建築技術という面とがはつきりしていないと誤る。単に建築技術だけでなく芸術と結び付けて建築を造形して行く人であれば、社会にとつても良い。

建築事務所に入ると先輩のドラフトマンとして働く。このワーキングドロインダをどういうものであるか理解していないといけぬ。ワーキングドロインダに依

つて自分の考えを皆に見てもらって仕事をするという心構えでドローせねばならない。またそれが一番良い。アーキテクトの範囲をはつきり認識する必要がある。

**中野** 本筋にもどって卒業後の教育あるいは勉強をどういう風にすべきかをもう少しお話して欲しい。

**鷲尾** きびしいトレーニングをせねばならないのかまたは社会状況からいつて必要なかはつきりしないが。

**佐藤** 学校で基本概念を得て請負に入ると分業になり、設計は設計だけとなるそれをやるには、学校の教育だけでは役に立たぬ。それで出来るだけ早い期間に出来る様な訓練が必要だ。

**多屋** 我々は受入側として、入つて来る人達にとつて矛盾がないかを考え、我々受入側としての改造の努力と入つてくる人達のこれから、さあやりましょうという努力の呼吸がピッタリ合つた時には万事巧く運ぶのではないだろうか。各職場のやり方、受入れ方について聞かせていただいたら大いに参考となります。

**中野** 大変結構です。下積時代の教育を具体的に。

**多屋** 例えば工事を契約した以上、施主と施工者とは対等の筈であるが、施主の方が何だか、気分的にも上の様な気をしていて。それはいけない。工事を初めたら対等でどんどん意見を出し合つて協力してやるべきだ。要は建築を如何に最底の金で正しく創るかが問題である。

**棟居** 役所の場合書類で制約される傾向があるのではないか。

**多屋** そこに教育の問題がある。仕様書の真意を充分理解して、自由に弾力性を待たせる様教育したいと思っている。請負業者の方は出世は当人の成績に依るという事であるが、官庁ではそうでない面が多いので真剣味が足りない。

**浅井** 事務所での教育の一つとして現場と関連して設計図についてまたその制作建物についての批評とか失敗談が良い教育になります。

**隅谷** 出てから三、四年が一番大切である。大体十年間は現場主任の見習と学校の勉強の復習もやらなければならない。計画的に勉強する必要がある。例えば知らないものを知らないままに済ます者もいるが真面目な者は自分で機械を研究するものである。そうすると何かにつけて心構えが違うので大変差ができる。学校の教育以外にまだまだ多く勉強せねばならない事がある。

**鷲尾** 前の座談会で若い人が学校が三年で教える事を我々の所で三ヶ月程で教えられるといっていたが。

**佐藤** 本人が会社に入つたら身にしてみても考える。

**中野** 前の座談会の時若い人の意見で伸びられる様に仕

事と両立する指導組織があると有難いといっていたが会社としてそんな配慮があるか。

**中塚** 私の所では設計と現場をさせて一応何でも出来るようにさせている。若い者は純粹に考えて理解出来る場合に落たんする者もあるがそれをぐんぐんやつて行ける人を出来るだけ多く作る必要がある。

**鷲尾** 学生時代から問題になるが先輩と後輩の関係がうまくいかないで教えられる機会が少なくなっているのではないか。それが非常にマイナスだと思う。昔は先生から受取つたものより先輩から受取つた事の方が大きいと思う。

**五百蔵** 私の時代でもそういう事が感じられる。

**中野** 最近の生徒は私的には発奮するが公的のことは発奮しない傾向があるのでそれが非常にマイナスだ。そこで最近の教育が悪いのではないかという疑問が起る。家庭の事情も考えられる。

**浅井** 家庭の事情だと思う。

**鷲尾** 協会を通じて職場教育に関係のあるものがあれば協力してほしい。先のコンクリート講習会は好評だった。

**中野** どういう所を勉強したいとか、こんな事を知らせてもらいたいというようなものがあれば協会として取上げたいと思う。

**松浦** 個人的な事になるが我々にはこのような座談会や講習会に出る機会がない。勤務時間をつぶしていく事は歓迎されない、その点を考えてほしい。

**佐藤** 学校の方で卒業生を集める方法もあるのではないか。

**中野** そうですね最近教育界では現職教育が年々盛んになつてきている。コンクリート技能講習会のような建築業界としての現職教育が必要だ。

**鷲尾** この座談会も第五回で終わろうと思うが。

**佐藤** 卒業前の学生の意見はどうでしょうか。

**鷲尾** それはなかなかむづかしい。先生を前にしては出来ない。卒業したての人と皆様ぐらいの年配の方との対談ということでどうだろう。

**浅井** 学生から疑問意見などをこの一連の座談会に出た人達に手紙でいただいて応答の形式にしては如何ですか。

**中野** まだまだ残つていると思いますが、時間もなくなりましたからこれで。

**鷲尾** 協会として夙に会員の皆様の御役に立つものを、どんどんやろうとしておりますから御気付の点がありましたら後程協会の方へ御連絡御協力下さるようお願いしてこの座談会を終りたいと考えます。長時間ありがとうございました。

昭和27年度から始めた教育委員会の、「これからの建築技術の学校教育はどうあるべきか」を主題にした座談会は、昭和27年12月18日の第1回設計関係の分を、本誌昭和28年2月号に、昭和28年2月19日の第2回設計・建設業関係を同4月号に、同3月18日の第3回建設業関係を同7月号に発表することが出来た。原稿全文の発表を許して頂いた編集委員会の御厚意には、全く感謝の外はない。

出席者についてなどの企画に慎重すぎて大分間をおいた、昭和29年8月1日の、若い技術者を招いての第4回座談会記事は、遅れて、昭和30年5月に、最終企画の中堅層の方々をお招きした昭和29年11月6日の第5回座談会記事は、漸く今回本誌に発表の機会が与えられた。色々な編集企画の中に、割込まして頂いた編集委員会の御厚意に対して、お礼を申し上げておきたい。

この総決算の時に当つて、担当委員会の世話役として私に発言の機会が与えられたことは、光栄の至りである。この機会に、協会の委員会活動について腹藏のない所を述べさせて頂きたい。失礼な点は、協会のことを思うその真面目な意途に免じて、お許し頂きたい。

座談会の企画が成功であつたか否かには、ここには触れない。ただ、会員諸賢の御批判にまつばかりである。何等かの研究課題を提供することが出来、あるいは、協会のその後の事業に、また、会員諸賢に、何かのお役に立つておれば、関係者の一員として、これに過ぎるようこびはない。

私が、ここで、特に会員諸賢の御批判を得たいことは、委員会活動のこのような発表形式についてである。私は、協会の事業は、会員の総意の利益を代表して、社会に働きかけることも大切であるが、会員の一人一人にプラスになることも、それに劣らず大切であると考えている。そして、会員各個人に、公平に必ず伝え得る手段は、会誌を通じての外はない、だから、委員会活動の成果は、なるべく会誌上に発表すべきであると思つている。講習会等は、如何に各地でやつてみても、結局一部の会員に聞いていただけるだけで、全体の利益ということになると、一部の会員へのプラスが、やがて建築界全体へのプラスになる時期までまつ外はない。これは、論外である。

以上のことから、当然ながら、我等の会誌「建築と社会」は、編集委員会だけのものではないことがいえよう。教育委員会から、色々編集委員会へ、原稿掲載をお願いし、また、差出がましくも、企画について進言したのも、こういつた考えから出発していた。すべての委員会活動は、会誌上に結果すべく、この意味で、会勢委員会も会誌を重要視すべきであつて、このことについて、

会勢・編集・教育3委員会の合同懇談会を企画したらどうだろうかと、何回か真剣に、教育委員会で検討された位であつた。

この見地から、教育委員会から編集委員会への申出が、事前打合せで諒承されていたにもかかわらず、完全に会誌に反映する所までは行かなかつたのは、私としては、ほんとに残念であつた。しかし、編集委員会の御都合もあることであるし、やむを得なかつたであろうと思つている。ただ、甚だ遺憾であつたのは、昭和29年2月号所載の岩下委員の「現職教育に関する調査結果について」の論文に、教育委員会から廻した原稿以外の、これに対する批判・注文が、編集委員会の紹介の辞として加えられていたことである。編集委員会の事業についての教育委員会の意見は、委員会から委員会へ申入れした通り、編集委員会も教育委員会の事業に対して意見があれば、委員会へまず申入れて来られるべきものであると考える。ことに、「調査と『民主的な働きかけ』」を同時におこなうべきであるなどと、判つたような判らぬような注文を、連絡なしに、いきなり誌上に発表されたのは、私には理解しかねることであり、教育委員会でも問題になつた。その昨年2月号は、編集後記の署名が（係）となつており、実際上の編集責任が判らないのでまさか編集委員会で正式につけられた紹介文とも思えないので、委員会では結局抗議しないことになつた。しかし、もう時効にかかりかけているとはいえ、協会の各委員会が仲良く会員全体のために協力する体制をくずしたくないから、私の個人の意見として、注意を喚起しておく次第である。もし、私の勝手な意見を許して頂けるとしたら、協会の各委員会等の連絡を緊密にするような、何等かの対策をたてていただきたいと考える。それが、結局、協会の使命達成に大きくプラスすることを、私はかく信じている。（昭和30年・7・7）

（御説の通で今後条件の許す限り連絡と協力の点は努力致します。昨年2月号の件は私としては就任前のことでありますが充分注意致します—浦辺編集委員長）

|                                                                                                                                |                                                |                                           |                                                     |                            |                                                |                                           |                                                     |                            |                            |                            |                            |                            |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------|-------------------------------------------|-----------------------------------------------------|----------------------------|------------------------------------------------|-------------------------------------------|-----------------------------------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|
| 株<br>社<br>大<br>阪<br>市<br>北<br>区<br>木<br>幡<br>町<br>三<br>一<br>番<br>地<br>電<br>話<br>堀<br>川<br>四<br>一<br>〇<br>一<br>六<br>四<br>番<br>番 | 合<br>理<br>的<br>工<br>法<br>・<br>責<br>任<br>施<br>工 | 防<br>錆<br>完<br>全<br>・<br>中<br>空<br>防<br>音 | 耐<br>震<br>・<br>耐<br>火<br>・<br>軽<br>量<br>・<br>堅<br>牢 | 採<br>用<br>下<br>さ<br>い<br>・ | は<br>日<br>進<br>式<br>を<br>御                     | を<br>・<br>軽<br>量<br>鉄<br>骨                | に<br>は<br>軽<br>量<br>鉄<br>骨                          | 間<br>仕<br>切<br>・<br>天<br>井 |                            |                            |                            |                            |
|                                                                                                                                |                                                |                                           |                                                     | 株<br>社                     | 合<br>理<br>的<br>工<br>法<br>・<br>責<br>任<br>施<br>工 | 防<br>錆<br>完<br>全<br>・<br>中<br>空<br>防<br>音 | 耐<br>震<br>・<br>耐<br>火<br>・<br>軽<br>量<br>・<br>堅<br>牢 | 採<br>用<br>下<br>さ<br>い<br>・ | は<br>日<br>進<br>式<br>を<br>御 | を<br>・<br>軽<br>量<br>鉄<br>骨 | に<br>は<br>軽<br>量<br>鉄<br>骨 | 間<br>仕<br>切<br>・<br>天<br>井 |
|                                                                                                                                |                                                |                                           |                                                     | 株<br>社                     | 合<br>理<br>的<br>工<br>法<br>・<br>責<br>任<br>施<br>工 | 防<br>錆<br>完<br>全<br>・<br>中<br>空<br>防<br>音 | 耐<br>震<br>・<br>耐<br>火<br>・<br>軽<br>量<br>・<br>堅<br>牢 | 採<br>用<br>下<br>さ<br>い<br>・ | は<br>日<br>進<br>式<br>を<br>御 | を<br>・<br>軽<br>量<br>鉄<br>骨 | に<br>は<br>軽<br>量<br>鉄<br>骨 | 間<br>仕<br>切<br>・<br>天<br>井 |
|                                                                                                                                |                                                |                                           |                                                     | 株<br>社                     | 合<br>理<br>的<br>工<br>法<br>・<br>責<br>任<br>施<br>工 | 防<br>錆<br>完<br>全<br>・<br>中<br>空<br>防<br>音 | 耐<br>震<br>・<br>耐<br>火<br>・<br>軽<br>量<br>・<br>堅<br>牢 | 採<br>用<br>下<br>さ<br>い<br>・ | は<br>日<br>進<br>式<br>を<br>御 | を<br>・<br>軽<br>量<br>鉄<br>骨 | に<br>は<br>軽<br>量<br>鉄<br>骨 | 間<br>仕<br>切<br>・<br>天<br>井 |

▶ ガラスのカーテンウォール（帳壁）——以下 G. C. W と呼ぶ——から出来ている建築は glass-clad 建築（ガラスの着物の建築）と俗称されている。G. C. W を全部ガラスだけでやることはむしろ戦前のやり方であつて、現在では窓面のみに横に「リボン状」にガラスを使い、スバンドレル（窓と窓との間の部分で窓の腰とその階下の天井下り壁部分より成る）には熱、音、火に対してより遮断性と耐性を持つた材料のパネルを使用している。このスバンドレル・パネルはガラスと同様に工場で所定の寸法に作られたものであつて、現場では嵌込作業をやるだけである。このような施工法はブリファブ工法と通称されている。組立家屋をブリファブリケートッド・ハウスと呼ぶ場合のそれである。

▶ G. C. W が世界的傾向となり、又日本でもその例外でないという以上、これを単なる流行現象として簡単に片付ける訳にはいかない。G. C. W が建築の軽量化に役立つことはいうまでもない。そして軽量化は建築コストを下げる為に役立つ、しかし最も大切なことは G. C. W によつてブリファブ工法が可能になつた点であらう。造船のブロック建造法、自動車のコンベヤーシステム、あるいは航空機のロッドシステムの如き近代生産方式が如何にコストを低下させ生産スピードを向上させたかを常に見ておりながら建築施工だけが何時迄も昔ながらの手工業に依存し長年月をかけて作られてよいという筈がない。建築を部品に分解し各部品を工場生産して現場でその総組立をやるというのがブリファブのいき方である。G. C. W はそのいき方を可能にした。現在の日本では新らしがり屋の気まぐれの如くもいわれている G. C. W はこの建築生産の発展の線に添つたものであるから必ず常識化し又飛躍的に普及してくる事が予想される。誰しも時の流れを止めることは出来ない。ただ注意しなければならない事は G. C. W の欠点をよく知つた上で設計者、施工者の協力により技術的検討を経ることの必要であらう。次に実例についてその検討をした。

▶ 実例は日本にも相当出来た。ここには次の 3 を上げてアメリカにおけるものと日本のものとを比較しよう。

実例 1. G. M. 技研（サーリーネン設計）1951年

実例 2. フォード本社（スキッドモア設計）1955年

実例 3. 鉄道会館（同施設部設計）1954年

これらの三例のエレベーションを見れば共通して軽快で細身でしかも近代的なものである。学生製図でも充分やれる位簡単である。しかし問題は断面にある。

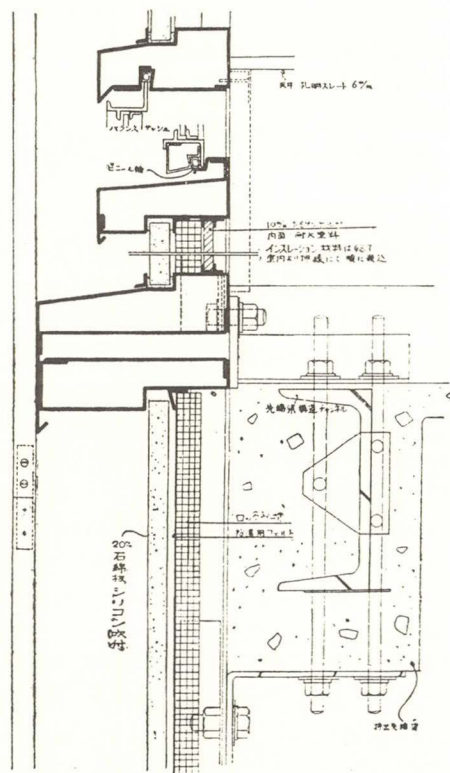
▶ G. C. W の窓枠とガラス、あるいはパネルとの密閉性が第一に問題だ。ここに隙間が出来ては雨仕舞だけではなく空気調整を不経済にするか、あるいは不可能にして

しまう。突気調整は密閉された空間を前提にして計算するのであり、一方では空気調整を前提にしない G. C. W 建築というものは単なる外観の模倣と酷評されてもやむを得ないであらう。何故なればそのような建築は夏期には室内の方の温度が室外より高くなつて建築というものの本来の意義を失うからである。上記三例共勿論空気調整を行つている。密閉性を与える為に実例 1 は最も完全であらう。合成ゴム製のガスケットを使用したこの工法は丁度自動車の窓と同じやり方で凹部に凸部が押し込めるやうになつており、その耐用年数は 25 年だと説明されている。2ヶ所にナイフエッジ（刃型）がついておりそれで枠とガラス面あるいはパネル面は密着される。ただし枠の方も余程精度が高くないとこの工法も駄目になる。実例 2, 3 は特殊のバテ付であるが密着性はよいとしても耐用年数には疑問が残る。枠の材もアルミあるいは不銹鋼と普通鋼との差が見られる。

▶ G. C. W の遮断性——この種の行き方で問題になるのは仮に密閉性がよいとしてもガラス面自体の熱音に対する遮断性である。実例 1, 2 は共にペヤーグラス（二枚ガラス）の嵌殺しであり他のアメリカの例を見てもみんなペヤーグラスである。実例 3 は 6 ミリのミガキガラス 1 枚の嵌殺しであるか、あるいは一部バランス窓となつている。バランス窓にはどうしても隙間が出来て密閉性を大に害する。しかし日本の事情として一部に開閉窓の附くことは止むを得ない。スバンドレル・パネルの部分は三例とも良い遮断性を持つている。同時にまた耐火性をも具備している。

▶ スバンドレル・パネルに於ける意匠——実例 1, 2 はホーロー引鋼板で着色は自由であり、かつまた甚だ平滑で艶がよい。その感触は上下のガラス面とマッチして美事な壁面を形成する。（ホーロー引と言つてもアルキソド系の塗料の焼付だ）雨でよごれない。実例 3 は外面は厚板スレート貼であり、それにシリコン吹付であつてどうしても白っぽくガサガサしているのでガラス面とのニュアンスがない。日本における G. C. W の実例は殆んどスレートであるが、ただ東京ガスビルはビトロライトを使つている。いう迄もなくその差違は工費から来ているが、デザインのみからいえば仏作つて魂入れずの感がある。従つて結果的には「事、志と異なる」（村野藤吾氏の言）こととなる。殊にあの青緑色のアンチサンガラスを使つた場合がそうであつて御堂筋に一例がある。

▶ G. C. W のエレベーションの模倣は恐ろしいことだ。そのセクションに学ばなければならない。しかしその断面を技術的良心をもつてやれば恐らく 3~4 倍の工費を覚悟しなければならない。施工精度も精密機械並になる。



41

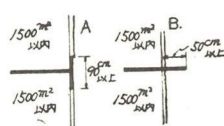
建築は生活の本拠とした容器である。故に、平面計画は勿論のこと、意匠についても、建築物の外観美、特に窓の構成には、常に苦心が払われている。

東京、大阪等の大都市に簡比する高層建築物をみると、戦前、ある外国人が、高層建築物の多種多様な建築様式、まちな窓の構成を評して、まるで万国博覧会を見るようだと言ったのを思い出されるのであるが、戦後に建設され、又建設されつつある高層建築物の建築様式等は、アメリカ合衆国の影響を多く受入れられ、工業の発展による新しい建築材料や新構法による工事期間の短縮、優秀な外観美を現出している。

兎に角、昭和15年頃より昭和25年迄の10年間のブランクは、多くの建築家の建築創造に対するリアリティを失っていた時代だけに、アメリカナイズされた建築意匠や建築構法が採用されだして、必要以上のガラス張りの壁面やプラスチック等の壁面が多く使用されだした。従つて、建築物の外観は、窓が壁体が解らなくなつたり、窓の面積が開口部全部を占めるような設計が、多くなつていく。

建築物の外壁に設けられる窓が、大きければ大きい程、採光、通風、換気等は、温度や湿度の高い吾国の気候風土に適合し、至つて良好ではあるが、その反面、耐火性や暖冷房の場合の断熱性は、減少するのはいう迄もない。従つて、耐火建築物に対する耐火性や断熱性を減少させるような、必要以上の窓を持つことが、採光通風上、果して必要かどうかを反省して見なければならないし、又現行建築基準法の採光通風上の最小限の窓の大きさについての規制や延焼の恐れある部分(註1)に設ける窓に防火戸(註2)その他防火設備(註3)をしなければならない等の規定はあるが、最近流行の所謂ガラス張り建築に関しては防火上の立場から、勿ら強化しなければならないものと、考えられるものである。外壁がガラス張りであれば、建築基準法では、開口部と見做される訳であつて、延焼の恐れある部分には、スチールサツミユの網入ガラス戸を使用しなければならないのは当然である。又主要構造部が耐火構造又は不燃材料で造られた建築物で、延べ面積が $1500\text{m}^2$ を超える場合は、建築基準法施行令第112条第1項により延べ面積 $1500\text{m}^2$ 以内ごとに耐火構造の床もしくは、壁又は甲種防火戸で区劃しなければならない規定になつているので、ガラス張り建築物の場合等は、特に防火上の立場から、防火区劃に接す

る開口部は、第1図の如く、防火上有効にしや断し、火災に際して、容易に破壊、欠落しない構造とするよう指導しているが、これに関しては、近く立法化される筈である。



第 1 図

### 註 1 延焼の恐れある部分

隣地境界線、道路中心線又は同一敷地内の2以上の棟(延べ面積の合計が $500\text{m}^2$ 以内の建築物は一棟と見なす)をなす建築物相互の外壁間の中心線から1階では3m、2階以上で5m以内の距離にある建築物の部分を含む。但し、公園、川、広場、耐火構造の壁等に面する部分は除かれる。

### 註 2 防火戸

乙種防火戸として、最も普通に用いられるものは、スチールサツミユ網入ガラス及び鉄製鉄板張の戸がある。これらの防火戸は、その周囲の部分が不燃材料又は防火木材で作られた開口部に取付けられなければならないが、木製窓枠に取付けられる防火戸としては、建設大臣が指定したプロトン防火戸及びヒレバ防火戸等があり、これらは木材と防火塗料並びに鉄板を組合せたものがあり、主として木造建築物の防火戸として使用されている。

甲種防火戸は、外壁面に使用されることは少く、主として防火区劃に使用されるもので、厚さ1.5mm以上の鉄板を張つた鉄製扉、又は両面に0.5mm以上の鉄板を張つた鉄製扉が使用される。尚商店等の正面に設けられる防火シャッターは、厚さが1.5mm以上あれば、甲種防火戸として、1.5mm以下なれば乙種防火戸として取扱われる。

### 註 3 防火設備

国家消防本部の行う検定に合格したドレンジャーは開口部に設ける場合に、甲、乙防火戸と同等に認められ又国家消防本部の行う検定に合格したスプリンクラーを室内に設備された場合は、防火区劃をしたものとして認められている。

延焼の恐れある部分にある窓で、その前面に防火上有効な壁があれば、その窓には、防火戸を取付ける必要はなく、また、店舗等の前面に、その壁を設ければ、それでしや断される開口部の防火戸は免除される場合が多い。(第2図参照)



第 2 図

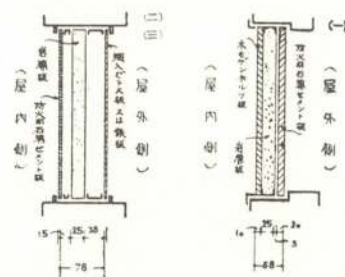
なお、開口面積が5,000cm<sup>2</sup>、(約70cm角)以内の開口部に設ける戸は、防火木材及び網入ガラスで造れば乙種防火戸と見做される。更に小さい開口面積である100cm<sup>2</sup>以内の換気孔の戸は、鉄板又はモルタル板等で造れば、前述の防火設備と見做され、又地面からの高さが1m以下の換気孔の場合は網目2mm以下の金網で造れば、前述同様防火設備と見做される。

次に外壁張壁の構造で、前述せる如く、建築物の外周に大きなガラス張りの開口部を設ける場合は、延焼の恐れある部分は、スチールサッシの網入ガラス戸にすれば差支えないが、ガラスの代りに他の不燃材料又は防火材料を用いて閉閉出来ないような設計とした場合は、網入ガラス窓と比較して、耐火性能は良くなるにもかかわらず、法的には壁と解釈せられて、耐火構造の規定に適合しなくなる不合理さを解決するため、昭和29年8月建設省告示第1305号により、外壁の帳壁に限り、耐火試験に合格した構造のものは、軽量の耐火構造の壁として認められるようになった次第である。

この告示により、現在までに、試験を了し、耐火構造の壁として認められたものは、第1表第3図の通りであるが、次に耐火性能に富む工法を考案せられたいのである。

第 一 表

|     | 屋 内 面 材 料                     | 中 間 材 料         | 屋 外 面 材 料              |
|-----|-------------------------------|-----------------|------------------------|
| (一) | ホモゲンホルツ板<br>(仕上材)<br>厚 10.0ミリ | 岩綿板<br>厚 25.0ミリ | 防火用石棉セメント板<br>厚 20.0ミリ |
| (二) | 防火用石棉セメント板<br>厚 6.0ミリ         | 同 上             | 網入ガラス板<br>厚 5.0ミリ      |
| (三) | 同 上                           | 同 上             | 鉄板<br>厚 1.6ミリ          |



第 3 図

因に、建築基準法施行令第107条第1項第7号に基く耐火構造と同等以上の耐火性能を有するものとして指定した建設省告示第1305号及び解説は次の通りである。

### 建設省告示第1305号

建築基準法施行令(昭和25年政令第338号)第107条第1項第7号の規定に基づき、外壁の帳壁(延焼のおそれのある部分を除く。)で1に規定する試験体が2の試験方法により3の規定に適合する場合において、この試験体と同一の構造を有するもので軸組が不燃材料で構成され、且つ、構造部材に対する取付方法が構造上及び防火上安全であるものは、同項第1号の11に該当する耐火構造と同等以上の耐火性能を

有するものとして指定する。

- 試験体は、下記のイからニまでに該当するものとする。
  - 屋外面は、不燃材料で構成すること。
  - 材料及びその構成は、建築物に使用する材料及びその構成と同一のものとする。
  - 建築物に施工する場合、外壁の帳壁に継目その他防火上の弱点があらわれる場合は、それらの弱点が試験体の中央部にあるような試験体とする。
  - 形状は短形状のものとし、大きさは各辺の長さを90cm以上とすること。
  - 試験に用いる試験体は、これを構成する材料が気乾状態で乾そうしたものとする。
  - 製作数量は、屋外面又は屋内面を加熱面とした試験について、それぞれ3個とすること。
- 試験方法は、各試験体の屋外面又は屋内面を加熱面としてそれぞれ3個ずつ日本工業規格「鉄筋コンクリート造、鉄骨鉄筋コンクリート造および鉄骨コンクリート造の防火被覆試験方法」(JISA1302)の3章並びに4章の1及び2の規定によつて行い、時間温度標準曲線によつて45分間加熱し、以後30分間にわたつて徐々に加熱温度を下げる。但し、材料の構成が壁厚中心を軸として屋外側と屋内側が対称である場合は、屋外面又は屋内面のいずれかの面を加熱面として試験を行い、他の面を加熱面とした試験を省略することができる。
- 加熱試験の結果、試験体がいづれも下記のイからニまでに適合すること。
  - 加熱試験中において、試験体に火焰が通るき裂を生じないこと。
  - 加熱試験中において、試験体の加熱面の反対面における防火上有効である材料の表面温度が260度をこえないこと。
  - 加熱試験中において、試験体の屋外面の材料が脱落しないこと。
  - 加熱試験の直後において、試験体の屋外面の材料に注水した結果、その材料が欠落しないこと。

### 【解 説】

- 帳壁の軸部及び屋外面の材料は不燃材料でなければならないが、屋内面は保温、防音、意匠等のために可燃材料を使用しても壁体の主要構造の材料で耐火性能を有すれば差支えない。而し、この壁の取付方法は耐久性があると共に、地震時において、脱落しないと認められる構造であり、更に下層階の開口部又は隣接建築物からの火災を受けることがあつても、壁の軸部にした鉄材等の伸び、彎曲等により大亀裂若しくは脱落しない構造であることが必要である。
- 告示の1は、2の壁に使用する材料の試験体に関する規定である。試験体は屋外面が不燃材料で構成されたものに限られる。又製作数量は告示2の但書に該当するもの以外は6個である。
- 告示の2は試験体に対する加熱方法に関する規定である。
- 告示の3は加熱試験中又はその直後において耐火性能を有するか否かを試験責任者が判定する規程に関する規定である。
- この試験を行うことができる施設を有する機関は次の通りで、建築主事に対しては、確認申請書の審査に際し、これらの処で、試験に合格した証明書又はその写を添付しなければならない。

建設省建築研究所

東京大学建築学科(防火研究室)

東京都(建築材料検査所)

東京都防庁(予防部予防課)

(筆者 大阪府建築部指導課調査係長)

# おお さか とお きよお 商 都 か た ぎ ・ 主 都 か た ぎ

対 談； 若木望太郎・小川 誠 耳

企 図 浦 辺 鎮 太 郎

日 時 昭和30.7.15 午後1時

場 所 好文倶楽部（第一生命ビル）

浦 まず、両都の原住民とかその気風とかいうようなことから話しを始めるかな。

小 私は、生れたのではないが、物心ついたのが大阪で、13のときに東京に移り、それからずっと50年東京に住みついてしまった。そしてたえず両都を往復していたので、割合に両都の気風の比較ができる。しかし、純原住民というようなことになると、両都とも親代々住みついていてというような人達もいまだににいるにしろだろうが、よくわからない。江戸ツ子・上方ツ子というようなことは、いずれにしても、交通不便な時代だからこそ目立ちもし、珍らしくもあつたろうが、もうこのごろのように、急行特急の列車電車あり、航空機あり、四通八達、それだけ交通のはげしい必要のある複雑な社会組織になり、人の異動転動の盛んな時世になり、おまけにラジオ・テレビあり、居ながら言動物腰がわかるということになつては、さらでだに狭い四島国内などは、向う三軒両隣も同様な感じになり、風習も次第に混交・同化してきて、原住民などは影が薄れてきたとしか思えない。要するに、現在はどこもここも、雑種が多くなり、また「都市は田舎のはきだめ」とも言えるから、このごろの東京・大阪は、本来その都市の存在拡大していく性格に伴う気風というもののだけの相違しかないのではないと思う。いわゆる江戸・上方の風習気質も時代の大きな波にのせられて次第に変転している。50年前と現在の大阪・東京を回顧してみても、非常な違いだ。

若 東京で火消トビ職といえば、江戸時代からの血を引いているように考えるが、もう20年も前ですら、地方出の若い者が多かつた。大阪にしても、船場筋の旧商家が、地方出の者を養子に迎えるというような場合がかなりあるから、原住民の血もうすれてゆく。

浦 養子にはデツチ小僧のなかで一番大阪商人向の者を選んですとはいうが……。

若 それでもどこか違つた家風家憲ができあがつてくる。昔からの純伝統を保持しようとつとめても身がもてなくなる。東京のトビ職に純江戸ツ子系が珍しくなつたのと同じだ。

浦 でも、気風というものは受継がれてゆくのではな

いか。

小 それは充分あると思うが、しかし動力ポンプが走り、機械装置のハシゴが活躍する時代に、竹ハシゴ・トビロ・竜吐水時代の気風そのままでは火が消えないからやはり気風も心構えも昔とは違つてくる。

若 人とともに物の交流もはげしいから、地方の土産というようなものも、今では意義が薄くなつてきた。全国の名産品が大阪駅でも東京駅でも買える世の中だからな。

小 今後30年もたてば、過去の30年よりはもつと早いスピードで同化変移していくと思う。

浦 では、気質を構成する要素たる言葉・風習・衣食住というような方面からの観察を一つ。

小 気風を表現する言葉とか風習とかの差異も漸次近接してきていると思う。全国のナマの方言がラジオで相互に聞けるし、態度物腰もテレビで見ることができる。大阪の方言も、私の子供時代よりははるかに東京ナイズした言葉になつている。ことにこのごろの大阪の若い婦人の言葉は、語句の終りだけ東京化したアクセントをもつ、取つて付けたようなアイノコ弁が非常に多く、いささか聞苦しい感をもつことがある。東京の婦人にもこういうことがみられなくもない。小説「細雪」の影響かどうかしらないが、よく「フン・フン」という返事をするのを聞く。大体東京では、女が「フン」などと返事することはゲス下品で、素性が知れるとされていたものだが、このごろはどうしてご立派な洋装のお嬢さんがイキなつもりでおつしやるのかどうか、電話の応答などにも時々聞く。それがやはりアクセントの相違で、大阪育ちのお嬢さんのように軽くていやしい感じを少しももたない調子には出てこないから、いかにも聞きづらい。それから「アホらしい」とか「ヤヤコしい」とかいう関西弁が結構東京でも話されるようになってきた。つまり、東京語にはない簡明適切な内容と多少のユーモアな感じとの混合したような言葉は、次第に相互に交流している。

衣についてはどうも、私には趣味も眼もないのでよくわからないが、これは気候の関係からか、概して大阪がハデで東京がジミにおちついて見える、とぐらいしか言

えない。次第にすたれてゆく和服の着こなしなどは、婦人は関西の方が上手だと思うが、男子はどうも東京の方がキリリとしている感じがする。大阪の人はどこか着方にシマリがなくて、着物が中身をつれて歩いているような感じがするが、どうもこれは中身たる人間が、その着物を着て歩くときの心構えの反映ではないかと考えているが、どんなものか。つまり、ここらが、両都かたぎに差のできる深因じやないかとも考えられる。

住居建物のことは、若木さん浦辺さんの方がご専門で私が口を出す必要ありませんが、ただ素人の眼から見ただころでは、大阪の住居というものは、この50年間に非常な変化をしていると思つてゐる。これも技術者の交流ということからきたことは明らかで、私の子供のころの大阪の住居は、夏の暑苦しい大阪で風通しもよくない、うつとうしい千本格子の薄暗い家で、ちようつがいであげおろしする縁台で道路に面して造られており、しかも数軒の長屋建が絶対多数であつた。しかし現在建つ住居は東京と同じような開放的なものが多い。もつとも、千本格子式必ずしも悪いのではなく、湿度の多い酷暑では、これの方が室内の熱しさが低くて済むとか、夜の風のナギに戸を閉めないで寝ていても安全だとかいうことがあつて、要は気温条件から自然に発達した構造であることはわかるが、東京の開放的であるかわりに冬は一倍寒いのに耐える生活と、大阪の閉じこめたような住居内でむしむしした暑気にチツと耐えて暮してきたという生活とが、やはりどこか気質に差のできてきたことは認識できる。

食のことは、これは大阪が東京をリードしたとみてよいと思う。そのかわり、このごろは東京から大阪へ来て、ごちそうを食べても、東京と差異がなくなり、あまり珍らしさが目立たなくなり物足りないとも言える。東京の料理がはなはだしく大阪化してしまつた。酒も断然大阪の方がうまいが、ただ暖国の方ではアマロ、寒国の方ほどカラ口を好むとでもいうのか、同じ菊正が東京ではカラ口だが、大阪で飲むとどうも口当りがアマい。はじめは菊正じやないといい張つて笑われたことがあるが、どうも私はあのアマロの菊正の方が好きで、大阪から持つて帰京することがある。もつとも、アマロというものは長くは保たないもので、アマ味はぬけるものだということでもあるのかもしれない。だからすべてアマロは酒造地元近くだけにしが売らないのかもしれない。

浦 そこで、こんどは文化・生計というような面を。

若 江戸ツ子の文化は貧乏文化で、家などに金をかけようとしなない風があり、地道に暮していればフンドシー本の生計でも気にしないで、身辺のミエをはらない、といつたところがあるな。

小 ヨイゴシの金をもたない庶民生活で、金をためるやつをシミツタレだといつた。またそれで結構相互扶助

で生活していけたらしい。

若 心がけさえ地道なら、困つたときには援助する人があるような社会組織になつていたらしいな。

小 なんといつても京都は太古から千年来の皇都であり、大阪は堺・江州を根とした商都としての存在が古い、必然の結果として金をとようと、蓄財は庶民としては出世に通じる。それに比べると、江戸は幕府・王都としての履歴が新らしい。まず、築城に必要な出かせぎ諸職人の土着が始まりだろうから、出先での生計というようなものが互助・義侠・心意気が江戸ツ子気質に発達したと言えよう。主都のならいとして諸国への法規発令の本源であり、話も筋道のたつことが第一になる。金をためる者でも、あとで人の事に散じるためのもので、金そのものに執着心は浅かつたに違いない。

浦 さて、その辺にして、本道の建築ということに進もうか。……明治になつて西欧式建築物のできたのは、大阪より東京の方が先だつたと思うが、衛生工事ではどちらが先だろうか。

小 どうもそうなると、私の年齢ではもはや不足でよくわからないが、大阪では明治35年ごろに第5回内国勸業大博覧会というのがあつて、市民はランプしかつてなかつた時代に、イルミネーションというものがついて、夕方にそれが屋根へ一斉にバツとつくの予供心に非常に驚嘆して見た記憶がある。その博覧会に有料便所というのができて、小便するのに金をとられるなどとはバカげたことだが、ものはためしだと便所に入つたが、便所を水で洗う仕掛になつていて、とても清潔でよいが、ゼイタクなことだと父が笑つていたのを知つてゐる。(當時は農家はクミ取らしてもらふよう頼みにきたもので、益暮には野菜物をつけ届けして礼を言つたものである) この水洗便所は、たしか現在の須賀工業会社の先代が施工したと聞いているから、古い話の方に属すると思う。東京の日本銀行が水洗便所を設けたのが明治40年ごろと思うが、まず古い方であろう。東京駅が水洗便所を設けた最初の駅じやないかと考えるが、それが大正初期で、その設備や汚水浄化装置の設計や施工を手伝わされたのが、私の衛生工事に興味をもつたそもそものだ。

若 両都市発達の性格からいつて、大阪は経済を第一とし金を重視する。東京はまず筋の通ることが第一で、金のことは第二の問題として取扱う。筋を通すということから形式順序を重くみる。建築でいえば、大阪には《スタイルの混合》が多い。ルネサンス・バロックから現在までのあらゆるものをまぜ合わせてよいものを作ろうとする。東京ではゴシックでいくとなるとテーブルの端までゴシック一本で貫かないと承知できないという気風がある。吉田さんの場合でもそうだ。クラシックのものならあくまでクラシックで掘りさげてゆく。日本的なもののときははいよいよ日本的を追究してゆく、というよ

うな傾向がある。

浦 前川さんも筋を通す方だな。

若 だから、料理屋を設計する人は料理屋だけを深く研究する。銀行を設計する人は銀行ばかり建てているという結果になる。それが大阪方面では、村野先生の場合でも、一つの折衷主義のようだ。どんな建物でもやる。しかしそこにそれぞれ面白さ、良さをもっている。東京は単純で深く深くと掘りさげていく。

浦 そこで、金・商法というような面から……。

小 一口に言えば、同一商売をやつていても、金に対する関心はかなり根元的に違っているようだ。大阪は金をにぎることに実にコン身の努力を傾倒してねばり強くシンボウ強い。その点東京は淡泊で、不信用や不名誉なことをいわれる方を、金の支払延期よりはるかに重大視する。だから、大阪では約束した支払金の延期を申入れるにはよほどの覚悟がいる。換金に対する心構えは非常に違う。それだけ大阪の方が真の商売であつて、それだけ商売がはげしく、商売に徹していると言える。

われわれに関連のある例をあげると、大阪の古道具屋にモータ付ポンプの小型のものがある。外部からの観察では別に損所もない。売値は新品の半値ぐらいた。東京人はモータやポンプの内部に損所はないかどうかとつい聞きたくなるが、それは聞いても知らないという。《見てよかつたら買つてくれ、取引現金ここで》としか言わない。つまり換金手段第一である。東京の古道具屋だつたら、モータは回るがポンプが少し調子がわるいようだからとかなんとか説明して、これこれの値なら売る、と道具屋の方から言うのが常識だ。それだけある意味で商売が下手だ。また、他の意味では、こういう外見だけでわからぬ製品は、大阪ではうかうか買うと大きく乗せられるおそれがある。

それから、《ともかく安い》という品物は、まず大阪から広まる。戦前東京で10銭以下で飲ます店の無かつたコーヒーを、モーリという店が大阪から支店を出して5銭で売つた。その材料はコーヒーの二番三番せんじであるかないかしらないが、なにしろ売値の安いものが大阪にまずできる。われわれの買う資材——たとえば水セン1個にしても、とうてい東京の商人が、どう材料・加工を落しても、そう安くは売れないというような安値の品物が、大阪にはある。外見大した見劣りが無い。JISにも合格する。JISで規定していない箇所、実に驚くばかり巧妙に肉厚を盗み、長さを減らしたりしている。その苦心と努力とはバカにはできないことで、その才能や賞するにたるのだが、どうしたら同じに見えて安く売れるかということに必死でなければできない芸当で感嘆に値する。耐久力とか、窮極の経済とかいうことは何も考えない。売れさえすれば商売目的は達するので、盛んに売れて金がもうかればよい。それ以外のことは自己に

は無関係の事だとして関心もない、というのが小商売がたぎと言えよう。これは非常に悪く言つたようにも採れるし、東京の同業者にもヒンシュクをかつているところだが、そこに商売の心構えの違うところがあるので、ともかく大阪では《あきない》をしているのである。品の安かろう悪かろうは買手のきめるところだ、悪いのは百も承知だが安いからよいという人だけ買つてくれ、ウソをついてゴマカして悪い物を高く売ろうというのではないというのが、こういう商人の根本理念であり、安いものはそれだけどこか劣るのは当然のことじゃないかというわけである。ともかくウチの製品はこれだけ安いんだということが第一目標である。ほんとの商売ということからいえば、これは決してケナスこともケイベツすることもできないと思う。要は、客の品物選択の方針によることで、全責任は客側にある。東京の商人は、安価だけが目的の品物を造るのに苦心しようという意志に乏しいらしい。どうしたら信用して買ってもらえるかに商売の理念をおく。

若 これを客の側から言うと、東京の買手の常識は、《安い》ということは、同一品物で値段だけが低いのだというふうを受取る。だからあとで売手をズルイとかベテンにかけたとかゴマカしたとか悪く言う。大阪の買手は売手を信じない。自己の知能を働かせて品物の良否を見別けてから売値と対照して買う。呉服物などは数軒当つてみて品質の程度真偽を確かめて買う。自然品物を見る眼が肥えていて、自己の希望する程度の品物を適当な値で買い、あとで悔むことなど少い。だから、ある意味で大阪の商人は東京では商売がしにくい。この品物は格安で得になるからぜひ買つときなさいといつてもなかなか飛付かない。つまり品物を判断する力がないから、一パイ喰うのではないかとためらうらしい。はがゆい。

小 私の仕事の上でも、そういうことがよくある。お役所仕事は別として、民間の工事で工事費見積金額の値引ということだ。東京で値引しろと言うのは、図面仕様書はそのままで、金額だけ安く勉強しろということを意味する。だから、それがあつた程度以上の値引だと、なかなか応じられない。品物の等級を落し、管径の一部を細くし、等々にしてもらつて、仰せの金額で受注したいと嘆願する。しかし、それでは値引にはならない、当然の値下りだということでスツタメンダすることになるのが普通である。この東京式観念で、大阪の場合に施主とグズグズ交渉を長引かせていると大失敗に終ることがある。大阪の場合、値引しろということは、まずまず仕事をやるぞといわれたことだと考えてよい。このことで、東京式交渉を繰返して、施主から大いに説教をくつて、冷汗三斗、大阪かたぎの真妙を会得したことがある。施主いわく、——私は売物を値切られれば、それ相応の品物しか売れません。負けていたんではもうかりま

せん。予算ながくて、あなたの見積金だけ出せないから私のいう予算で仕事をまとめてくれといってるんです。図面仕様書どおりになどといつてやしません。そんなことをしたらあんた損するやろ。商売して損するのはアホや。私は技術者じゃないから、仕事のよしあしなどはわからない。お宅を信じてお願いするので、信用しなけりやはじめからお話ししません。予算に納めてさえくれば、あとはあんた任せや。もうけとくなはれや——。こうなると、どうにも東京人には、損しても図面仕様書どおりに仕事をしたつていいというような気にもなるのだが、ここらが大阪人にいわせると、東京人は商売を知らないということにもなるらしい。東京の信用は最後まで金を伴う信用で、この点気が楽だが、大阪は金銭第一ではあるが、信用するとなると金を離れる。大阪で信用ということは命をかけてのことになる。

浦 信用という言葉は同じだが、大阪と東京とでは信用の仕方が違うかな。竹腰先生が丸紅の仕事をされたときの話だが、クライアントが、《竹腰さん、あんたが上手だから頼むんじゃない。建築後のモチがよいからやつてもらんだ》といわれたというのが、これなども信用の仕方を表わしている。……では、ついでに、**金・人情**という面も一つ。

若 その点大阪はかなりハツキリしてるな。なにしろ、大阪は金もうけが身上の土地だから、どうしても金と人情とは直接的だ。かせぎの悪い亭主は女房に尊重されないのは現金なものだ。また、料亭などとなると、金さえ出せば、できるだけのサービスをして客のきげんきづまをとつて気持よくもてなす。客もそういうものだと思う。だから大阪人が東京で遊ぶと、同じ金をつかつていて、とかくこの点でなにか不満のおこる場面ができる。つい、おれはお客様で金を使っているんだ。そんなにツツツツしているのはけしからん、と芸者に高飛車にすることもおこる。

小 そこまで口に出すのもいかに大阪かたぎだが、そいつは東京では大ヤボの骨頂で鼻つまみものだ。芸者はアクタレの一つもいつて引揚げちまうだろう。大阪では《遊び》も金で買うわけだが、東京はまず気分で、キザな客きらいな客にはサービスはわるい。

若 大阪では、受けた恩恵は金に換算して、それ相当のものを返す。それで精神的な面まで相殺したものとする気持が強い。物をもらうと、すぐ相当のものを返すべきものとする風習も強い。

小 東京では、珍しい物を送つて、すぐに追いかけるように返礼をしてこられると、あてつけがましいように思えて、切角の好意を無にされたように不愉快になる。

浦 じゃ、つぎに**商売の熱意**というようなことを……

小 これは、東京者は、大いに学ばなければならない点を大阪に見出す。大阪では商売に対しては驚くべき忍

耐力とねばりをもつ。納期がおくれる、品物の出来がわるい、というようなことで呼びつけておこりとばし、二度と注文しないからもう出入するなど、いたたまれないぐらいにいわれても、決して客には抵抗がましい言動は採らない。見方によつては少し足りないのか、逆に底抜けのアツカましいやつかと思えるが、態度はあくまでインギンで、とやかくとシラジラしい弁解もし、相手のおこり疲れるのを待つ。もう二度と来ないかと思うと、あくる日は、けろりと好い顔をしてニコニコして来て、しきりに客をもちあげ、ほめて、なんとかかんとか継いで、また注文をもらつて帰る。このネバリはとても東京人にはできそうもない。東京人なら、どこかでケツをまくつてタンカの一つもきつて、ほんとに二度とは来ない。また、悪い面をいうと、はじめから無理とわかっている納期でも、オクビにも出さないでとにかく受けてしまう。そして、やれ職人がケガして入院したとか、やれ停電日があつたとか、なんのなんのともつともらしいウソをいつて、ガンガンとくる催促の防戦につとめて延ばす。他から、注文値より高く買うとでも出られると、納期などには目もくれず、他へ流して金にしてしまう、というような芸当は平気です。こういう融通は金もうけの前には不道義な行為だなどとはミジンも思わないらしい。これすなわち商売上手でウデのあるところと心得る。どうにも手のつけられない面もある。どつこいそうはさせない、というのが客のウデである。

若 東京で建築現場に出ていたときのことだが、建物完成間際でイスやテーブルを納入してきた。どうもガタつくのがあるので、脚の長さが違うんじゃないかと言うと、これは床面が平らに仕上つてないからだ、うちはそんなビツコの家具は造らないと抗弁する。それでは床が平らかどうか調べて、もし平らだったら、おれがこの脚をここでガタつかないように切るが承知かと言うと、よろしいという。そこで大定規を回して床面を調べたが、ガタつくほどのデコボコはない。よし、切るぞということでノコをもつてきて、ガタつくのを片端から切りそろえたが、もとよりそのまま納まるものじゃないから、持つて帰つて代品を大至急納めなくちや済まないのだが、こういうふうな東京商人は鼻息ばかり荒くてみすみす損をする。

小 労基法により労力下請の厳禁される法規の発令される少し前のこと。これは職工を全部直接雇用しなくてはならなくなり、土建業者でも大問題になつたが、管工事業者の方でも東京は大分騒いだ。このことを大阪の同業にも説明し、採るべき方策措置につき話合つたが、こと金に関することであり、定めし大阪では一層重大視することと思つていた予想を裏切つて、《どんな法律でも出しなはれ、商売はどうでもせんならんさかい》と案外平静に終つた。商売の前には何物をも踏越えていくという徹底的なクソ度胸で、東京商売とは違つた一見識だと感

じさせられた。

若 それに、大阪では官署といえども、やはり商都に  
適応した融通性をもつようになるだろうからな。

浦 おもしろい見解だな——。そこで、こんどは一つ  
建築設計事務所のことに触れていくか。

若 設計事務所も昔とは大分性格が変わってきたな。昔  
は施主によつて設計事務所・建築請負者・設備業者とい  
う一連の関係は根強く動かない傾向があつたが、このご  
ろは設計も方々へ依頼する傾向になつている。

小 昔は設計事務所というものは権威があり、施主の  
依頼を受けて、建築・設備両業者の指名・決定にも設計  
事務所の先生の示唆が重大な役をつとめたと思つてい  
るが、基準法・土法の公布以後は、建築士の資格としては  
同等であるというわけかどうか、権威の方も平均化した  
感がある。それに、目的は重税のがれらしいが、設計事  
務所も株式会社になり、社長専務というように呼ばれる  
ようになり、昔のように先生の不慮がその事務所の消滅  
を意味したのと違い、組織力で商売をしているという意  
識もできてきたせいか、請負業者と同様に注文取りもせ  
ねばならないだろうし、施主もまたそういう眼で見ると  
うになつたらしく、施主の権限が昔より高まり、業者ら  
の決定も設計事務所だけで取扱いかねる場合ができるら  
しい。従つて業者らもこのごろは設計事務所ばかりをた  
よりにしてもおれず、施主側へも、認識してもらうため  
に運動をする必要が多分にある。設計事務所も、いわゆ  
る先生の人格特徴ということは昔ほど必要でなくなり、  
経営能力のある主脳者、実力のあるスタッフの多少によ  
り評価され、そのかわり先生と運命を共にする必要もな  
く永続営業できることになつた。

浦 そもそも設計事務所を株式組織にした最初の人は  
渡辺節さんかな。

小 あれは早かつたと記憶している。少くとも戦後派  
ではない。

浦 設計図書が商品化するとすれば、個人への信頼よ  
り組織力の強弱が商品の上に如実にあらわれてくる。

小 建築設計管理事務所の株式組織化は、両都とも一  
様の傾向にあるようだ。

浦 ではそろそろ終りにしたいが、大分油濃い話もあ  
つたから、何か軽いお茶漬話でもないかな。

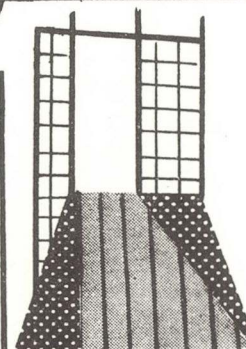
小 私はツバメで両都を往復しているが、あの列車の  
食堂のごちそうは、私には高いばかりでいつもおなじで  
うまくないので、大阪駅の専門大店のある店でおすしを  
詰めてもらうことにしているが、あの店は朝8時半から  
店を開けて、9時のツバメに間に合うようにつくつてく  
れる。それでつい他の土産物もあの店で買つてかえるよ  
うなことになる。ところで、東京駅にも各店街というの  
ができて、おすしやがあるのを見たから、東京を出発す  
るときもすしを買おうと思つて、先日寄つてみると、8  
時半に店をあけているから注文すると、食べてもらうの  
はよいが、折詰はしないといつて、現に作つてあるおす  
しを詰めてくれない。ここらが両都商人の心構えのどこ  
か違うところだなと感じたことだ。

若 商売の重点のおきどころが違うというわけかな。

小 もう一つ。東京では主人が朝勤めに出るとき、家  
人・妻らが《行つてらつしやい》という。大阪では《お  
早うおかえり》という。方言の差だといつてしまえばそ  
れまでだが、どうも私には大阪のいいかたの方が、家人  
妻として亭主に対し情味が深いような感じをもつ。ここ  
らにも気風の違ひが出ていと思う。

若 同じ意味のことをいつていても、総じて東京の女  
人のいいぶりはキツク聞える。その点東男に京女という  
とおり、上方女人のいいぶりはやさしく親しみ深く聞え  
るな。

浦 なかなかおもしろい。——では、このへんで……。



## 家のおしゃれに!

板の間・廊下にすべらぬ白木艶出ケントク

固型白木艶出  
290円 半ポンドで  
約5坪みがけます。

白木液水  
490円 1升罐で  
約15坪みがけます。

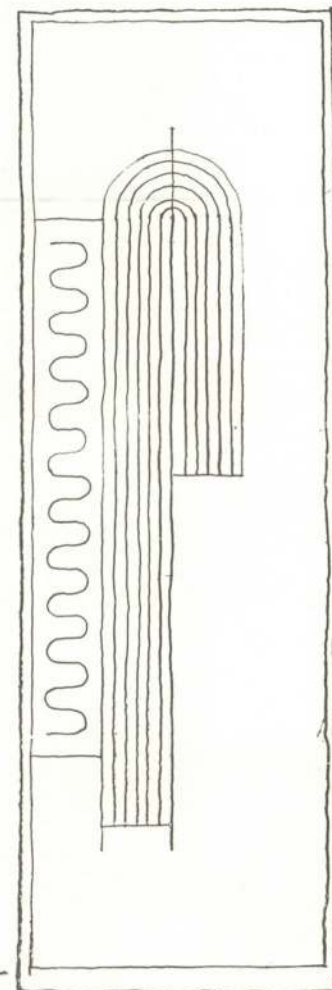
お掃除をらくに美しくする  
**ケントク**

大阪北区桜橋 産経ビル前 電話②3507

除外の疑 無料送呈 案内知らない正しい床の手入法好評の掃

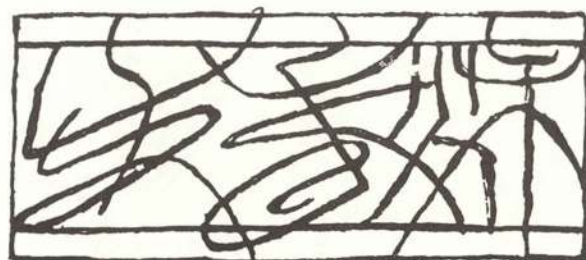


大阪ガスビルディング 1933



ナイトドアー図案

gold Bronze finish  
27th July 1934



野村証券本社新館面格子 1955

念

願

およそ人として生をうけたるものの生涯は美しいものでなければならない、真実のものでなければならない、醜いもの偽りあるものであつてはならない。しかし美しいものを汚がしてはならない、真なるものを斥けてはならない。これに反して醜いものは棄てるべきである。偽りあるものは悪むべきである。われわれ製作と工芸に当る者は、神の摂理によつて人間に与えられたこの美しい自然の地表を、吾々の手によつてけがすことなきかを反省すべきではなからうか。頃時征服という言葉に至る所に見る。山岳をとか、大洋をとか、大空をとか甚だしきは自然力をとか、その何れもが大自然を向うに廻して弱小人間の口から放たれるのだから恐ろしい。何人がかつて自然の片鱗でも征服し得たであろうか。

自然は既に幾百億の昔から吾等に数知れない幾多のテーマを示してくれたのだが、しかも愚かな人間はこれらに対して盲目であつたのである。その僅かな取るにも足りない数のものが見出されたに過ぎないのだ。しかしこれにすがっているのである。何が征服である、冒瀆も甚だしい。自然を離れてわれらは何処に行くべきか、人よ自然を直視せよ、これを把握せよ。しかし自然に求むべきである、謙遜な態度でわれらの制作はわれらの実生活の生れる一切のものと合致すべきである。虚構と誇張を避けよ、醜穢と陰惨を斥けよ、真実と平直を欲せよ、美と明快を受けよ、しかし自己の反省を基礎として事態の表現に勉むべきではないか。(1939)

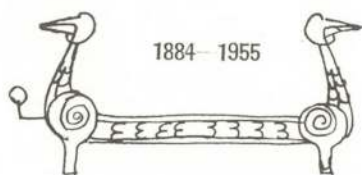
野村邸客間 1935



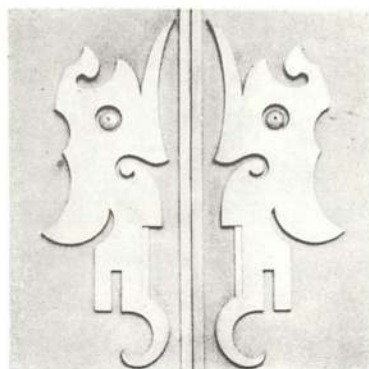


旧満鉄東京支社 1936

安井武雄作品  
TAKEO YASUI ARCH.



カット: ファイヤ・ドック図案



兵庫相互銀行ナイトドアー 1953



大和紡績ビルディング 1952

野村証券本社新館計画案 1955



## 安井君の想出 波江 悌 夫

安井君は大正8年4月大阪に来られ片岡先生の事務所に入られたが、その年の秋から私が渡米し、9年暮に帰り、安井君が9年秋から10年暮にかけて、片岡先生が10年秋から渡米するという忙しい時代であつた。

満洲から帰つた安井君は「内地の建物が余り綺麗過ぎて、街を歩いても廊下を通るような気がする。」といていた。当時私は主として協会の仕事に没頭し、安井君は事務所の設計にいそしむ（当時大阪クラブや野村銀行本店）という風であつたが、協会には各種の委員会があり、都市計画法、市街地建物法、都市問題、耐火建築物の奨励、災害対策委員会等の新運動を論議していた。又大正8年秋桜ヶ丘住宅大博覧会が開かれたが、当時各種の委員をしていた安井君はいつもおとなしく、自ら進んで発言する事は少なかつたので余り目立たなかつた。大正13年安井君は独立の事務所を開設（私は大正14年大阪市営繕課長に就職）爾来その作品や執筆されたものは相当本誌に掲載されたと思う。ともかく大阪の有力な事務所長として又協会の一員として建築界の陰然たる一方の旗頭であつた。

学生時代藤島武二画伯に師事した安井君は何かの機会に「元来建築は男性的な仕事で油絵を描く様な荒つばいタッチが必要である。又煉瓦造、張瓦建築で一階に石を用いた建築ほど下が頑丈で上が軽い風がある。」と洩らしていたのを想い出す。安井君は建築について色々と大胆な新しい手法を試みているが、思い出すままにその二三を挙げてみよう。野村銀行本店建築当時塀筋通りの大窓にワイヤグラスを使用して銀行内かう往来が見えず行員から不平をならべられたが銀行としては能率が上がり反つてよいと重役から賛成され、其儘となりやがて流行となつた。大阪クラブではコルビンの鏡を初めて輸入使

1884—1955

安井 武雄



用している。高麗橋野村ビルディングの各階の腰に特別に焼いた瓦を用いて注目を浴びたのも当時の想い出である。ガスビルや満鉄東京支社は当時の新建築であるが、スタッコの代用として、四角の白タイルを用いたのは外装タイルの先鞭であつたと思うし、又、デッキグラスを窓に使用してその用途を広めたのも安井君であつた。

新しい試みでガスビル設計当時次の様なエピソードがあつた事が忘れられない。ガスビルの上階を白色、二階迄を黒色とする為黒御影の水磨を新しく使用した。処が日本人の頭には黒という色が喪中に使われる慣習から重役に喜ばれない。白御影を使用してくれと注文され安井君は困つたようである。考えた末、従来に因襲を打破するため設計の基本方針は動かさず、細心の工夫を凝らし階下の柱の両側面を白御影とし、新しく重役の了解を得たという事である。後年この種の手法が新京都駅等数多く用いられている。永い間公私共に親密であつた安井君の想出はとてもつきないが、親友を失つた淋しさは誠に万感胸に溢れるものがある。協会の大和氏から何か旧い想出をとの依頼でしたが、時間に余裕がなかつたので、想い出すままにとりともめなく記した事を許されたい。

30. 6. 2

〔本稿は安井さんと最も親交厚かつた波江さんから寄せられた短信〕

## 安 井 君

今度日本建築協会の機関誌「建築と社会」で亡き安井君の記念号を出すので、想い出か或いはそれに類するものを何か書いて呉れとの事です。私は安井君とは個人的に余り接触する機会がなかつたので、今ここにとりたてて書くようなエピソードも持ち合わせていない。しかし大学時代丁度安井君は私の一つ下のクラスにいて、二年間同じ製図室で課題を描いていたが、安井君と後藤慶二君の二人が他の者にくらべてずば抜けてデザインがうまかつたのは覚えている。安井君は大体他人の真似をするのが絶対に嫌いで何とかして自分自身のものを出そうという努力と野心に満ちていた。この傾向は後に独立し

## 長 谷 部 鋭 吉

た事務所を持つてからの作品によく顕われていると思う。私は他の作品はあまり見ていないので何ともいえないがガスビルと東京の満鉄ビル、それに淀橋馬場等は確かに旨いと思う。また大正三年の大礼記念博の満洲館や十五年の大毎博満蒙出品館等、安井君独自の工芸的感覚の旺盛な作品も忘れられない。

戦後、変動した建築界で安井君は又安井君一流の勉強をしていた事と思うが、名匠安井君も今は亡く、吾々の最も残念に思うのは、戦前の諸作を凌ぐ傑作をものして吾々の眼を楽しませて呉れなかつた事である。

（談 文責 佐野）

私の学生時代の同級生に中村達太郎先生の長男がいた。二年生の頃一夕招かれて先生の宅を訪れた事がある。その際沢山の写真を見せてもらった。

当時有名な建築家の学生時代や卒業計画の写真など私にとって興味深いものがあつた。なかには美髯を蓄えて既に一家の風をなした人やまるで子供々々した人があんな有名な建築家になつているのかと思われたりして非常に面白かつた事を思い出す。多数のデプロマの中からその友人がこれが安井さんのだといつて見せてくれた事を今でもはつきりと記憶している。

友人が特に安井さんのを私に見せたのは、当時満鉄に安井ありとまでいわれる位な新人としての安井さんであつたからである。それ位安井さんは吾々の学生時代には有名になられていた。

デプロマはマンションともいえる位の住宅だつたと思う。誰のデプロマを見ても美術館や公会堂ばかりなのに安井さんのだけが住宅だつた事も私にはこの人が何か自信を持つた普通でない天才的な人だという風に考えられた。そしてその作風はどこか丸味をもつた非常に美しいものであつた。安井さんのその後の作品のどこか丸味をもち、鋭角をすりへらした様なところのある作風は既にこの時からの持味だつたと思う。

安井さんは吾々からすれば約十年の先輩であるが、当時日本の建築界にもアールヌーボーからセツセツシオンという風に建築思想の流れがあつたことだと思うし、安井さんもそれ等の新興思潮に影響されられた事だと思う。しかるに多くの人達は吾々の時代でさえそうであつたように学生時代の新人もいざ卒業という時にはきまつて公会堂や美術館のデプロマをやるのが普通である。そんな時代に安井さんは住宅のようなものをテーマにとつてこれを徹底的にこなそうとする態度のなかに、どこか人と異つた天才的な信念の様なものが時代の思想に敏感に働いていたに違いないと思う。はたせるかな某教授に

「工学の卒業計画に住宅をやるとは何事だ」と非難されたそうである。今から思えば随分理解のない事をいつたものだと思う。それかあらぬか、安井さんは銀時計の機会を失し、志を内地に需めず、満洲の新天地に赴かれたと伝えられているが、もとより真偽の程は不明である。

その夏私は上海での実習を終えて青島から大連に渡りそこで初めて安井さんの作品、たしか満鉄のアパートであつたかと思うが、親しく先生の作品を見てどこかにデプロマに似たところがあるように思つた。

何年かたつてお目にかかつたのは大阪毎日新聞社の建築の頃で安井さんは片岡先生の事務所へ招かれて現場の実務につかれていた時であつた。葉巻をくゆらしておられるあの特長のある笑顔が第一印象であつた。

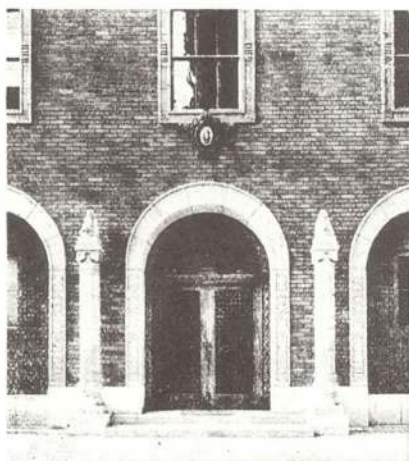
ある日大阪の学士会館で吾々数人の者が集つて建築士会の打合せをしていた。安井さんも会員だから当然その席に加わるべきであるのに、同じ室内で撞球をしながら決して吾々の会合に加わろうとはされないのを不審に思つた事がある。興味がなければ投げてかえりみない。ゴルフをやつてもどこかにそんな風な処がある。思うにこうしたどの芸術家にも通有な一種の「狷介」な性質といつたようなものがあつたのではないかと思う。純粹を好む潔癖の一種ともいえるのではないかと思う。

私は以前から安井さんの夥しい作品のうちには不思議に思えるところがある。例えば味の素ビルと東京野村ビル、満鉄支社と瓦斯ビルという風に略同年代に出来た作品でありながら同じ人の作品とは思えぬ位の作風に高低がある様に思う。何か自分の思うようにならぬか、やるのに興味を失つた様な場合その仕事を投げてしまうというところがあつたのではないか。でなければこんなに異つた作品にはならぬと思う。

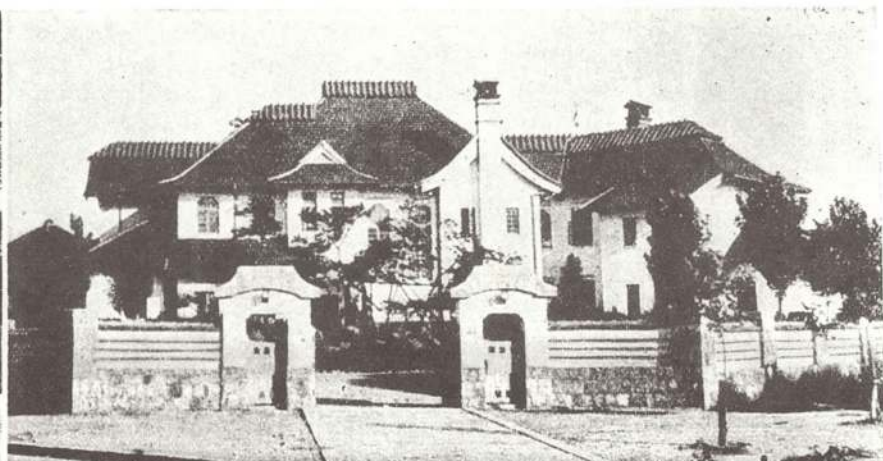
「狷介」な性質といえは故中村鎮さんなども似たところがあると思う。

安井さんののはどこか厳しいところがあるが、鎮さんの

大阪クラブ 1924



大連税関長官宅 1911 (第1回作品)



方は纏綿として弱々しい代りにその所説は鋭く建築批評など一家の風格があつた。その鎮さんが何かの雑誌に高麗橋の野村ビルを激賞されていたのを読んだ事がある。

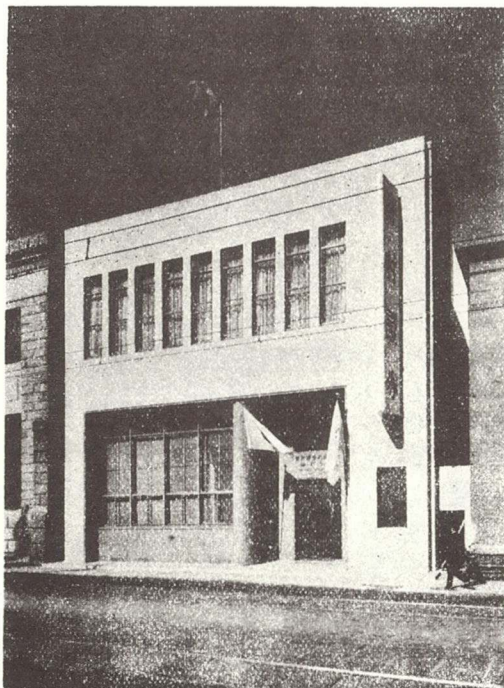
事実この建物は安井さんのものとしては代表的なものの一つに数えられると思うが、安井一流の丸味を帯びたところは変っていない。しかしそれ以後に造られた京都の野村銀行（四条通）や大阪クラブの東洋風なものから一步進んで更に近代的に変つてゆかれた最初のものとして興味深く、その量感の取扱いなど当時吾々には感銘深い建物であつた。殊にあの建築には市街地のものとして天地を軽くし中程を重くした点など真に安井さんとして手慣れた作風であつた。その後こうした作風は東京野村ビルとなつて顕れ、その後次第に同じ様な傾向は消えていつたと思う。丸味の点で安井さんと凡そ対照的なのは長谷部さんの作風である。どこかに鋭いところのある長谷部さんの作風は多分にゴシック的な影響だと思われる。安井さんの丸いところはどこかに複雑なものがしのばれるのに反し、長谷部さんの鋭さの奥には省略と厳しさがある様に思う。私は何時もこの二人の関西における偉大な建築の作風を比較して非常に興味深く面白いものだと思う。勿論吾々はこの二つの作風には影響をうけ私の初期の作品森五ビルなど安井さんの作風から享けた影響などが残っているように思う。

東洋風なものは安井さんの専売みたいな時代があつた。しかし私は安井さんの東洋風な傾向は安井さんが満洲におられたことにもあるがあれは安井さんの趣味的な傾向、余技のようなものだと思う。尤も東洋風というて

も支那、印度、朝鮮、スパニッシュという風に一連の東洋風な傾向に対する好みともいえるものであつたが、その手法は実に手慣れたものである。今でも即興的な大阪クラブの列柱や四条通りの野村銀行をみるにつづく巧いと思う。寸分のすきもない手堅さは様式的に余程の訓練をしなければ出来ないものである。簡素な様式的な建物を見ていると四条通りの野村銀行の堅実さがよく判る。大阪クラブと野村の京都支店とはそうした時代の安井さんの代表作であると思う。ガスビルを安井さんの代表作中の随一とすることに何人も躊躇すまい。それ位あの建物は経済的なものであつて、質もよく安井さんとしては恵まれた条件のうちに設計されたと思う。勿論その頃の建物として第二野村ビル（白木屋）や淀の競馬場等も良いが、ガスビルの比ではない。縦と横と面と線との取扱いなどは実に美事であるしその手堅さに至つては完璧に近い。ある若い米人建築家が、この建物を非常に賞めていたことを思い出す。それは独り御堂筋の偉観である許りでなく、春霞の頃にもなれば、御堂さんの御屋根を前景として浮び上つているガスビルの景観はよく写真にも出ているが、まさに都市建築の美の極致といつていい位である。私は戦前「そごう」の辺りから時々この景観を眺めて美しいと思つたことがある。

卒直にいつて戦後安井さんが一時ではあつたが建設事業にたづさわられた事を残念に思う。

安井さん程の人がなぜ設計一週到でやり通されなかつたかと私など他事でなく惜まれてならなかつた。事実安井さんは戦後日本の建築界における混乱に対しても安井さん一流の諦観的態度をとつておられたのではないかと思う。吾々がその中で苦しみ圧倒されもがいている時でも安井さんは孤然として傍観的な態度でおられたのではないか。作家は作品活動以外に心も技もあり得ない位な生活でなければならない時でも安井さんは建設事業の代表者であつた事を建築界のためにも、安井さんにしてみても、取かえしのならない損失の様に残念に思う。何故なら戦後における安井さんの作品はあのガスビルの様な本当の力量が出ていないのではないか。本当の安井さんのペースに達しないうちにこの世を去られたのではないかと思つて実に惜まれてならない。まだ春秋を残して逝かれたことを惜しまれてならない。



野村証券神戸支店 1954

私は大正9年に片岡先生の建築事務所に入所し、始めて安井先生にお目にかかつてから爾来先生の指導を受け先生が独立して建築事務所を開かれてからも引き続き御厄介になつて、先生亡き後もその事務所の経営に一員として働いておりますので、我が青春の時代から今に至る人生の大半を先生と共に過してきました。そのため、先生亡き今日この頃でも、今年に予定されていた、先生の外遊中の留守を預つておるような心持しております。夜半先生と仕事の打合せをしたり、雑談をしている夢からふと覚めたときなど亡き先生を想つていしれぬ寂しさを感じます。

先生の今日に至るまでの作品に強い東洋的なものがありますのは、先生の思想や感情が古代中国又は宋、元の思想とその美的感覚に共鳴される点が多かつたのでないかと思われまゝ。在満当時の若い時代は特にその処を得ておられた模様で、常に当時の想出を面白く語られ、中国の建築、絵画、工芸に非常な愛情を寄せられていました。

先生は造型のモチーフを自然界から摂られる場合が多く、例えば、生活力の満ち満ちた雑草群生の美しさから一茎の野花のつつまじやかな姿から、または荒々しい山肌と森と雲のたたずまい等から感じられたものを抽象化し、表現してゆくことに苦心されておられました。こんなとき何物も忘れて、煙草を啣えたまま黙々と打ち込んでおられる姿にはなにかおごそかな感動を覚えて私達は眺めたものでありました。

数多い先生の作品のうちには、われながら満足なものもあり、また考えどおりにゆかなかつたものもいくつかはあつたことと思われまゝですが、一つ一つの作品に同じ手法の繰り返しや取扱を避けることに努められ、新機軸を出すことに苦心されておりました。結果からみて出来、不出来がありましても、先生の作品に対する態度は常に真剣で熱意に満ちておりました。戦後一時建設業務に携われましたときでも、自身は設計にのみ専心され、木造の小さい建物も一々スケッチをしては図面の指導をされ、多事だつた身辺と、当時の憂鬱な世相の煩わしさを紛らされておられたことを私達もまことに心辛く思つておりました。その後再び設計事務所として設計監理に専心されることになりましてからでも、戦後の建築が多くの場合そうであつた様に、建物の竣工に一日を争う事情のた

め、その設計の期間が極度に短縮され、充分な構想のもとに設計のスタートを切つて、なおその製図途上において、自ら進んで基本から考え直すだけの余裕のある期間を与えられることが少なく、よりよい構想も具体化することが出来ないことを苦悩される場合が度々ありました。

総じて戦後の諸作には、戦前にくらべて緻密と磁味を加え、同じく東洋的な取扱いにしても円熟と古淡の心境を感じさせるものが多いように思われ、国内、国外で日進月歩する新材料の登場に對面して、これを勇敢にとり入れる態度にしても、徒らに盲追しないで柔軟かくこなして身についた処理をするだけの考慮を周到にめぐらしていたと考えます。それだけに戦前の諸作がある意味で一つ一つ警世的な意義を追求して制作されたのに対比して、どちらかといえば地味で目立たないしつくりと味わうに値するものというのがねらいのうちで重要な部位を占めるように変化してきたといえるのではないのでしょうか。

昨年竣工した野村証券会社神戸支店の建物、小さいながら建物の用途と性格をよく掴み、資材の取扱い等には多年の経験を充分に生かし、その出来栄えからみても、先生自身も満足された近作でないかと思われまゝ。

先生は常々自分は死ぬまで鉛筆を離さないといわれていましたが、病床に就かれてからも、スケッチブックと鉛筆は常にその脇におかれて、少しでも気分のよい折は鉛筆を動かし、想を練つておられました。常々の言葉通り、その道に徹せられたことを私達としては、せめてもの慰めとしております。

長谷部先生、松井先生、伊藤先生や故人の本野先生達と柊会というグループを作つて私達も一緒になつて熱をあげ、また各自の油絵を高島屋で展示したりした、30数年前の出来事も、つい先頃の様にも想われ、また遙かに遠い昔の様に考えられて、一緒に過した長い年月の想出は尽きません。先生はその後も最近まで折りにふれては油絵筆を握られ、性格のよく出た面白い小品を作られておりました。

先生の設計に打ち込まれた熱意と真剣さと、その業績は、私達門下生一同の常に正しい標識として、その光は私達から消え去ることがないと思つております。

(筆者 安井建築設計事務所取締役)

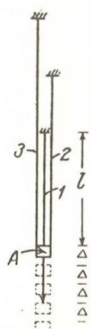
## リミットデザインについて

坂 静 雄

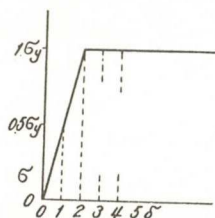
## 1. リミットデザインとは

極く簡単な問題を扱ってみよう。第1図は同じ強度、同じ太さの3本の鉄棒で長さは夫々異なる。この3本が併列で共通の荷重を支えるものとすれば2次の不静定構造である。鉄棒の長さを1.0, 1.5,  $2.0 \times l$ とする。載荷点Aを1, 2, 3, …… $\times d$ と段々押し下げて見る。1  $d$ だけ下げた時の各棒の歪度は1:1/1.5:1/2 ( $d/l$ )であるから歪度は短い材が一番大きく応力も従って一番大きい。そこで鉄棒は周知のように応力と歪の関係が第2図

に示す弾性範囲と降伏点以後の塑性部分から成っているものとする。載



第1図



第2図

荷点Aを $d$ だけ下げた時の最短材の歪度  $d/l = \delta$ とし、この時の棒の応力を  $0.5\sigma_y$  であるとしよう。 $\sigma_y$  は降伏点応力である。棒に働いている力はこれに断面積  $a$  をかけたものであり、3本の棒に作用する力は

$$P = 0.5\sigma_y a + \frac{0.5}{1.5}\sigma_y a + \frac{0.5}{2}\sigma_y a$$

$$= 0.5\sigma_y a \left(1 + \frac{1}{1.5} + \frac{1}{2}\right) \quad (1)$$

である。今まで $d$ を与えたと記したが、この $d$ を生ずる原動力となつたものは3本の棒に釣られた荷重  $W$  である。

つまり  $W$  と  $P$  は釣合っているから

$$W = 0.5\sigma_y a \left(1 + \frac{1}{1.5} + \frac{1}{2}\right)$$

とすることが出来る。

次に共通載荷点Aを $2d$ まで押し下げて見る。歪度の比率はやはり1:1/1.5:1/2で、各項に $2\delta$ をかけたものが夫々の歪度である。最短材の応力は第2図から判るように丁度  $\sigma_y$  で、他の材の応力はそれより小さい。この場合には前と同様にして

$$P = 2W = \sigma_y a \left(1 + \frac{1}{1.5} + \frac{1}{2}\right) \quad (2)$$

となる。荷重  $2W$  がかかると最短材の応力は降伏点  $\sigma_y$  に達する。構造物を弾性体として取扱う従来の考えでは

これが支持し得る最大荷重と見なす。 $W$ が長期荷重であつて長期許容応力が  $0.5\sigma_y$  であれば  $W$ が設計荷重になり、安全率は2となる。また  $2W$  が長期短期合併荷重であり、それに対する許容応力が  $\sigma_y$  であれば、 $2W$ 時に最短材の応力が丁度許容力に達するから安全率は1である。

以上のべた範囲はすべての歪度が降伏点歪度以下であつて弾性範囲にあるから、従来の設計法をのべたにすぎない。従来の弾性解法では不静定構造に対しては変形又は歪度を仲介にして部材間の力の割り振りを決め、以上の説明もそれを一歩も出していない。ここまではまだリミットデザインの考えが入っていない。

ところで第1図の構造物は実際  $2W$ 以上の荷重を支える能力がないかという決してそうではない。試みに共通載荷点Aを $3d$ だけ下げてみる。第2図から判るように最短材の歪度3に対して応力は依然として  $\sigma_y$  であるから、この棒は  $\sigma_y a$ の荷重を分担している。棒2, 3の歪度は  $3d/1.5l = 2\delta$ ,  $3d/2l = 1.5\delta$  であるから応力は夫々  $\sigma_y$  及び  $(3/4)\sigma_y$  となり、

$$P = a\sigma_y \left(1 + 1 + \frac{3}{4}\right) = 2.54W \quad (3)$$

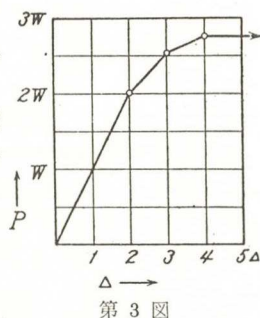
を得る。

同様  $4d$ だけ下げてみれば、棒1及び2の歪度は、 $4\delta$ 及び $2.66\delta$ で降伏点臨場にあるから応力は  $\sigma_y$  である。又棒3の歪度は  $4d/2l = 2\delta$  であるから、その応力も丁度  $\sigma_y$  に達し、

$$P = a\sigma_y (1 + 1 + 1) = 2.77W \quad (4)$$

となる。3材とも降伏点に達しているから、この荷重のもとに降伏をつづけ、やがて変形は目もあてられぬ状態となる。それでここを真の最大荷重と考える。 $d$ と $P$ の関係は第3図に示す。どこかの応力が降伏点に達する時をもつて最大荷重と見る弾性設計ではこの構造物は  $2W$ の耐力であり、全部材が降伏しはじめる真の構造物の耐力は  $2.77W$  であることが判つた。この相異は世智辛い現在で見逃し得ない。

さてリミットデザインというのは構造物の真の耐力がどこにあるかを目標として設計するやり方である。勿論普通構造物にかかっている程度の荷重で破壊が起つては困るから、普通の荷重を何倍かしたものを予想破壊荷重とし、予想破壊荷重のもとに構造物が丁度破壊するよう



第3図

にする。予想破壊荷重と実際かかる事のある荷重の比を荷重係数といつて、普通固定荷重には 1.2, 積載荷重には 1.8~2.0 位をとることが多い。

再び前問題にかえて 3 材が共に降伏状態にある時の棒に働く力は夫々の降伏荷重の和になる。

$$P = a\sigma_y + a\sigma_y + a\sigma_y$$

これは (4) 式と一致する。この式は荷点の下りに無関係に求められる。それは下りが 4A の時でも 5A ..... の時でも同じ結果を得るからである。弾性設計の時は歪度を仲介とし剛度に比例して部材の力の割り振りを決めたが、リミットデザインは各材単独の耐力の比に破壊荷重を割り振ることになる。これは設計上大変便利であつてリミットデザインの一大魅力となつてゐる。試みに予想破壊荷重を  $P$  とし、前例と同じく 3 本の並列棒でこれを支えたとする。

各棒の耐力 (降伏荷重) を  $P_1, P_2, P_3$  とすれば

$$P = P_1 + P_2 + P_3 \quad (5)$$

になるように  $P_1, P_2, P_3$  を決定すればよい。破壊荷重だけが問題であれば  $P_1 : P_2 : P_3$  の如何は問うところでない。ただこの割り振りは設計の上手下手には関係する。

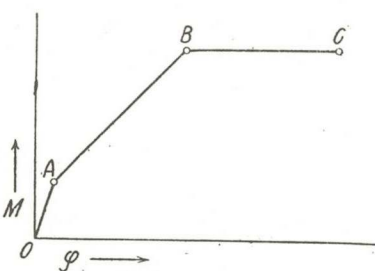
現在リミットデザインでやると構造物の常時または非常時の変形が甚だ大きいのではないかと心配している人々が多い。これは当然でない。第 1 図の問題で 3 本の棒が全部降伏しはじめれば沈下は限りなく増大するけれど、最後に降伏状態に入るのは最長の棒であり、降伏が始まるとする瞬間の棒の伸は弾性伸だけであるから我々が弾性計算で予想する伸とそれほど開きのあるものではない。リミットデザインは一面から見れば最後の弾性部材の弾性のつきところを狙つたものであるから、予想破壊荷重が普通の荷重より大きくとつてある限り構造物全体としての撓みは心配するに及ばない。

## 2. プラスチックヒンジとは

我々が構造力学で取り扱う問題は曲げの場合が多い。曲げに対応する歪は部材単位長さに就て起る断面の回転角で、以下これを回転歪という。

$$\begin{array}{ll} \text{曲げモーメント} & M \\ \text{回 転 歪} & \phi = M/EI \end{array}$$

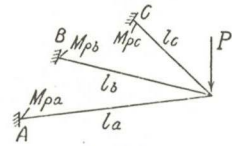
そこで今度  
は鉄筋コン  
クリートに就  
て  $M$  と  $\phi$  の関  
係を検べて見  
る。第 4 図は  
理論及び実験  
から既に是認  
されている  $M$



第 4 図

と  $\phi$  の関係であつて OABC なる折線で表わされる。OA は亀裂荷重以前で A は亀裂モーメント、亀裂回転歪に対応する点である。AB は弾塑性範囲で B は鉄筋応力が降伏点に達する時の曲げモーメントと回転歪に対応する。BC は塑性部分で C は鉄筋の降伏が進行し、圧縮側コンクリートが圧潰するところに当る。同一断面、同一コンクリートでは A は鉄筋比に殆んど関係しない。鉄筋比が大きいと AB の範囲は長くなる。又 BC の範囲は鉄筋比が大、コンクリート強度が小であると短くなり、釣合鉄筋比 (破壊に対応する釣合鉄筋比を指し、常用計算式の釣合鉄筋比より遙かに大きい) 以上であると BC は消滅する。リミットデザインが成立するためには BC 部分が存在することが必要で、現在実施されている鉄筋比、及びコンクリート強度では自らこの条件は満される。C は B より實際は若干高くなるが、これを無視し BC 部は  $\phi$  軸と平行であるとしておく。A, B, C 諸点は材料が与えられていると計算で求められる。梁の荷重が漸増し、最大曲げモーメントのところの曲げモーメントが B に対応する値  $M_p$  に達すると、ここにプラスチックヒンジ (以下 P 鉸とする) が発生したという。またこのモーメントをプラスチックモーメントという。P 鉸とはプラスチックモーメント以下では鉸のない状態と同一であり、プラスチックモーメントに達すると曲げモーメントの増加がなくても自由に回転が起ると考えられる鉸である。等分布荷重を受ける単梁を考えて見ると中央の最大モーメントが  $M_p$  に達するまでは鉸のない 1 本の梁として働き、最大モーメントが  $M_p$  に達すればその荷重のもとに中央に鉸のある不安定な梁に移り代るから、その撓みは無限に増大する。単梁であればこれが最大支持能力を示し、弾性解法でといた場合と一致する。不静定梁では P 鉸が一つ出来てもなお荷重を支持する能力があり、1 張間の両端及び中央に各 1 ケ所鉸が出来ると梁は不安定となり、それに入る直前の荷重が支持し得る最大荷重である。この場合は弾性解法とは異つた最大荷重を与える。

第 5 図は異つた片持梁 3 本が突端を共通にし、そこに単一集中荷重  $P$  がかかる場合で第 1 図の場合とよく似たものである。片持梁の固定端 (最大モーメントの点) のプラス



第 5 図

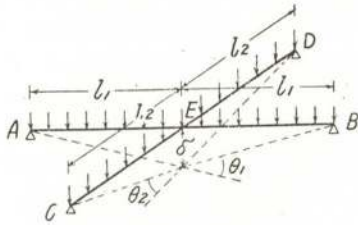
チックモーメントを  $M_{pa}, M_{pb}, M_{pc}$ 、片持梁の長さを  $l_a, l_b, l_c$  とする。各片持梁の固定端全部がプラスチックヒンジとなつた場合を考えると、各片持梁の剪断力の和は荷重  $P$  に釣合つていなければならない。

$$\frac{M_{pa}}{l_a} + \frac{M_{pb}}{l_b} + \frac{M_{pc}}{l_c} = P \quad (6)$$

これが設計条件式であつて  $M_{pa}/l_a : M_{pb}/l_b : M_{pc}/l_c$  はどうあつてもよい。

### 3. リミットデザインの1例

第6図は両端支持の梁 AB, CD が張間  $2l_1, 2l_2$  の中央



第6図

Cで接合されていて、等分布荷重  $g$ 、積載荷重  $P$  を支持する使命をもつ。弾性解法では一応 E の結合を解除し、荷重による中央撓みを求める。また別に AB の中央に不静定力  $X$ 、CD の中央に  $-X$  をかけ、この集中荷重による撓みを求め、 $X$  の存在の下に梁 AB, CD が E 点で共通撓みを起す条件から  $X$  を決定する方針が考えられる。

ここではこの問題についてリミットデザインを説明する。しかも連梁やラーメンに一般的に使用されている方法に従う事とする。

$$\text{予想破壊荷重 } w = 1.2g + 2p \quad (7)$$

この構造物の破壊は梁 AB 及び CD の中央即ち E 点に夫々の梁に P 鉸が出来た時起きるものとする。P 鉸発生以後は P 鉸が回転するだけであるから、AE 等の部分の曲率変化は起らない。従つて P 鉸発生以後は AE, EB 等の梁部分は剛体として A 及び E を中心とした回転となる。

E に  $\delta$  という仮想沈下を与えてみる。

|               |               |
|---------------|---------------|
| AE, EB 部材回転角  | $\delta/l_1$  |
| AB 材の P 鉸の回転角 | $2\delta/l_1$ |
| CE, ED 部材回転角  | $\delta/l_2$  |
| CD 材の P 鉸の回転角 | $2\delta/l_2$ |

仮想沈下  $\delta$  を与えた時の外力及び応力のなす仮想仕事を考えてみる。

AE 材には荷重  $w$  があり、その合力  $wl_1$  は  $\delta/2$  の沈下をするから仮想仕事は  $w\delta l_1/2$  である。EB 材の荷重に対しても同様である。また同様に CE, ED の荷重のなす仕事は各  $wl_2\delta/2$  である。よつて外力の仮想仕事は、

$$W_a = 2\left(\frac{1}{2}wl_1\delta + \frac{1}{2}wl_2\delta\right) \quad (8)$$

で与えられる。また P 鉸に働いているモーメントを  $M_{p1}, M_{p2}$  とするとそれぞれの回転が上記の如くであるから仮想仕事は

$$W_i = M_{p1}2\delta/l_1 + M_{p2}2\delta/l_2 \quad (9)$$

となる。P 鉸発生以後構造物は不安定な釣合をしているから、荷重のなす仕事と応力のなす仕事は等しい。

よつて

$$M_{p1}\frac{2\delta}{l_1} + M_{p2}\frac{2\delta}{l_2} = 2w\delta\left(\frac{1}{2}l_1 + \frac{1}{2}l_2\right)$$

即ち

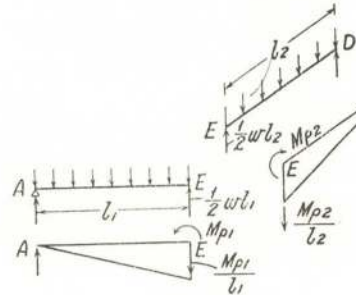
$$\frac{M_{p1}}{l_1} + \frac{M_{p2}}{l_2} = \frac{1}{2}w(l_1 + l_2) \quad (10)$$

を得る。これが設計条件式であつて、 $w, l_1, l_2$  が与えら

れていれば、この条件に適する  $M_{p1}$  と  $M_{p2}$  を決定すればよい。 $M_{p1}/l_1 : M_{p2}/l_2$  の選定は自由であるが、構造力学で従来我々がもっている常識（例えば張間の小さい梁の方が大きなモーメントを分担する）とあまりかけ離れた撰定はよくない。ここで設計の上手下手が分かれる。

なお (10)

式は第7図に説明したように AE, ED 等を単梁と見た時の荷重による反力の和、 $w(l_1 + l_2)/2$  を  $M_{p1}, M_{p2}$  による反力で



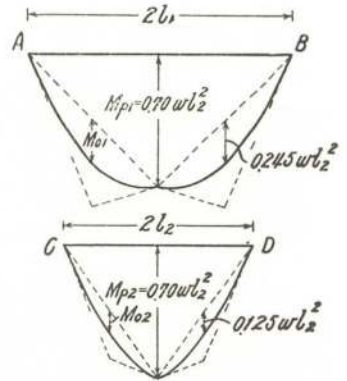
第7図

打消しているという物理的意味を表わしている。又荷重による反力の和をプラスチックモーメントに対応する耐力の比に割り振つていともいえる。

$l_1 : l_2 = 1.4 : 1$  の場合をとり、 $M_{p1} = M_{p2}$  を採用すると (10) 式から

$$M_{p1} = M_{p2} = 0.7wl_2^2$$

を得る。各梁の曲げモーメント図は第8図に記した如くである。中央に  $0.7wl_2^2$  をとり、これと支点を結ぶ。その線の中央から下に  $l_1, l_2$  を単梁とする時の最大モーメント



第8図

$$M_{o1} = \frac{1}{8}wl_1^2 = \frac{1}{8}1.4^2wl_2^2 = 0.245wl_2^2$$

$$M_{o2} = \frac{1}{8}wl_2^2 = 0.125wl_2^2$$

をとり、図に示した如く2次パラボラを画けばよい。中央にパラボラの切線を示しておいたからよく判る通り、梁 AB では中央より僅かに偏したところに  $M_{p1}$  より大きな曲げモーメントを生じている。實際上この程度は無視してよいが、必要あらば補強する。梁各部の断面はこの降伏モーメントが図に示した曲げモーメントより小さくならぬように設計すればよい。

梁 AB が荷重  $w$  を単梁の形で支持すれば中央モーメントは  $4M_{o1} = 0.98wl_2^2$  でこれと  $M_{p1} = 0.7wl_2^2$  との差は梁 CD との同に働く不静定力  $X$  によるモーメントである。

$$\frac{1}{4}X(2l_1) = (0.98 - 0.70)wl_2^2$$

$$X = 0.4wl_2$$

この値は当然梁 CD に就て算出した値と一致しなければならない。

$$\frac{1}{4}X2l_2 = (4 \times 0.125 - 0.70)wl_2^2$$

$$X = -0.4wl_2$$

即ち等分布荷重の外に梁 AB は中央で下から上に、梁 CD は中央で上から下に  $0.4wl_2$  なる集中荷重を受けている。よつて剪断力の分布、大きさも確定し、剪断補強も設計出来る。

なお第 6 図の A, B, C, D が固定で、そこのプラスチックモーメントが  $M_{PA} = M_{PB}$ ,  $M_{PC} = M_{PD}$  なる絶対値であれば (10) 式に相当して次式が得られる。

$$\frac{M_{P1} + M_{PA}}{l_1} + \frac{M_{P2} + M_{PC}}{l_2} = \frac{1}{2}w(l_1 + l_2) \quad (11)$$

#### 4. リミットデザインの特徴

以上例をもつて説明したように

(1) リミットデザインは構造物が降伏しはじめる荷重を予想して、その荷重のもとに丁度降伏が起るように設計する。

(2) 不静定構造に特効がある。

(3) 部材は荷重と変形の関係に必ず降伏点踊場をもつべきこと。

(4) 不静定構造では弾性設計でどこかの応力が降伏点に達する荷重以上になお載荷能力があり得る。

(5) リミットデザインでは各材の耐力に応じて破壊荷重が割り振られる。弾性設計のように変形に基づく弾性等式 (例えば連梁における 3 曲げモーメントの定理) に拘束されない。

(6) リミットデザインをやる時の実際の算式は荷重による仮想仕事と応力のなす仮想仕事等しいという代数学を用いるだけで極めて簡単である。

(7) リミットデザインを行つても通常荷重時に起る変形は心配するほどのことはない。

(8) 説明の各所に現われたように弾性体の力学の智識はリミットデザインを運用するに当つても極めて必要である。

以上の諸点が明かになつたと思う。

従来の設計法は許容応力なるものを設け、普通かかり得る荷重のもとに構造物が使用上著しい障碍を来さないことを目標としたものである。その代りその構造物がどこまでの荷重に耐え得るかは預り知らない。一方リミットデザインは実際にかかってくる荷重よりも大きな荷重を想定し、その想定荷重のもとに構造物が降伏することを目標として設計するものである。従つて破壊荷重はよく判るが、日常構造物が受けているような小さな荷重の下で構造物がどんな状態であるかはよく判らない。例えば第 2 にあげた 3 本の片持梁の例でも荷重の割り振りが

不適当に出来ていると、破壊荷重の例えば 1/2 位の日常荷重で 1 本の片持梁の固定端は、既に P 絞となつていてという状態もあり得る。それで耐力の割り振りに就ては弾性体の力学から得られる常識とあまりかけ離れた割り振りに設計することはよくない。従来の設計とリミットデザインとは設計目標が異なるのであるから、こちらを立てればあちらが立たぬという事情がいつれの側にもある。

しからば何故リミットデザインが近来登場したか。日本では大地震の時に現実に建築物が破壊される。それならば破壊を目標とした設計の方が合理的であると著者は考える。米国では原子爆発の衝撃波に耐えるという事を考えているらしい。かような大威力に対して従来の設計では不経済なものとなり、あるいは不可能となる。それで構造物の耐力のギリギリまで考慮に入れたリミットデザインが設計を有利にする 唯一の方法と考えられて来た。極めて激烈な地震に際し建築物は辛じて崩壊を免れ、人命を救うことが出来れば、普通の建築物の耐震目的は達せられるものと思う。かような状態は塑性変形をとり入れたものでなければならない。米国で原子爆弾の脅威が解消すれば米国の技術者の眼は当然耐震構造にリミットデザインを取り入れることに向くものと著者は考える。その後塵を拝するには及ばない。

現在の耐震設計は静力学的力におきかえてやつてゐる。低層建築で建物を剛体と見做して差支ない範囲ならこの方法も妥当であり、リミットデザインに代えることも問題はないと思う。建物を振動体をして扱わなければならない場合は現在の震度 0.2 前後を用いる静力耐震設計も不完全なものである。性の悪い週期や振幅の地動が追つかけ引つかけやつてくる場合にどんな応力状態になるか判らない。著者は従来震度 0.4 前後に対応する静力学的荷重の下に手軽にリミットデザインをおこなつてきたが、これに対して振動研究者から色々御注意を承つた。弾塑性体の強制振動の問題をもつと突込みぬ限り耐震設計のリミットデザインは時期尚早ではないかという事である。現在のところ仮令リミットデザインで設計したとしても現行の建築規準法で縛られる。即ち法定の震度を用いた荷重に対し、断面応力は法定の許容応力を越えてはならない。規定が改められぬ限りこの規定を守るとして、著者は大震度に対応する荷重をもつて静的のリミットデザインを行えば、規準法の条件に合致するものも出来やしないかとの希望のもとにリミットデザインを取り入れた次第であり、あながち、ある震度の地震 (震度だけで地震の破壊力は決るとは思われないが) に丁度耐えるという目標をおいたものではない。地震動は一定のものでないから今後はある範囲の週期や振幅や時間に対してある範囲の変形が許されるという限界を求めるように、構造物の塑性変形も考慮に入れて進むべきものと考ええる。

(筆者 京都大学工学部教授)

## 家 と 生 活 と 女 性

竹 久 虹 之 助

東京で育つたせいか、旅行というと、東北や信州にどうしても足が向き、学校を出る頃は、さらに北陸路から新潟地方、そして中部地方まで足をのばし、機会あるごとに写生をして歩きました。その頃から、土地によつて家の構造というか、建築様式といえますか、ともかく、外観からして全然ちがっているのに、興味を持ちはじめ、それが更にすすんで、建築と女性の生活とを結びつけて、考えるようになりました。現在ではやまい膏盲にいつて、その土地にのこのこと出向いて、台所や家具の寸法を計つたり、窓の大きさを見たり、女性の生活の面にまで、いらざる話をするようになってしまいました。

▶土地によつて家の構えが異なるのは当然ですが、絵をかく私は、そうした事に食欲になつてずいぶん描いて来ましたが、関西に一步足を踏みいれると、関東地方とその構えが、がらりと一変しているし、勿論風土がちがうので当然ですが、そんな生活様式といえますか、そうした事を画材にしていると、益々興味が湧きます。

▶大和の古い民家は、東北にない線のキレを見せています。これほど、周囲のなだらかな円味を持った山の線と、相対的にすつきりしたものを持つているのにも拘らず、農民の服装に美のコントラストがないのは、どう考えてもおかしいと思う。

古寺、仏像と多くの美しいものがあり、一般の家屋に、これだけの線と白と黒の美しさがあるのに、服装にだけその美しさが、欠けているということが、私には納得できない問題です。

会津地方から、米沢地方の農民の労働着というものには、可成り色彩的に美しいものがあります。歴史を調べるとここまで研究はしていませんが、奥地へ行つても、実に機能的な服装で色彩も相当に考慮されて、特に六月から八月にかけての、農婦の衣類には思いきつた配色があつたのが、強く印象に残っています。

御承知のように、東北地方の土は関西のように白ツぽくなく、黒ツぽく、山も深く従つて色も濃いように思いますが、その山間に点在する家屋は、やはり白い壁はありますが、どこか、ドツシリとしている。これは雪が深いからでしょうが、そこで働く農婦の服装が、遠眼には非常に印象深く、眼底に残るような配色があつて、それが集団の場合はリズムカルなうごきをみせ、単独の場合は、一輪の花を感じさせます。

そうした事などを、考えているとどうしても古い奈良朝以前の文化、また万葉にあるような、美しい詩情あふれる、数々のロマンスを想い出すのですが、そうした歴史を持つこの大和の農婦たちの、生活の色彩というものに対する、何かが足りないことを痛感します。

屢々奈良の女学校や、洋裁を専門にしている研究所で、服装美術の話の依頼を受けるのですが、いつもまづ第一、みんなはどうして、そんなに色数をたくさん、体にクツクツしているのか？と、質問ならぬつまり、悪口を吐くのですが、誰一人として、自分の生活の色彩に就いて返答をする女性がいらない。東京や信州の場合ですと、こうした悪口でもいつたら、たちまち蜂の巣を、つついたようにワイワイギヤアギヤアと、各自の色感を吐いてくれる女の子がいるものです。そうしたところに、家屋の構造というものが、心理的に影響しているのではないのでしょうか。この地方の女性の言葉が、非常に荒つぽくきかないというのも、何かと研究の材料になりそうです。

方言というのでなく、汚く、荒つぽいのは、よく海岸に近い所だとか、炭鉱地帯にあるが、これは本質的なものでないのではないのでしょうか。してみると、色彩的に何か欠けているこの地方に、心理的にもちがつたものがあるのかも知れませんか。

▶話が、建築からかなり妙なところへ飛躍しましたが、たしかに大和の民家には独特の美しい線と、巧みにのどけさとマッチした、白黒をつかつたものがあります。

中部以北の家屋と、それは可成りちがつた美しさがあります。盛岡あたりの奥地に、大和の建物に似た味のものが、眼につくことがあるのですが、むかしの文化のつながりを見せられたように感じて、うれしくなります。

四年位前でしたか、奈良の古い民家が火事で焼失したことがありましたが、あとで、学者がずいぶん残念がつていました。というのは、民家にしては珍らしい建物で、ランマなど重要美術の指定に足るべきものだったらしく、新聞でもだいたい叩いていました。もつとも場所が、赤線区域内の建物であつたので、学者も二の足をふんだのだろう？なんていつていましたが、そのへんに何か、そうした機関の盲点があるのではないのでしょうか。

素人の考えることですから、児童に等しいゆめかも知れませんが、私は私なりに、何か研究に足る問題ではないかと思つています。

(筆者 著述家)

## 理 事 会

13日 4時—5時 於朝日ビル

竹腰会長外6名 事務局2名出席

議事 (1)工高生設計コンクールの件は教育委員会企画の通り実施に決定 (2)法規委員会を土会建築基準法委員会と合同開催の件は合同開催をすることに決定 (3)各委員会委員追加委嘱の件は原案通り決定 (4)7月午餐会及び会員懇親会開催の件は企画の通り開催のことに決定(5)戸川書記退職金支給の件は原案通り決定。なお戸川書記退職に伴い、大和囑託に朝日ビル事務室の管理を委嘱することに決定した (6)入退会者詮衡の件審議の後、小野田セメントKKよりスライドの寄贈を受けたこと、優良証明書を発行した建材の展示条件決定のこと、その他各委員会の経過、一般事業、6月分会計などに関する報告が行なわれた。

## 住宅委員会

2日 3時—5時 於朝日ビル

中野委員長外9名 事務局2名出席

前回に引き続きローコストの問題を更に究めることとし、各委員から交々意見が述べられたが、その要素として設計計画、工費、材料の規格化と量産、耐用年限、質を落さないことなどが取り上げられた。又官庁の坪当たり四万円が果してローコストであるかどうかを検討することも問題の究明に役立つのではないかの意見や建築家としては住宅の質の向上を望みたい、要求のおさえ所によつてローコストの問題が決定されるのではないかなどの意見が述べられた。なお本委員会の活動方針などについても意見が述べられ、本委員会としては建築技術家を対象として活動し、住宅の向上を要望するものであることを明にすることとし、次回なお本問題について検討することとなった。

## 教育委員会

### 設計コンクール小委員会

4日 2時—3時半 於朝日ビル

寺岡主査外3名 事務局2名出席

工高生設計コンクールの募集規定を更に検討審議の上案文を決定し、更に審査員一名の追加を決定した。

### 工高生設計コンクール審査員打合せ

4日 4時—7時 於朝日ビル

笹川審査員外9名 寺岡 益尾小委員 事務局2名出席  
常務理事の挨拶および益尾委員の委員会経過報告があつて、募集規定の案文について審議した。意見交換の結果案文の二三の点を修正して募集規定を決定し審査について打合せを行つた。(審査会は9月26日開催)

### コンクリート実習講習会打合せ

28日 3時—4時半 於朝日ビル特別室

奥島、益尾講師 大阪生コン小畑、松村両氏

事務局2名出席

実習の方法、班別、材料器材の準備などについて、詳細具体的に打合を了した。

## 法規委員会

8日 3時—5時 於朝日ビル

中沢委員長外6名 土会委員3名 事務局2名

委員長から土会基準法委員会と合同開催することになつた旨並に前回委員会の経過を報告し、委員へ配付の資料について説明があつた後、府警の川畑氏を駐車場問題に関する臨時委員に推薦することを決定した。資料を検討意見交換の結果、将来の路上駐車禁止を想定の下に、新築ビルの駐車場所要坪数を、経済的考慮をも加えた上で算出するという審議方針を決定し、なお資料の充実を計るため、更に多数のビルについての調査を進めることとして、これが調査を山田委員に依頼した。

## 出版委員会

14日 3時—5時半 於朝日ビル

奥島委員長外4名 事務局2名出席

前回企画した近鉄とタイアップして古建築の写真集を発刊する計画は、近鉄に於て既刊の写真集に引き続いて建築篇発刊の予定計画のあることが判明して実現至難となつたので、天沼博士の作品集の中からデテールに関する部分を復刊する企画や、会員に呼びかけて古建築の写真コンクールを行いこれを利用する企画案などが出されて、これらの実現を計画することとなつた。なお左官工事に関する施工指針の編集は、建設会社の鍊達技術者の座談会、左官親方、材料業者の座談会などを催して、これらを纏めた上更に指針となるように委員会に於て編集することとした。

## 都市美特別委員会

15日—3時—5時半 於朝日ビル

滝沢委員長外12名 事務局2名出席

常務理事から本特別委員会新設の趣旨と経過を述べ、山田委員から法規委員会に於ける都市美の問題に於ける審議についての報告があつた。次いで各委員から都市美に関する色々の意見の発表があつて、本特別委員会の必要性を再確認し、一同滝沢氏を委員長に推薦して委員会の発足をみた。引き続き自由討議をすることとして、各委員より交々都市美の問題と本委員会の活動方針について活発な意見の発表があつたが、山田委員から審議の進め方として、(1)屋外広告物法の検討 (2)美観地区に関する検討(3)大規模ビルを対象とする広告対策の三者の中

の何れかを採り上げて審議することが適當ではないかと思う旨の意見発表があつたが、決定をみるに到らなかつた。

#### 編集委員会

16日 1時—4時 於朝日ビル

浦辺委員長外9名 事務局2名出席

(1)7月国際号経過報告 (2)8月号作品作風欄、本文、技術講座などを決定、なお本号を「安井武雄記念号」として同氏の作品集並に関係各氏の文章を掲載することを決定した。なお今後時に応じて関西に於ける老大家の記念号を出すことを考慮することにした。(3)9月建材特集号について更に検討を重ねた。(4)他の委員会その他よりの申入れを了承した。(5)10月号以降の各号については前回の決定通り企画を進めるが、各委員に於ても各自構想を練ることとした。

#### 災害委員会

22日 2時半—5時 於朝日ビル

横尾委員長外7名 電気工事業者参考出席2名  
事務局2名出席

(1)漏電火災対策。竹口委員から消防局に於て纏めた建築と漏電のプリントについて説明があり、次いで浅海電気牛田氏が、電気工事業者として、電気による火災の予防対策について意見の発表があつた。これに基づいて各委員から対策に関して色々の意見が述べられた。(2)ダクトの防火対策。同じく消防局で纏められたダクトの防火対策のプリントについて竹口委員から説明があり、次いで先般の第一生命のダクト火災について、竹中工務店に於て検討中の対策並に須賀委員検討の対策の発表があつて、種々意見を交換した。

なお両件ともその研究結果を取纏め整理するため小委員会を作ることとして、その委員の依頼をした。

#### 建材審査委員会

##### ビニリウム分科委員会

9日 3時—4時半 朝日ビル特別室

若木主査外2名 事務局2名出席

若木主査から先般ビニリウムの施工箇所を実地検分した経過を報告した後、竹内委員の同検分に対する意見書を報告。各委員意見交換の結果、優良品と認めることとして、証明書に添附の特徴に関する文書の案文を決定した。

#### 本委員会

22日 4時—5時半 於建設会館

置塩委員長外7名 事務局1名出席

(1)ビニリウム審査の件、竹内副委員長より分科委員会に於て調査検討した経過を報告、一同審議の結果優良証明書を発行することを決定し、分科委員会の案文を承認した。(2)伸縮自在棚受機の件、会員阪本氏より同機に対

する意見を求められたので、一同意見交換した結果、実用の場合種々欠点疑問の点ありと考えられ、製作者に於て自身使用実験することが最も可であるとの結論になつた。(3)「建築と社会」9月建材特集号に関する件。編集委員会の要求によつて、同号に優良証明書保持会社の材料を紹介することとし、その執筆方針について打合せをした。

#### 午餐会（青年建築家招待）

28日 11時半—2時 於今橋クラブ

昨年の例に倣つて「建築と社会」6月青年建築家特集号に推薦された青年建築家を招待して午餐会を催した。五階大広間で一同会食、デザートに入つて会長挨拶を述べられた。本午餐会の趣旨、会長の建築家としての人生観、英国に於ては建築家は最も尊敬される職業であることなどを説かれた上一層教養を積むべく望まれ、大いに青年建築家を祝福激励された。次いで浦辺編集委員長の紹介によつて招待された若い建築家は一人一人立つて感想や意見を述べて挨拶する処があつた。午餐会終了後英国領事館提供のソールスベリイ寺院と、アメリカ文化センター提供の写真家ウエストンの映画を上映観賞して散会した。当日の参会者は竹腰会長外27名であつた。

#### 座談会（推薦された青年建築家）

28日 2時—4時半 於今橋クラブ

前記午餐会終了後別席で、昨年推薦された青年建築家（2名出席）と本年推薦されて青年建築家（4名出席）と合同しての座談会を催した。小川正氏の司会で、関西で仕事をする事の意義や感想について、建築家の社会的地位の問題、設計と施工の分離の問題、横のつながりの問題、設計システムの問題、建築ジャーナリズムの問題、建築事務所の問題などについて語り合つた。最後に小川、浦辺両氏からこれを機会に若い者同志の会合なりグループを定期的にもつようにとの助言があつて閉会した。

#### 建築講習会

大阪府建築士会と本会との共催になる二級建築士受験のための講習会は、8、11、12、14、15、19、21日の7日間、大阪建設会館で、毎夜5時半から8時半迄行われた。猛暑連続の折柄ではあつたが、熱心な聴講者は毎夜130名に及び好評裡に講習会を終つた。

特許第一五三六号



＝特許＝  
**氣光式通風器**  
南閉式レヂスター

製造販売

大阪府西区江戸堀下通2ノ17  
**田辺工業株式会社**  
電話土佐堀⑦437—9

## お わ び

前号の「国際号」において、森田慶一教授執筆になる「Some Aspects of Japanese Architecture」の記事中、写真説明の英文は、原著者執筆のものでなく、編集委員会において英訳したものであります。原著者に了解を得ずに掲載しました点、深く森田先生におわびいたします。今後一層の注意をいたします。ここにおわびかたがた、お知らせする次第です。

日本建築協会編集委員会

## 編 集 後 記

▶本年5月、我々の敬愛する安井武雄先生がお亡くなりになられたことは誠に痛惜の極みですが、本号は、先生の作品を紹介して、とくに関西になじみ深い先生の生前の作風をしのぶことにしました。編集に御協力いただきました安井建築事務所の武田健三氏、山本純孝氏に厚くお礼申します。

本文記事として、梅田ビルを見学した際の座談会記事を会勢委員会でまとめてもらいました。教育委員会からの「これからの建築技術はどうあるべきか」の最終記事も集録しました。夏の読物として、若木・小川両氏対談による「商都かたぎ・主都かたぎ」も面白いと思います。

なお、カーテンウォールの解説として、浦辺氏、中野氏の原稿をのせました。

技術講座は、最近問題になっている「リミットデザイン」について京大の坂先生から玉稿をえまいたことを喜んでいます。

作品作風は、梅田ビルディング、扶桑相互銀行鳥取本店、筑後市庁舎指名競技当選案、オブトンカメラ店、トルコセンターを集録しました。

以上、御執筆たまわり、また御協力いただきました各位に紙上よりお礼を申し上げます。

## 卓 上 メ モ

▶戦後10年——この夏はとくに暑いと感じながらも、暑

さにめげてはならないものがあるように思われます。というのは、戦後10年の年月にわたくしたちはつねに平和を望んできました。もう原爆をおとすなという広島原爆乙女のことばは、広島をして平和都市建設をうながしてきましたし、わたくしたち建築家もそれに応えるよう努力してきました。

「平和都市」をつくること——その計画に含まれる種々の施設、それは、公会堂であれ、図書館であれ、また病院であれ、学校であれ、さらに住宅であつても市民に必要な文化的、物質的欲求を満たしうるものでなければなりません。こんにちの日本の経済状態のもとでは、国家なり、地方自治体が全力をあげて建設するほかはありません。ところが、国家がとつている政策自体が、その本質において再軍備の政策であり、基地拡張もやむなしといわれているのでは、その地方自治体も財政難、起債難、土地難等のため、平和都市建設も企画だおれです。現にわたくしたちの住んでいる衛星都市でも、それが現われています。これが現状なのです。

この現状を何とか打破しようと多くの人——わたくしたち建築家もふくめて——は努力してきました。この8月6日には「原水爆禁止世界大会」が広島にもたれようとしています。これは戦後はじめて以来の国民の大集会だろうと思われます。また、原水爆禁止署名が3千万をはるかに突破したという事実——これらは平和を望み、自由を愛し、生活を愛し、勤労を愛するすべての人の希いがこめられています。

この国民と手を結んで、こんごも平和都市のよりよき充実と建設に建築家は奉仕する——それは単なることばでなくて、実際に国民のための建物をつくっていく——このことを、うだるような暑さのなかにも強く自省する次第です。

(松井 記)

## 次 号 予 告

次号は建材特集号とし、作品作風欄には材料面からみたディテールを中心に紹介する予定。本文として、各材料別の解説や、商品名と材料名の索引などを集録します。技術講座は「建材のテクニクチャーと色彩について」の予定です。

## 建 築 と 社 会 第 36 輯 ・ 第 8 号

売価 1部150円・送料共  
昭和30年8月20日印刷  
昭和30年8月25日発行

発 行 所 社団法人 日本建築協会 大阪市北区中ノ島3ノ3朝日ビル  
電話 北 浜 ㊤ 1 3 3 4 ~ 9 番  
編集発行人 沖 田 誠 一 振替口座 大阪 3 9 9 7 5 番

印 刷 所 株式会社 研 文 社 大阪市北区堂山町66  
電話 豊 崎 ㊤ 2 0 5 6 番  
印 刷 者 網 野 榮 大阪市北区堂山町66

●第三六集 第八号 掲載広告一覽 (掲載順)

日本ポリエステル  
東洋リノリューム  
セメダイン  
淀川製鋼所  
伊奈陶器  
東洋陶器  
オリエンタルメタル製造  
山本建材社  
トルコセンター  
日本ドアーチエック製造  
関西スタイル商会  
ライト製作所  
田中工業  
久保商店  
大阪城口研究所  
大阪電気商会  
齊久工業  
齊藤省三商店  
三機工業  
須賀工業  
西原衛生工業所  
建材社

栄興商会  
三晃商会  
高砂熱学工業  
東洋キャリア工業  
理研鋼機  
近畿電気工事  
浅海電気  
工藤電気  
中央電気工業  
朝陽電気  
野上工業所  
明青工業写真  
大日本硝子工業  
日本シャッター製作所  
岩元工業  
内外土木建材社  
中川ラス製作所  
田中風呂製作所  
大阪コンベス建材社  
田村商会  
大島応用化学工業  
三高製作所

汎建製作所  
織本建築設計計算事務所  
三舟窯業  
内外工業  
矢橋大理石商店  
福昌  
今西建築デザインルーム  
東邦商会  
東京鋼板工業  
三幸商会  
鈴木シャタア商会  
大日本特殊建材工業所  
大正鉄筋コンクリート  
室谷商店  
大阪耐火ボード  
林塗装店  
福屋工業  
吉田芳雄商店  
樫野石灰工業  
杉田組協栄  
金剛商会  
川岸窯業  
大仏組  
ナニワ瓦

正興商会  
関西三星タイル会  
岩住鉄工所  
関西機械建材社  
奥山化工業  
大阪建材工業  
大新物産  
藤森工業  
オプトカメラ  
日本瀝青工業  
浪速建材工業  
玉置産業  
ダイハツ工業  
油脂化工社  
日本セメント防水剤製造所  
日本レイヨン  
荏原製作所  
田島応用化工